

AREA CAMPUS MOGAMI

エリアキャンパスもがみ 研究年報 2023



山形大学
Yamagata University

エリアキャンパスもがみ
研究年報 2023

「エリアキャンパスもがみ研究年報 2023」 発刊にあたって

エリアキャンパスもがみキャンパス長 大西 彰正

「エリアキャンパスもがみ」は、山形県の北東の内陸部に位置する最上地域の、人・文化・歴史・自然などをすべてキャンパスとする全国でも珍しい高等教育の場です。2005 年の発足以来、最上広域圏 8 市町村と山形大学の連携の下、途絶えることなく運営されてきました。このキャンパスで開講される基盤共通教育科目「フィールドラーニングー共生の森もがみ」は、累計で 3,706 名もの学生が履修し、山形大学と地域社会との共育・共創の場として成長を続けています。この授業の大きな特徴は、学生たちが地域の人々と共に考え協働して地域課題に向き合う中で、最上地域の自然や文化、歴史、そしてこれらを守り伝える人々の人間性をも学ぶことにあり、このことは学生の地域課題の発見・解決能力の育成にとどまらない、人間形成や地域理解の深化、さらには各地域の人材育成と活性化などにも繋がる成果をもたらしてきました。

今回の研究年報は、2023 年度の「エリアキャンパスもがみ」の活動を記録したもので、第 17 号となります。第 1 部には事業内容の概要を記しています。第 2 部は「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の履修生が作成した授業記録となっており、今年度は、新庄市、金山町、最上町、舟形町、真室川町、大蔵村、鮭川村、戸沢村においてそれぞれ 1 つのプログラムが実施され、総計で 76 名の学生が地域の皆様と様々な学習を行いました。この記録には、各プログラムで活動した学生たちが、何を学び、何を感じ、何を考えたかが率直に記述されています。それぞれのプログラムで設定した課題に若者らしい発想力と視点で主体的に取り組み、自らの課題発見・解決能力や人間性を高めるとともに、地域社会への理解を深めたことが読み取れます。この授業で身に付けた能力と貴重な学習体験は、必ずや学生たちの長い人生の糧となることでしょう。

「エリアキャンパスもがみ」は、最上広域圏 8 市町村の皆様の高等教育に対する熱い思いと、地域創生・次世代形成を掲げる山形大学の教育理念が呼応して発展を続けてきました。これからもこの「エリアキャンパスもがみ」での共育・共創事業が、最上地域の皆様とともに継続して実施できますようどうか変わらぬご支援をお願い申し上げます。

目 次

「エリアキャンパスもがみ研究年報 2023」発刊にあたって エリアキャンパスもがみキャンパス長 大西彰正	2
---	---

第一部 研究年報

第1章 エリアキャンパスもがみ令和5年度事業の概要	5
第2章 初年次教育 フィールドラーニングー共生の森もがみ	7
第3章 もがみ専門科目	11

第二部 授業記録

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」プログラム	21
フィールドラーニング担当教員コラム	79

エリアキャンパスもがみ関係者名簿	86
------------------	----

第一部 研究年報

第1章 エリアキャンパスもがみ 令和5年度事業の概要

I エリアキャンパスもがみの概要

1 はじめに

山形大学は、過疎化の進む最上広域圏全体をキャンパスに見立てて教育・研究・地域貢献を展開する「エリアキャンパスもがみ」を平成16年度に発足させた。

エリアキャンパスもがみでは、「自然と人間の共生」をキーワードに、大学と最上広域圏双方の人材育成と活性化を図ることを目的に、自然や伝統文化を活用した実践的活動について、その知識や知恵、ノウハウを、最上広域圏全体で共有・活用するだけでなく、地域の教育資源として教育活動に活用している。

特に教育活動については、本学の初年次教育の展開に活用しており、本学の学生は、社会性や課題探求能力を身につけるために、地域の講師と子供から老人までの幅広い世代の住民を交えた現地体験型授業や課外活動に参加している。

2 これまでの経緯

県の北東部に位置する最上広域圏は、南西に最上川が流れ、一部盆地を含む大部分が山岳・丘陵地帯の自然豊かで市町村毎に独自の文化を有する農山村地帯である。その一方で、8市町村のうち6町村が「過疎地域自立促進特別措置法」に基づく過疎地域に指定されている状況にある。

また、最上広域圏は大学・短大が一つもない県内唯一の広域圏であり、山形大学は、平成16年度に最上広域圏の8市町村と包括協定を締結し、広域圏全体をキャンパスとする「山形大学エリアキャンパスもがみ（以下、YAM）」を設立し、総合大学として組織的な地域貢献の挑戦を開始した。

YAMは、地域の自然や伝統文化などを教育資源として活用し、学生自らが現代社会の課題を発見し、探求し、解決するためのフィールドとして好適な場である。YAMの開設以降、最上広域圏を活性化させる様々な事業（以下、それらを総称して「もがみ活性化事業」と呼ぶ）を立ち上げ、多くの学生が課外活動として参加し、学生と住民の交流の中から、地域活性化の新たなシーズが生み出されてきた。

平成17年、大学は、YAMのこれまでの活動を振り返り、学生に社会性を持たせ、広い視野の下、課題探求能力を伸ばしていくには、柔軟性に富んだ初年次の学生を対象とした基盤教育の授業を立

てることが必須である、と考えた。

そこで、地域からの申し出もあり、地域の方を講師として、学生と住民、特に子供たちが現地で一緒に活動することができる初年次の全学生を対象とした基盤教育授業『フィールドワーカー共生の森もがみ』を平成18年度から開講することとした。

この初年次の基盤教育授業を骨格として、それに学部の専門教育の授業と課外活動を連携することによって、地域に根ざした実践的な課題探求能力を育成することになった。

なお、これらの取組については、「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト」として、平成18年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択された。



「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト概念図」

3 目標

エリアキャンパスもがみでは、次の2点を目標に掲げ活動を行っている。

（1）大学生に対する教育

- ①過疎化、少子高齢化、環境などの現代社会が直面する課題発見・探求・解決能力を向上する。
- ②社会性を向上する。
- ③コミュニケーション能力を向上する。
- ④プレゼンテーション能力を向上する。
- ⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出

する。

(2) 最上広域圏の人材育成と活性化

①未来遺産の共有・活用・発展を図る。②地域の自然や文化を子供たちに伝える。③子供たちの地元に対する誇りを抱かせる。④情報発信力を向上する。⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出する。

4 運営体制

YAMの運営体制は、小白川キャンパス長がエリアキャンパスもがみのキャンパス長を務めており、YAMの運営の中核をなす「運営会議」は、山形大学と最上広域圏から選出された委員で構成されている。

山形大学の運営委員は、キャンパス長、教員7名、事務職員1名、で構成されており、最上広域圏の運営委員は、各市町村の教育長8名、文化団体等の代表3名で構成されている。

また、現地に最上広域圏の事務職員が常駐する「最上事務局」を設置し、YAMを円滑に運営するための、橋渡し役を担っている。

本プロジェクトの関連経費は、各事業の内容に応じて大学と各自治体で応分に負担している。また、地元講師の謝金等は市町村が負担する寄付授業となっている。

5 教育改革への有効性

(1) 教育課程、教育方法等の創意工夫

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」は、正規の授業を地域の人材育成活動と連結させている点に特色があり、学生は、初年次の授業で地域に出て、社会性と課題探求能力を身に付け、それを大学の在籍期間を通して、専門教育と課外活動で伸ばしていくことができる。そのために、本授業では、次のような創意工夫を行っている。

- ①授業そのものが地域のニーズに基づいたもので構成され、地域の活性化に直接結びついている。
- ②現地で行う体験型学習となっている。
- ③現地にいるその道の達人が講師として直接指導に当たる。
- ④開講日を土・日曜日にするによってたくさんの住民が参画できる。
- ⑤学生は子供の指導に関わることによって責任感を持つ。
- ⑥この授業は、「大学コンソーシアムやまがた」の単位互換協定に基づき県内の大学・短大生が履修できる。

(2) 期待できる成果等の教育改革への有効性

地域活動が活発になればなるほど、教育面での受益者は増すという相乗効果が期待できる。授業「共生の森もがみ」で、学生は世代の異なる住民と交流することによって、社会性が増し、「過疎化」「少子高齢化」「環境」などの現代的な問題群と向き合うこととなる。多くの学生にとって、このような日本が直面している現代的な問題に對峙し、それを考えることは、これからの我が国の発展のために大きな意義がある。

II 事業実施計画

1 基本的な年間スケジュール

- 4月 「フィールドラーニングー共生の森もがみ」と「もがみ活性化事業」開始
- 7月 エリアキャンパスもがみ運営会議
フィールドラーニング活動報告会
- 10月 エリアキャンパスもがみ懇談会
- 3月 もがみ担当者会議
研究年報刊行

2 令和5年度実施事業

(1) 教育活動

①初年次教育

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」
8プログラム

②主なもがみ専門科目

- ・地域教育文化学部「教育実践実習」新庄市
- ・大学院教育実践研究科（教職大学院）
「学社融合の実践と課題」戸沢村

など

(2) もがみ活性化事業

①山形大学見学旅行

舟形中学校14名が令和5年11月10日に大学見学として訪問

②フィールドラーニング応用編

「学生チャレンジプロジェクト」に戸沢村のプログラムを履修した学生(4名)が応募し採用された。その後、戸沢村で活動し、令和6年2月の学生主体型授業「合同成果発表コンテスト」にも出場した。

(3) 広報事業

- ・エリアキャンパスもがみ研究年報

第2章 初年次教育

フィールドラーニングー共生の森もがみ

I 意義

本授業は、山形大学の全学共通教育である基盤教育の正規の授業として開講された。本授業の特色は、①初年次教育、②全学共通教育、③現地体験宿泊型学習、④少人数教育、⑤山形大学の理念「自然と人間の共生」の具現化、⑥自然豊かな農山村地の活用、⑦現地講師による指導、である。

初年次教育は、通常、アメリカで初年次の学生の退学を防ぐことを目的として、大学への適応を意図した教育プログラムを指す。初年次学生の退学者が少ない日本ではおかれている状況がアメリカとは大きく異なっており、そこから必然的に初年次教育はアメリカのそれと異なったプログラムとなる。

我々がこの授業を初年次教育として強く意識しているのは、本学の学生は一年目に基盤教育を受講し、その後は各学部で専門課程を受講することから、専門に入る前に学問の専門性を超えた社会に対する問題意識を持ってもらいたいということである。

混沌とした社会においては、これが問題ですよというように、はっきりとしたかたちでは現れてはくれない。急激に変化する時代にあって、我々の知恵と感受性で問題を主体的に拾い出していくしかない。それが現代の市民に求められている。社会に主体的に関わっていくためには、自分で問題を発見していく能力を養っていかねばならないのだ。この授業の教育目標は、社会の様々な事象の中から学生自らが問題を発見することにある。

山形大学は6学部からなる総合大学であるが、6学部の学生が交流する機会はそれほど多くない。学生は学生の交流の中から自らを発見していく。本授業は全学共通教育の特性を活かして、学部を越えた学生の交流を図っている。

現代の若者は体験が少なくなっている。大学教育において意図的にこの体験を増やしていくしかない。リアルな体験を通して、学生の思考を深め、社会性を涵養させ、行動的にしていくことが求められている。そこでこの体験を濃密にするために、現地体験宿泊型学習を導入した。土・日曜日の宿泊型にすることによって、平日の授業と競合することがない。また、食事や宿泊を共にすることによって、人間関係が濃密になる。

この授業は10名程度の少人数教育となっており、地域の講師の人々との交流が密になり、教育効果もあがるように設計されている。

山形大学の理念である「自然と人間の共生」を

教育に反映するために、この自然豊かな「エリアキャンパスもがみ」を活用する。しかし、同時に、そこは少子高齢化、過疎化の進む現代の課題の先進地域でもある。こうして、学生が多くのことを考える場になっている。

この授業の大きな特色は、現地の達人を講師とし、この達人を中心とした授業を地元の方と大学で設計し、実施している点にある。大学という学問に立脚した知の拠点、学問的知を越境し、社会的、日常的、実践的な知に踏み込む教育活動でもある。このことは教育の主役を教員から学生に重心移動したことの一つの表れでもある。つまり、学生にいま必要なことは何なのかを問い詰めていけば、授業において様々な可能性を試していかなければならない時代に入ったということが考えられる。学生は現地講師を通して、コミュニティということを意識し、故郷や家庭、そして自己を再考するきっかけとなっている。

本授業のもう一つの重要な側面は、この授業を学生教育だけでなく地域活性化のために活用するという点にある。では、この大学の授業が地域活性化にどのように貢献するのであろうか。

一つには、大学がなく若者があまりいない地に学生が入るだけで活性化される。学生が入ることは授業でなくてもいいのだが、正規授業でもなければ学生が観光地でもない遠隔地に集団で入ることはまずない。

二つ目は、授業の中に子どもを含めた地域住民との交流が入っており、学生と地域住民との交流が密になる。そこには、大学生による地域の子もたちの指導なども組み込まれている。

三つ目は、全国から集まった大学生の新鮮な眼によって、地域が再発見されていく。そのことによって、地域の人々に地元の誇りが醸成される。

四つ目は、学生によってまちおこしなどの具体的な提言がなされる。

この授業によって上記のような地域活性化が考えられるが、実際にはことはそううまくは運ばない。授業に参加する学生は一年生であって、学問的な専門性を身につけているわけではない。そこで、専門的な視点からの提案を求めることはほとんど不可能である。また、現実には熱意のない学生が参加することも十分に考えられる。

この授業を大学と地域の双方に利益がある形に高めていくためには、これからのたゆまぬ授業改善が必要である。特に、上記の特性を踏まえた綿密な授業設計が重要である。

II 令和5年度シラバス

【授業名】フィールドラーニング

ー共生の森もがみ

(領域：山形から考える)

【担当教員】阿部宇洋、橋爪孝夫、菊田尚人

【授業概要】

・授業の目的

自然豊かな山形県最上地域でのフィールドラーニングを通して、地域の文化や歴史、自然、環境等だけでなく、過疎化、少子高齢化等の現代日本が直面する諸問題を地域の人たちと共に学び、実践的な視点から知識を獲得し、山形から日本、世界及び過去から、現在、未来の空間及び時間軸で現象を把握する力を養う。

・授業の到達目標

この講義を履修した学生は、

- 1) 地域から与えられた課題を発見できる。

【知識・理解】

- 2) 地域で発見した課題を探求することができる。

【知識・理解】

- 3) 課題を議論することで、コミュニケーションできる。

【態度・習慣】

- 4) プレゼンテーションを行うことができる。【技能】

- 5) 行動力、社会性の基礎的な力を身につけることができる。【態度・習慣】

【授業計画】

・授業の方法

この授業は、各自が以下のプログラム(①～⑧)から1つを選択して受講する。受講の流れは以下のとおり。

- 1) オリエンテーション
- 2) 事前学習(WebClass)
- 3) 【1泊2日フィールドラーニング(1回目)】
- 4) 中間学習(WebClass)
- 5) 【1泊2日フィールドラーニング(2回目)】
- 6) 最終レポート(WebClass)
- 7) 活動報告会に向けた説明会・練習、活動報告ポスター作成
- 8) 活動報告会での発表

[プログラムリスト]

- ①(新庄市)万場町商店街PV作り ～SNSを活用したまちづくり～
- ②(金山町)かねやま旅情
- ③(最上町)最上町の木を使った楽器を全世界に広めよう
- ④(舟形町)里地里山の再生I
- ⑤(真室川町)子どもの自然体験支援講座
- ⑥(大蔵村)知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて
- ⑦(鮭川村)里山の自然を調べよう環境保全活動
- ⑧(戸沢村)里山保全とSDGsを学ぶ

以上、8プログラム

・授業日程

- ①4月4日(火)～4月11日(火)プログラム説明会・WebClass(プログラム選択希望調査を同時に行う。)
- ②4月12日(水)当選者発表
- ③4月21日(金)16:30～18:00 オリエンテーション(プログラム顔合わせ・役割決め・フィールドラーニング上の留意点について)
- ④5月13日(土)～7月2日(日)フィールドラーニング活動期間(土日2回、計4日間)
- ⑤7月28日(金)16:30～18:00 活動報告会

【学習の方法】

- 1) 安全第一を心がけ、積極的に活動に参加してください。
- 2) 専門分野の方法論や数値的なデータだけではなく、フィールドラーニング(あるく・みる・きく)で集めたデータをもとに考えるよう心がけてください。「現場で考える」「体で考える」(もちろん頭も使います)ことが合言葉!そして、自分の想像力を大事にしてください。
- ・学部の行事や、サークル活動(大会)と予定がバッティングしないように気をつけてください。必ず確認すること。
- ・メールでのお知らせや掲示板での情報がありますので、必ず確認してください。

・授業時間外学習へのアドバイス

- 1) オリエンテーションで配布される「しおり」を熟読し、内容を理解して授業に臨んでください。
- 2) オリエンテーションでの詳細説明に基づき①事前学習、②中間学習、③最終レポートに取り組んでください。また、フィールドラーニング中はこまめに記録ノートを作成するよう努めてください。
- 3) フィールドラーニング終了後、活動報告会に向けて準備を進めてください。方法については説明会を開催し、発表指導を2回行います。

【成績の評価】

・基準

- 1) 地域での活動により課題を発見し、探求により深め、活動報告会の発表により他者に伝える事が出来たかどうかを評価の基準とする。
- 2) 一連のグループ学習の中でコミュニケーション能力や主体的学習力、社会性などを発揮できる事を評価の基準とする。
- 3) 現地講師による活動評価、受講態度や、指示に対する達成度を数値化しそれを参考に教員が相対的に評価を実施する。

・方法

前提として、現地活動にはすべて参加していること、また最終レポート提出が基本条件。

フィールドラーニング活動への参加度 40%
 活動報告会での発表の完成度(ポスター含む) 30%
 現地講師による活動評価 20%
 受講生による相互評価 10%

【学生へのメッセージ】

フィールドラーニングとは、山形大学オリジナルの学術用語で、学部専門で学ぶであろう、フィールドワークの入門編として設計されました。フィールドワークでは全て、みずからの関心で調査する事に対して、フィールドラーニングとは、提示されたプログラムを通して、課題発見などを行なう教育プログラムになっています。最上地域は、学生諸君を温かく迎え入れてくれるでしょう。是非、もがみを見て、聞いて、感じて(味わって)、 「共生の森」のパワーを体全体で吸収してきてください。この講義をきっかけに、多くの学生が最上地域での課外活動に参加してきました。教員を目指す学生や、地域でのボランティア、地域活動を体験したい学生にはお勧めです。本授業は宿泊や実技体験を伴いますので、参加費が必要となります。(詳細は、プログラム説明会の際に説明します。)

【オフィスアワー】

原則として Webclass のメッセージで質問を受け付けます。対面のオフィスアワーとして「阿部研究室」(基盤教育1号館2階東側)において、予約制で受け付けます。会議や出張等で不在にすることもあるため、確実に面談したい場合は事前に Webclass のメッセージで予約をお願いします。3人の教員が担当していますが、基本的には阿部へ連絡をください。

Ⅲ 受講者数

プログラム No.	開講プログラム	受講者
1	万場町商店街 PV 作り ～SNSを活用したまちづくり～	5人
2	かねやま旅情	8人
3	最上町の木を使った楽器を全世界に広めよう	8人
4	里地里山の再生 I	11人
5	子どもの自然体験活動支援講座	15人
6	知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて	10人
7	里山の自然を調べよう	5人
8	里山保全とSDGsを学ぶ	14人

Ⅳ 活動報告会

フィールドラーニングー共生の森もがみ
 日時：7月28日(金)16:30～
 場所：基盤教育2号館222教室



Ⅴ 授業改善アンケート結果について

本年度に実施した授業改善アンケートについて、69人(回収率90.7%)から回答があった。

アンケート結果については、表のとおりであり、基盤共通教育科目全体の平均値と比較してみると、総じて学生の満足度が高いことが読みとれる。

表:「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の授業改善アンケート結果と基盤教育科目全体の平均値との比較

質問項目	FW	全体平均
この授業を意欲的に受講しましたか	4.9	4.4
この授業の内容を理解できましたか	4.9	4.5
考え方、能力、知識、技術などは向上しましたか。	4.8	4.5
自ら学ぶ意欲は湧きましたか。	4.7	4.3
自ら進んで課題を発見し、探求する力が身につきましたか。	4.8	4.3
教員に熱意は感じられましたか。	4.9	4.5
考え方(教授法)はわかりやすかったですか。	4.7	4.4

教員の一方的な授業ではなく、コミュニケーションはとれていましたか。	4.8	4.1
板書や配布物、提示資料は読みやすかったですか。	4.7	4.5
この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか。	4.9	4.5

第3章 もがみ専門科目

I 地域教育文化学部

“新庄市での教育実習（もがみ教育実習）”

山形大学大学院教育実践研究科 江間史明

1 「もがみ教育実習」の17年の歩み

新庄市での教育実習プログラムは、学生が、実習期間中（3週間）、新庄市内に合宿して実習を行うという現地滞在型の教育実習である。「小規模から中規模までの学校を実習校に選べる」など、学校での授業実習に加えて、広く地域と関わって教育実習を行えるという特徴を持つ。この教育実習は、新庄市教育委員会の全面的なバックアップによるものである。この教育実習で学んだ学生の中から、最上地域の市町村で初任教师として第一歩を踏み出す学生が生まれている。地域と大学が連携し、地域を担う教師を育てるという取組が、具体的成果を生みつつあると言える。

この教育実習は、2006(平成18)年度にスタートし、次の表1のように実習生が参加してきた。

表1 新庄市の教育実習実施状況

年	2年基礎実習 (1週間)	3年実践実習 (3週間)	栄養 実習	合計 (人)
2006	8			8
2007	18	10		28
2008	15	11		26
2009		14		14
2010		14		14
2011		12		12
2012		18		18
2013		20	2	22
2014		25	4	29
2015		20	6	26
2016		24	4	28
2017		12	6	18
2018		16	6	22
2019		21		21
2020		4		4
2021		8(3)		11
2022		7(2)		9

()内は、4年生の副免実習で外数。

2009(平成21)年度から、基礎実習(1週間)は、附属学校での実施になり、新庄市教育実習では実

施しなくなった。栄養教育実習は、2013(平成25)年度より2018(平成30)年度までの実施であった。

2020(令和2)度は、新型コロナウイルス感染症の世界的感染に直面した。2月末からの全国一斉休校は3ヶ月に及び、大学でも授業はオンラインとなった。新庄市教育実習でも、合宿形式は、集団生活が密な環境となるため実施できなかった。2020年度は自宅から実習校に通える学生4名のみでの実施となった。2021(令和3)年度は、新型コロナウイルスの感染再拡大への対応から、自宅と新庄市のビジネスホテルから通える学生に限っての実施となり、3年生8名(小学校)と4年生3名(中学校)の11名が実習を行った。2022(令和4)年度は、新型コロナウイルス感染症に対応しつつ、山屋セミナーハウスを利用する教育実習であった。

2 新庄市教育委員会からの申し入れと実習生

2023(令和5)年度の新庄市教育実習については、2022(令和4)年12月6日付で、新庄市教育委員会よりエリアキャンパスもがみのキャンパス長あてに「山形大学地域教育文化学部教育実習の新庄市での実施について(要望)」(新学発第5401号)という文書が、提出された。

要望書は、2022(令和4)年度教育実習において、新型コロナウイルス感染症への対応で実施が限定的になった点に言及しながら、「実習校においても、教育実習生を受け入れることを大きな刺激として受け止め」ていたことを述べ、「新庄市ならではの少人数指導、小中一貫教育、地域と密着した教育活動」を活かし、令和5年度も引き続き新庄市での教育実習を継続実施するよう要望していた。新庄市教委は、平成25年度より教育実習の宿泊施設である山屋セミナーハウスの使用料(一人あたり1人1030円×20泊)を予算化して、充実した教育実習ができるように、市をあげて大学との協力体制の整備を行っている。この要望書を受け、12月14日にもがみ実習オリエンテーションを行い、参加者を募った。その結果、2023年度の新庄市の教育実習には、3年生(小学校9名)と4年生(中学校2名)の合計11名が希望した。

2023年5月には、新型コロナウイルス感染症の法的な位置付けが変わり、アフター・コロナの社会での教育実習がスタートした。

3 2023年度教育実習への準備と指導体制

2023(令和5)年度の新庄市の教育実習は、次のように行われた。

2022年8月28日(月)～9月15日(金)3週間
 ○教育実践実習A(3年:小学校実習9名)
 ○教育実践実習B(4年:中学校実習2名)

小学校実習校は、5校(新庄小、日新小、升形小、明倫学園前期、萩野学園前期)、中学校実習校は、2校(新庄中、日新中)であった。

なお、実習期間中の宿泊場所は、男子学生も女子学生も山屋セミナーハウスを利用した。交換の要望があった通勤に使う自転車を更新すると同時に、雨天時には、タクシーの乗り合わせを利用する実習校への通勤体制を整えた(実利用4日間)。

この実習への準備として、2023年7月31日(月)に「山形大学エリアキャンパスもがみ教育実習打合せ」を、新庄市民プラザで行った。江間が実習生と参加した。中西正樹学部長からは、オンラインで大学からの挨拶をいただいた。ここが、学生と実習校との顔合わせの場所になる。全体打合せのあと、学生は、自分が実習を行う学校を訪問して打合せをした。その後、宿泊場所となる山屋セミナーハウスを見学し、実習への準備をすすめた。



打ち合わせ会の様子 7月31日

教育実習期間中の指導体制については、新型コロナウイルス感染症への対策から、実習校が指導を希望する場合には、地域教育文化学部の教員が研究授業を参観し、事後研究会にも参加することとした。これは、山形市など村山地域の実習校と同様の指導体制であった。

4 「地域懇談会」の再開

これまで、新庄市教育実習の特色の一つとして、地域懇談会を位置づけてきた。懇談会には、新庄市教育委員会、各実習校の校長および保護者代表者が参加し、大学側からは、江間が参加してきた。学生にとっては、学校内の教育実習に加えて、学校と地域の関係を直に学ぶことのできる貴重な機会であった。しかし、2020～2022年度は、新型コロナウイルス感染症への対策から、地域懇談会を中止せざるをえなかった。だが、2023年度、3年ぶりに地域懇談会が再開された。

地域懇談会は、9月8日(金)の夕方に、新庄市民プラザを会場に開催された。高野新庄市教育長の挨拶のあと、「地域とのつながりを大切にした活動」をテーマに、実習生、校長、保護者をまじえたグループで意見交換が行われた。



地域懇談会の様子 9月8日

新庄市では、ふるさと学習などを学区単位で進めており、文化伝統、生活産業、自然環境、町づくりなど素材は豊富にある。グループの協議の中では、地域から見た学校の敷居の「高さ」や子どもに関わる人の年代が狭いことが話題になった。素材自体より、それを媒介にして子どもが異なる年代の人と交流が広がることの意味についての指摘があった。学生を真ん中において、学校と地域が久々に対面でじっくり向き合う場になっていた。

5 学生の受けとめと今後の課題

このように、2023年度は、新型コロナウイルス感染症から通常の社会活動に戻る過渡期の局面での教育実習の実施となった。新庄市の実習に取り組んだ学生の感想は、後述の資料1と資料2の通りである。では、学生は、2023年度の実習をどう受け止めたのだろうか。

資料3の実習生の今回のアンケートは、回収数10(回収率91%)であった。アンケートからは、次の3点を指摘できる。

第一に、実習の前と後で、教職への意欲・関心(問2)が、「大幅に高まった」8名(80%)「少し高まった」2名(20%)とする学生がいたことである。教職への強い意欲を示した点で、本実習が、教師を目指す学生に対して高い教育効果を持ったことを指摘できる。

第二に、実習を体験して勉強になった点(問4)について、「②授業の進め方(板書・発問・展開・等々の仕方)」を回答者の9(90%)があげている。それに「④学級経営の仕方(個性にあわせた指導の仕方等)」が7名(70%)と続いている。これは、実習生が、授業の基本的な進め方とあわせて、個々の児童生徒へ向き合い方を、同時に学んだことを

示している。学生の感想には、次の指摘があった。

授業の中で、児童の様子や反応、考え方をしっかり見取りながら、児童の思考を活発化できるように意見を拾ったり、反応を見てその先の展開を考えたりすることが重要であることを学び、自分の課題でもあることが分かりました。

(資料1 杉澤虹風さん)

私自身も子どもが考えを伝え合う場面を授業で実践しようと、グループワークや全体で考える場を数多く取り入れました。しかし、意見を話す子どもが固定化し、協働的に学ぶ雰囲気をつくることができませんでした。(資料2 芳賀向希さん)

2人の実習生が、子どもを一括りにして動かすのではなく、一人一人に目を向けることの大切さと難しさに気づいていることを指摘できる。

第三に、回答者の9名(90%)が、「最上地域の学校で実習ができたこと」を「よかった」と回答している(問10)。7名が「保護者や地域の人を交えた懇談会」、6名が「指導主事による学習指導案等への指導」を「よかった」としている。山屋セミナーハウスについては、次の指摘があった。

「宿泊所は、黒板を使ってみんなと一緒に模擬授業をしたり、広くて温かいお風呂が作られてあったり、広いキッチンで自炊したり、冷房があったりと最高の環境でした。」

最後に、来年度への課題についてである。

今年度は、新庄市だけではなく、本学の教育実習期間中に、実習生が新型コロナウイルスに感染するケースがあった。新庄市の場合は、実習生が教育実習を中断し、中断した分の教育実習を当初の実習期間を延長して実施することができた。学生の希望にそった対応ができたことについて、新庄市教委と実習校に感謝申し上げたい。

実習校のアンケートには、実習前に大学で指導しておく点について特段の課題の指摘はなかった。さらにということで、「様々な教科を学習しておくことで、授業や教材研究が具体的になると思います」という指摘があった。

なお、山屋セミナーハウスの利用については、学生からいくつか改善の要望がでていいる。特に、今年度は、実習中の週末にほかの団体からの予約でセミナーハウスから学生が移動をせざるをえず、その移動で「満足に休息がとれなかった」との指摘が複数の学生からでた。この件については、新

庄市教育委員会との打ち合わせで改善を図りたい。

また、新庄市の教育実習だけではなく、実習校への学生のICT機器の持ち込みについての要望もでていいる。山形市の教育実習でも同様の課題があるので、情報セキュリティとの関係でできることとできないことを整理していきたい。充実した教育実習とるように、新庄市教育委員会と協議をしながら進めていきたい。

資料1

萩野学園(前期)での3週間を振り返って

児童教育コース3年 杉澤虹風

私は今年度、新庄市立萩野学園(前期課程)で3週間の教育実習をさせていただきました。義務教育学校での実習だったため、小学生の授業だけでなく中学生の授業も見学させていただき、多くの子どもたちや先生方と関わりながら実習を行うことができ、大変充実した3週間となりました。この実習を通して感じたこと、学んだことを三つ述べたいと思います。

一つ目は、児童との日常的な関わり大切さです。教育実習中はサポートの形で授業中に児童と関わる場面が多くありました。始めは、文章を書いたり問題を解いたりする際に手が止まっていたり困っていそうな児童に対して、声がけを行ってもスルーされてしまう場面がありました。しかし、先生方から、日常的に関係性を築いていくことが授業にも大きくつながっていくことを学びました。それからは、その児童を中心に授業外での関わりをより意識的に大切にすることを心がけました。すると、授業の中でも始めは無反応だった児童も私を頼ってくれるようになったり、文章を書くときなどにも一緒に頑張ろうとしてくれたりと、私に関わった時の姿に変化がありました。

また、先生方も日常生活から児童と深く関わる中で特性などを理解し、授業においても授業外においてもそれぞれの児童に適したサポートを行っていたり、少しの変化に気付いて声をかけたりしていました。児童と関係性を築くだけでなく、その中で児童の様子を捉えて理解し、それぞれに合った支援をすることの大切さを学ぶことができ、

私自身も児童一人一人を見ていく力をつけていく必要があることを実感しました。

二つ目は、授業を作ることの難しさと奥深さです。教育実習中は、様々なクラスでの授業を見学させていただきました。児童のつぶやきや発言を的確に捉え、児童の思考に寄り添いながら、授業を展開しており、児童も生き生きと学習していたことが印象的でした。私は授業研究で道徳の授業を行いました。準備の段階で、題材の中に教材としての価値を見出し、それに合った手立てを考えることに非常に難しさを感じました。発問の吟味や、それぞれの展開にどんな意味や目的を持たせるかを丁寧に試行錯誤することの大切さを学びました。また、実際に授業をした際には、多くの先生方からフィードバックをいただき、私が授業中に捉え切れていなかった児童のつぶやきや話し合いの様子が多くあることを実感することができ授業の中で、児童の様子や反応、考え方をしっかり見取りながら、児童の思考を活発化できるような意見を拾ったり、反応を見てその先の展開を考えたりすることが重要であることを学び、自分の課題でもあることが分かりました。ました。

三つ目は、児童の学びは様々なものに支えられているということです。今回の実習では義務教育学校にいらっしゃる小・中学校の先生方や、栄養士、養護教諭の方など多くの方からお話を伺う機会がありました。また、もがみ実習ならではの、「地域懇談会」で新庄市内の小中学校の校長・教頭先生や保護者の方とお話する機会もいただきました。学校の教育課程や、研究の方針についてお話しいただき、学校全体として子どもたちの学びが考えられていることをより実感できました。また、教師だけでなく、保健や食の分野、地域と学校の連携など、それぞれの立場の方々の、子どもたちの育ちについての考え方に触れ、このように関わっている方々がいるからこそ、子どもの学びの場が守られていることが分かりました。子どもの学びをもっと広い視野で捉えられるよう、勉強していかなければならないと感じました。

教育実習では多くの学びがあり、私自身がこれ

から頑張っていきたいことについても明確にすることが出来ました。教育実習の中で、校長先生からいただいた、「教師とは『教える』よりも一緒に過ごす中で、子どもたちにあらゆることを気付かせていく存在である」という言葉が最も印象に残っています。教える力だけでなく、人としての成長がより良い教師になる上で重要であることを学びました。教師としての技量だけでなく、人としてもこれから成長し続けられるよう、あらゆることに挑戦していきたくです。

最後になりますが、お忙しい中実習生として温かく受け入れてくださった萩野学園の先生方や児童生徒をはじめ、教育実習を支えていただいた新庄市教育委員会の皆様、その他教育実習に関わっていただいた皆様に深く感謝申し上げます。教育実習での経験を糧に、小学校教師という夢に向かって精進してまいります。



資料 2

日新小学校での3週間を振り返って

児童教育コース 3年 芳賀向希

私は今年度、新庄市立日新小学校で3週間の教育実習をさせていただきました。全く新しい環境で、不安と期待が入り交じる中で始まった実習でしたが、子どもたちや先生方が温かく迎えてくださりました。授業実践や生活での関わりを通して、心から実習を楽しんで多くの学びを吸収できました。3週間を経て得た学びを、2点挙げます。

1点目は、子どもにとっての「学びたい」を探究する大切さです。実習を通して、配当学年だけでなく低学年から高学年まで多くの授業を参観させ

ていただきました。子どもの姿を見る中で、一人ひとりの目線や学びの向かい方の違いに気付くことができました。課題に対して、書きながら考える子ども、聴きながら考える子ども、周りの友だちと考える子ども、一人で黙々と取り組む子どもとそれぞれの学び方がある中で、先生方は、子ども一人ひとりの考えを尊重して伝え合う場を設け、子どもの考えを中心に授業を展開されていました。参観したすべての学級で、自分の考えを伝え合う子どもの姿があり、数多くの児童が授業の中で発言をしていました。私自身も子どもが考えを伝え合う場面を授業で実践しようと、グループワークや全体で考える場を数多く取り入れました。しかし、意見を話す子どもが固定化し、協働的に学ぶ雰囲気をつくることができませんでした。意見の発信が多い子どもはグループワークや全体交流の場の中心になり、その子どもの考えも集団の中心になります。教師である私は、無意識に自分の考えに近い子どもの意見を取り上げて授業を展開していました。意見を言うことが苦手な子どもや自分で考えたい子どもにとっては、複数の人と一緒に話して考える活動は必ずしも正しいものではないと気付きました。それぞれの子どもにとっての「学びたい」を実現できる授業を展開するために、全員が考えを表現できる環境づくりが必要であると考えます。グループワークという形に拘らず、子どもが互いの意見を中心に主体的に学びを進めることができる環境をつくることを今後の課題として学び続けます。

2点目は、教師の一生懸命な姿を子どもに見せることの大切さです。実習を通して、先生方の澁刺とした姿が非常に印象的でした。先生方を見て子どもたちも澁刺としていて、私自身も先生方の姿に感化され、楽しく生活することができました。授業において、子どもの素直な考えに向き合い、共に考える姿、中間休み等に子どもと一緒に遊んで密にコミュニケーションをとる姿を見て、先生としての子どもとの信頼関係を築くために一緒に時間を多く作る大切さを学びました。先生が子どものやりたいことに一緒に取り組んだり向

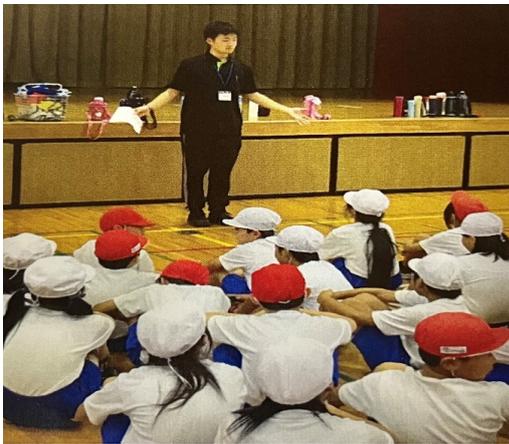
き合ったりする姿があることで、子どもは「先生もやろう！」と先生を求め、それが信頼の高まりにつながっていると感じました。私自身も実習の中で子どもとの関わりを続けてきて、遊びの中で見える子どもの様子やその変化を捉え、子どもを理解するきっかけになると実感できました。子どもが遊びの中でどのようなルールを作っているのか、どのように相談しているのかを知り子ども同士の関わりを知ることもできました。教師の姿が子ども一人ひとりの行動の指針となることを実感できたので、教師として一生懸命に学び、遊ぶ姿を見せられる人になりたいと強く思いました。

授業実践やクラスでの生活以外の場面でも多くの学びの場をいただきました。読み聞かせや小中合同の授業研究会及び事後研究会、PTA 会長の方や先生方との地域懇談会、校長先生をはじめとする講話など、校内外で多くの方と触れ合い、非常に多くの学びを得ることができました。特に小中合同の授業研究会では、中学校の先生方も交え授業を参観し、事後研究会にて子どもの姿や授業の作り方について討議を行いました。中学校の先生による教科の専門的な見方を聴いたり、先生方が撮影した子どもの姿を楽しみ、授業のより良い在り方を話し合ったりして授業の見方や子どもの見方について多くのことを学ぶことができました。小学校の先生方による子どもの普段の様子や学習状況についての話と、中学校の先生方による教科の専門的な見方を共有し、合同で授業の良さやよりよい学びを探究していて、両方の視点をもつ重要性を実感しました。

さらに、先に挙げた地域懇談会や総合的な学習の時間、給食の時間を通して、学校と地域の連携の取り組みの様子を知ることができました。地域の食材の調査や給食を通して、地域の食材が学校にとって身近なものになっていたり、地域の方が学校の指導員になっていたりと多様な形で学校と地域が連携していました。人同士や、人との関わりを通して子どもたち自身が地域の良さを知ることにつながり、子どもの学びが増えていく姿を見ることができました。それと同時に学校と地

域の連携の学びの効果を改めて実感できました。

日新小学校での3週間は、現在も鮮明に思い出せるほど濃密で、今まで感じたことのない充実感を覚えました。とにかく楽しみながら日々を過ごし、日常の一つひとつが思い出となっています。これも、日新小学校の子どもたちや先生方が学校の一員として温かく受け入れてくださり、日々ご指導をくださったお陰と感謝しております。改めて、日新小学校の子どもたちや先生方、新庄市教育委員会の皆様に、心より感謝を申し上げます。3週間で得た学びのすべてを胸に、教師になるために学び続けていきます。



資料3

2023 もがみ実習、実習生アンケート

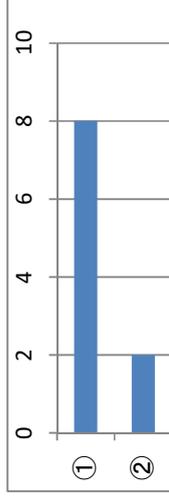
教育実習に関するアンケート【もがみ教育実習】結果
 小白川キャンパス教育実習委員会

以下の質問について該当する選択肢に☑してください。

1. あなたはどこで教育実践実習(以下「実践実習」)を行いましたか。

- ①小学校
②中学校

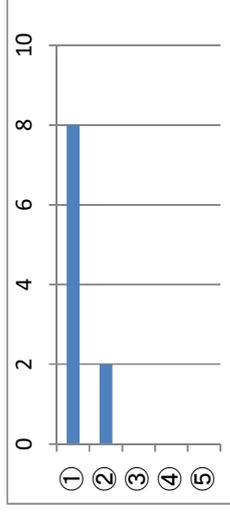
- ①
②
計



2. 教育実践実習(以下、「実践実習」)体験後の教職への意欲・関心の変化

- ①実習前より大幅に高まった。
②実習前より少し高まった。
③実習前とあまり変わらない。
④実習前より少し下がった。
⑤実習前より大幅に下がった。

- ①
②
③
④
⑤
計



3. 問2で④または⑤を選択した方は、その理由を記入してください。(自由記述)

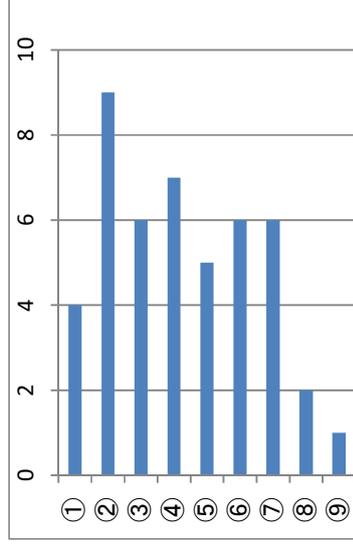
回答なし

⇒

4. 実践実習を体験してどんなところが勉強になりましたか。(複数選択可)

- ①教科・道徳の指導案の書き方
②授業の進め方(板書・発問・展開・等々の仕方)
③教材研究の方法
④学級経営の仕方(個性に合わせた指導の仕方・学級会やHRの進め方など)
⑤児童生徒集団の理解の仕方
⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方
⑦教具・教育機器の活用の仕方
⑧特別活動(児童会・生徒会活動・クラブ活動・学校行事)の指導の仕方
⑨その他()
 ・その他:保護者、地域と学校の関わり方

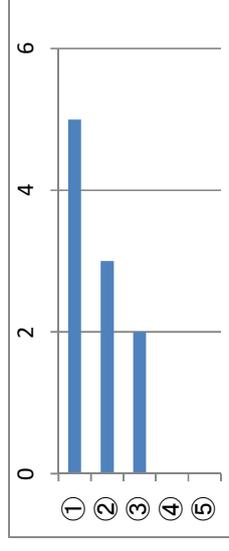
- ①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
計



5. 実践実習体験後の大学の授業への意欲・関心の変化

- ①実習前より大幅に高まった。
②実習前より少し高まった。
③実習前とあまり変わらない。
④実習前より少し下がった。
⑤実習前より大幅に下がった。

- ①
②
③
④
⑤
計



6. 問5で④または⑤を選択した方は、その理由を記入してください。(自由記述)
回答なし

7. 大学の授業の効果について

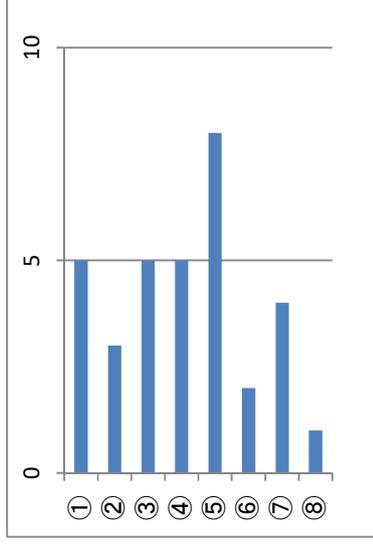
小研・特研を行った教科と、役立ったと思う授業科目名を記入してください。

- ・小研：国語 初等教科教育法Ⅰ及びⅡ(国語)、国語の教材分析A
- ・特研：国語 初等教科教育法、教材開発演習
- ・小研：社会 初等教科教育法Ⅱ、水産業
- ・小研：算数 初等教科教育法Ⅱ(算数)、代数学
- ・小研：英語 英語教科教育法
- ・特研：道徳 道徳教育の理論と実践

9. それらの授業が役立ったところはどんな点ですか。(複数回答可)

- ①教科の内容の理解
- ②教科・道徳の指導案の書き方
- ③学級経営案の書き方
- ④児童生徒集団の理解の仕方
- ⑤個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑥教材研究の仕方
- ⑦授業の進め方(板書・発問・展開等々の仕方)
- ⑧その他()
- ・その他：地域懇談会による学校と地域の連携のお話

5
3
5
5
8
2
4
1
33

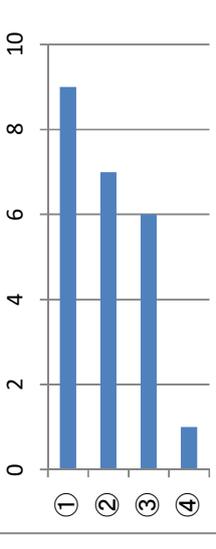


- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- ⑧
- 計

10. 「もがみ教育実習」の内容で、よかったのはどんな点ですか。(複数選択可)

- ①最上地域の学校で実習ができたこと
- ②保護者や地域の人を交えた懇談会
- ③指導主事による学習指導案等への指導
- ④その他()
- ・その他：宿泊所は、黒板を使ってみんなと一緒に模擬授業をしたり、広くて温かいお風呂が作られてあったり、広いキッチンで自炊したり、冷房があったりと最高の環境でした。

9
7
6
1
23

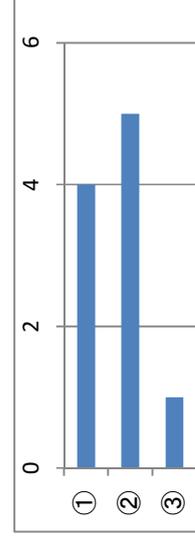


- ①
- ②
- ③
- ④
- 計

11. 「基礎実習」(2年次)の効果について
(あなたは、「基礎実習」の経験が役立ったと思いますか。)

- ①大いに役立った
- ②少し役立った
- ③あまり役立たなかった

4
5
1
10



- ①
- ②
- ③
- 計

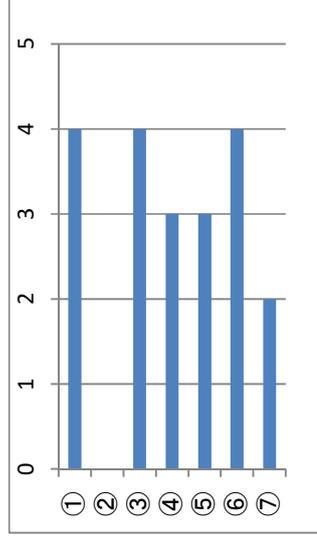
12. 問11で答えた理由・改善して欲しい点など(自由記述)

- ・もう少し授業数をさせてほしかった。
- ・1度児童の前で授業をしたという経験があったからこそ、どのように授業づくりをしたり、どこを注意して意識的に授業をしたりするか、基礎実習を行うよりは見通しが持てたから。また、日誌の提出や教師や子どもとの関わりが、基礎実習で他の学生や先輩と一緒に経験していたからこそ、人が少なくなっても自分で行動できたと思うから。
- ・附属小と公立校では、授業の作り方や子ども一人一人の特性がまるで違うので、1から考える必要があるから。
- ・子どもたちとのかかわり方、授業見学のポイントなどどこに注意するとよいか事前に把握したうえで、実習に取り組むため、より身になる経験になった。

13. 「基礎実習」の経験で役立ったところはどんな点ですか。(複数選択可)

- ①教科・道徳の指導案の書き方
 - ②学級経営案の書き方
 - ③児童生徒集団の理解の仕方
 - ④個々の児童生徒の理解と受容の仕方
 - ⑤教材研究の仕方
 - ⑥授業の進め方(板書・発問・展開・等々の仕方)
 - ⑦その他()
- ・その他:教育実習全体の流れ、教育実習に対する慣れ

①	4
②	0
③	4
④	3
⑤	3
⑥	4
⑦	2
計	20



10

14. 実践実習の前に、学習・準備しておくよきと思ったことについて自由にご記入ください。

- ・英語であれば導入。子どもの興味をひくようなsmall talkや活動を考えておくこと良い。
- ・学習支援が必要な児童への具体的な指導法。
- ・児童の名前を覚えておくこと。
- ・生活習慣を整え、体力をつけること。
- ・学習指導要領の各教科の目標と学年の目標を読んでおく。抽象的な言葉で書かれているので、自分なりに具体化しておくとなお授業で役立てることができる。
- ・教材研究の仕方や、教材研究をしてどのように授業を深めていくかの練習。授業の経験を積んでおく。教育実習で何を学びたいのか、何を聞いたり感じたりしたいのかの目星をしっかりとつけておく、積極的に実習に取り組めるような準備をする。
- ・配当学年の既習事項を確認しておくよかつかった(特に漢字)。また、3週間の実習となると授業の仕方や学級経営、生徒指導など学ぶことがたくさんあり、とにかく情報量が多い。実習を通して自分が特に学びたいこと、またそのためにどのような視点から授業や先生方、子どもたちなどを見ていくのかといった目標とそのための視点をあらかじめ明確しておく、目的意識を持って実習に参加できるとともに、結局何を学んだのか分からなくなったりせず日々の日誌や最終レポートなども書きやすくなると思う。
- ・授業を行う単元の授業構想は少し考えておくことよい。
- ・教材で最も学ばせたいポイントはどこかを書いておくこと。
- ・子どものかかわり方や自分の弱点などを理解し、実習の目標を立てると良い。

15. もがみ教育実習について、改善すべき点等があればご意見をお聞かせください。

- ・実習中にセミナーハウスに団体客の予約が入る、あるいはイベントがあることも可能な限り控えてほしいです。今回の実習では二回の週末どちらもイベントや団体客の予約が入り、満身に休息をとることができませんでした。仕方ないと理解はしていますが、学生の身にもなってほしいです。
- ・特にありません。山屋セミナーハウスも快適な環境でしたし、実習先の学校も、温かく迎え入れてくれ
- ・全くないです。宿泊所の管理人さんや新庄の子供たち、先生にはすごく優しくいただきました、楽しかった
- ・最終日に学校が終わってから山屋セミナーハウスを出るのは忙しいため、もう一泊させてほしいです。その他は大満足でした。
- ・地域懇談会について、今回は金曜日に行われましたが、金曜は日誌の感想欄も合わせて記入して提出する必要があるため、土日の授業準備のために担当の先生との打ち合わせ等があったりやることが多く、ばたばたしていました。地域の方や先生方のご都合もありますが可能であれば金曜日以外だとありがたいです。
- ・様々な事情があったが、土曜日は休めると良かった。
- ・自転車が少ないもの。
- ・自分のICT機器を持ちこみやすくしてほしい。GIGAスクール構想におけるICT化は意外と進んでいて、子どもの教師も機器を最低限使えている。実習生が使う機会がないことで従来の授業をするしかない。3週間の中で、学習指導の基礎をすることでICTに変換できる部分はあると思うので、使うことを受け入れていただけたらありがたい。
- ・市街地や学校から宿泊先までが遠い
- ・自転車が用意されていたが、大きすぎて乗れなかった。

第二部 授業記録

○「フィールドラーニングー共生の森もがみ」プログラム

1. 万場町商店街 PV 作り ～SNS を活用したまちづくり～ 22
 2. かねやま旅情 26
 3. 最上町の木を使った楽器を全世界に広めよう 32
 4. 里地里山の再生 I 38
 5. 子どもの自然体験活動支援講座 45
 6. 知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて 55
 7. 里山の自然を調べよう 63
 8. 里山保全と SDG s を学ぶ 68
- フィールドラーニング担当教員コラム 79

山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：万場町商店街 PV 作り～SNS を活用したまちづくり～（新庄市）

		1 回目	2 回目
日 程		【1日目】6月3日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着（公用車にてのくらしへ移動） 10:10 のくらし着 10:20 集合・オリエンテーション、自己紹介 10:50 モグララジオについて目的や経緯などについて説明（吉野 優美 氏） 11:05 万場町散策・商店街の人達と交流(1) 12:00 昼休憩 13:00 万場町商店街の方から地域について説明 14:00 万場町散策・商店街の人達と交流(2) 15:30 まとめ 16:00 山屋セミナーハウスへ移動 のくらし⇒山屋セミナーハウス （公用車で移動）	【1日目】6月10日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着（公用車にてのくらしへ移動） 10:10 のくらし着 10:20 「まちなか寺子屋のくらし」について説明 10:40 まちなか寺子屋のくらしに参加 その後各自万場町 PV を作成 （11 日の午前中までに完成、昼食は進行具合に応じてとるようにする） 16:00 まとめ 16:30 山屋セミナーハウスへ移動 のくらし⇒山屋セミナーハウス （公用車で移動）
		【2日目】6月4日（日） 9:40 山屋セミナーハウス出発 10:00 1 日目の活動を踏まえて各個人でテーマを決めて万場町商店街に関する動画を作成する（昼休憩などは各自の進行具合に応じてとるようにする） 14:00 グループ内で作成した動画について発表し、10 日・11 日の動画作成に向けて良かったところや反省点をまとめる。9 日・10 日の動画作成に向けて準備しておくべきこと、動画構成などについてまとめる 15:30 終了 のくらし出発（公用車で新庄駅へ移動） 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着	【2日目】6月11日（日） 9:40 山屋セミナーハウス出発 10:00 10 日で終わっていない部分の動画作成・編集など 12:00 昼休憩 13:00 動画を完成させて発表 YouTube へアップロード・コメントの作成 15:00 活動について振り返り 15:30 終了 のくらし出発（公用車で新庄駅へ移動） 16:14 新庄駅発（舟形駅は 16:21 発） 17:23 山形駅着
バス降車後の移動手段		新庄駅⇄新庄市内…公用車（送迎）	新庄駅⇄新庄市内…公用車（送迎）
宿泊料金 必要経費 小 計 交通費 合 計	宿泊料金	山屋セミナーハウス 22-3527 1泊 1,250 円（夕食・朝食なし）	山屋セミナーハウス 22-3527 1泊 1,250 円（夕食・朝食なし）
	必要経費	各自の食事代など（朝食・昼食・夕食）	各自の食事代など（朝食・昼食・夕食）
	小 計	1,250 円	1,250 円
	交通費	山形駅⇄新庄駅（往復） 2,340 円	山形駅⇄新庄駅（往復） 2,340 円
合 計		7,180 円+食事代（各自の食事代等は徴収しません。目安は 10,000 円程度）	
学生が準備するもの		筆記用具、バインダー、雨具、作業可能な服装、汗拭きタオル、洗顔用具、入浴用具、スマートフォンまたは PC	筆記用具、バインダー、雨具、作業可能な服装、汗拭きタオル、洗顔用具、入浴用具、スマートフォンまたは PC
留意事項		事前に各自で商店街の PR 動画などを調べて自分はどうな動画を作成したいかイメージをしておいてください。	

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Aさん

今回のフィールドワークでは実際に山形県新庄市の万場町へ赴き、SNSを活用して万場町商店街のPR動画を制作しYoutubeへ投稿した。2週にわたって計4日間万場町のくらしを中心に活動を行った。

1日目は主に万場町商店街はどういった場所なのかを知るために商店街を散策し、地域住民の方たちのお話を聞いて回った。散策へ行く前に万場町のくらしの店主、吉野優美さんがのくらしを始めた経緯、のくらしが目的としていることなどについてお話をしてくださった。その中の「最上の暮らし」という言葉が私の中で強く印象に刻まれた言葉だった。自分の思い描く充実した豊かな暮らし、最上の暮らしを実現できる場所が万場町にはあり、一人一人が最上の暮らしを実現することで地域の暮らしが豊かになるという話がこのフィールドワークで最も私の心に残ったことだった。商店街の散策を始めると各個人商店の店主の方々温かく私たちを迎え、ご丁寧に商店の運営や店としてPRしたいポイントについて教えてくださった。どの店舗も個性が光っており、温かく魅力的な商店街だった。2日目、3日目、4日目は1日目に撮影した素材をもとにPR動画を制作することに努めた。動画の制作過程で万場町商店街の良い部分や課題に気づくことも多かった。万場町商店街の課題としてあげられることとして持続性が大きな問題であると考えている。どの商店も経営を行っている方が高齢であることが多かった。商店街の持続性という観点で考えると若者が万場町商店街に身を置き、なんらかの活動を続けることが必要なのではないだろうか。また県内、県外からのアクセスが悪いことも一つの課題だ。のくらしでは地元民向けの企画が多く行われていると感じたが、やはり外部からのリピーターの確保も必要だと感じた。ではどのように解決していくのか解決までのプロセスについて考察したいと思う。フィールドワークで万場町商店街には鉄砲などの専門的なものを取り扱う店舗があり、全国からその専門性を理由に訪れる人もいと話を聞いた。そこで専門的な商品、全国で取り扱いが少ないマイナーな物品を揃えた店舗を誘致することで県外からの集客を行い、その各店舗でSNSを利用したキャンペーンを実施するということを提案したい。ここでは専門店で購入する際にTwitterやInstagramでハッシュタグで拡散してもらい、拡散後に何らかの特典をつけるといった手法を使うことを想定している。そしてその投稿を見た人が専門性を求めて万場町を訪れるということが実現できれば万場町の魅力に気づき、身を置いて生活したい、また訪れたいと思

う人が出てくるのではないかと。ただしこれには鉄砲などのように取り扱いが全国で少ないこと、わざわざ赴いて購入する必要がある商品を取り扱う店であることなどの条件が必須なのに加え、時間消費ができるだけ長くなるようなものが好ましい。万場町商店街の強みである「最上の暮らし」を実現できる場所というコンセプトをブラさずにこの持続性という課題を解決するためには更なる検討が必要だと改めて感じた。また、商店街には空き家や空き店舗もみられるため空き家を改装して様々な企画やイベントに利用できるかもしれない。解決策としてはまだまだ不十分であり、実現するには更に調査する必要がある。そのためこれからも個人的に空き家の活用とSNSを使った集客について考えていくつもりだ。



理学部 Oさん

私たちのプログラムでは、2日間にかけて、山形県新庄市の万場町にある万場町商店街の紹介PVの作成を2回行った。動画を作成するにあたって、実際に商店街を調査し、そこで働く人たちから話を聞くことで、どうアプローチして魅力を伝えるか、商店街を取り巻く課題は何かなどを考えた。

第1回では、まず喫茶店とレンタルスペースの提供をしている万場町のくらしでの活動や商店街が抱える課題についての話を聞いた。のくらしではここで暮らす人たちが「最上の暮らし」を実現できるような取り組みを展開している。その一環として、モグラという会員制度がある。モグラは、のくらしでのイベント開催や、活動自体の応援を行っている。このような地域指向の取り組みは、市内・町内の繋がりが強固となるため素晴らしいものであると考えられる。次に商店街の課題としては遊休地の活用の問題があげられた。遊休地の活用とは、商店街の通りにある空き家や更地をリノベーションしたり、新たに店舗やイベントスペースなどを建てたりすることである。実際に、のくらしの店舗は以前仕立屋であった店舗を改装しており、これらの活用は商店街の景観を損なわずに視覚的な活性化を期待できる。一方で、これから新たに参

入する店舗や、リノベーション費用の問題もあるため、十分に調査をしながら慎重に進めていくべきである。

第2回では、主にそれぞれの動画作成と動画の発表を行った。各々の目に映った万場町の魅力をどのように動画や文字で伝えるかを考え、編集作業に取り掛かった。完成した動画は全て、商店街とその周辺の何気ない風景や、個性的な店と店員など、「万場町商店街にしかないもの」をコンセプトにした動画であり、班員全員がこの商店街に同じような魅力を感じたようであった。

私は、2回のフィールドラーニングを通じて万場町商店街には外部への情報発信の余地まだあるように感じた。地域に向けた取り組みは以前から行われていたようであるが、山形県内や他の地方への認知度を上げていくことで更なる活性化を望める。今回のフィールドラーニングでのPV作成はそのような外部へのアプローチとしての良い機会であったと考えられる。アクセス面での課題の解決は個人では困難な部分が大きいため、私たちに可能なこととして、SNS上で発信することで、多くの人に万場町商店街を知ってもらうことが重要である。

医学部 Mさん

私は今回新庄市での万場町商店街のPV作成を行った。

初めて私が万場町商店街を訪れたとき、本当にここが商店街かと思った。というのも、万場町商店街が私の思っていた商店街と異なっていたからだ。商店街というと、アーケードの下で店が営業していて、人通りが多くにぎわっているという姿を想像するのは私だけではないはずだ。しかし、万場町商店街はそうではなく、多くの空き家や空き地が存在し、営業している店が少ないといった状態だった。

このような商店街に魅力なんてあるのかなという気持ちで私は万場町商店街のお店を訪問した。お店を訪れてみて私が思ったことは「お店の人はみんな温かく、それぞれが自分の好きなことを追求しながら営業している」ということである。私はこれこそがこの万場町商店街の魅力ではないのかと思った。近年はスーパーマーケットや大型のショッピングセンターにより小売店が打撃を受けているのは言うまでもない。ではこのような商業施設にあって小売店にはないものは何かというと、この温かさである。具体的には、何かものを買おうと思ったとき、商品の情報は商業施設では入ってきにくい。しかし、小売店で買うと商品の情報がお店の人から入ってきやすい。これは小売店の人々（特に万場町商店街の人々）が自分の好きなことを追求しているからであると考えられる。

PVを作ってみて思ったことは、その土地に住んだこ

とのない人が見る視点はその土地に住む人の視点と大いに異なるということだ。これは「のくらし」の方々とPVの鑑賞会をする中で気付いたことである。もしかすると、これは万場町商店街の魅力にも当てはまるのではないかと私は思った。つまり、「お店の人々はみんな温かく、それぞれが自分の好きなことを追求しながら営業している」ということがまだ周囲の住民（特に新庄市民）によく知れ渡っていないのではと思った。そこで私は、PV公開時の概要欄にこの動画のターゲットは主に新庄市民であるとの旨を記述した。

さて、私がこの商店街を活性化するにはどうしようと考えたときこの魅力が大いにヒントとなった。つまり、「各々の好きを表現し、実現できる商店街」という商店街の姿こそがこの課題解決の手がかりとなるのだという結論に至った。班員と話し合う中で、班員もみな同じことを思っていて、活性化の方針として万場町商店街を自分の好きなことを実現できる場所にするという方向性に至った。



医学部 Kさん

私は今回の最上地方での体験学習に参加して、たくさんのお店を知ることができました。新庄駅からほど近いところにある万場町商店街は店舗数は少ないながらも雑貨屋や鮮魚店、などがあり、商店街のすぐ近くにある大型スーパーとの競争に独自性と専門性で対抗していると考えました。特にその傾向が顕著なのは商店街のほぼ中心にある小野鉄砲化薬店で、猟銃や競技用ライフルなど、銃に関する商売をしていて、山形県だけでなく、全国各地から顧客を得ていて、安定した営業ができていないのではないかと考えました。過疎化が進む商店街の中においても、こうして安定した営業ができていく店舗があるということは、今後のPR戦略において非常に重要なポイントとなるとかんがえられます。

しかし、地域を見て回った時に重要な課題があることに気づきました。多くの他の自治体でも問題になっ

ているような少子高齢化や施設の老朽化、後継者不足といった課題が万場町商店街には顕著に表れてしまっていることです。商店街の近くには、大型のスーパーがあるということも、商店街の衰退を後押ししてしまっているでしょう。“のくらし”の活動を通じて、地域の人々が楽しく万場町商店街で暮らしているということは非常によく伝わりましたが、若年層の誘致といった活動に持続性をもたらすような行動が、あまり進んでいないことがこの先の憂慮となりうると考えました。

実際に現地に行ってみて、こうした課題を解決していくうえで、様々な SNS 媒体を使った PR 活動は非常に大きなものであると実感いたしました。新庄市に住む人でも、万場町商店街の魅力が十分にわかっていない人もいると考えたときに、YouTube を使った情報発信は効果的なものとなるでしょう。今回私は、少し堅いイメージのあるような PV のほかに、音声合成ソフトの人気キャラクターである“ずんだもん”を活用した PV も作りました。宣伝する対象に応じて、より興味を持ってもらえるような PV を使っていただけることで、宣伝効果はより大きなものとなると期待しています。

活動全体を通じたまとめや感想を記述します。商店街の散策やのくらしの方々とのかかわり、商店街の人々との交流を通じ、商店街の持つ個性や温かさを肌で感じることができて、とても有意義で楽しい活動になったと思います。プレゼン活動を通じて、さらに多くの方に万場町商店街の魅力を伝え、実際に訪れてみたいという方や、のくらしの活動を応援したいと思っていただける方を増やしていけるように尽力していきます。



山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：かねやま旅情（金山町）

		1回目	2回目
日 程		【1日目】 5月13日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 10:40 遊学の森着 11:00 オリエンテーリング、春の森をめぐる 13:00 昼食（山菜料理教室） 14:00 水辺の観察会 15:30 振り返り 16:00 ホテルへ移動（町バス移動） ☆有屋地域の旅提案と有屋地域の旅マップの製作。 ※16:00～20:00の時間帯を、旅の提案に必要なプレゼンのための自主活動の場とします。町旅の提案するにあたりキーマンになりそうな団体や個人を調査し、タイムスケジュールやテーマなど事前にお知らせいただければ交流及び研修の場を提供します。	【1日目】 6月3日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 10:40 遊学の森着 10:50 木エクラフト教室 14:00 振り返り ※このタイミングで旅の提案の発表と旅マップの提出をしてもらいます。未完成の場合は持ち帰り、後日に発表してもらいます。 15:00 終了、振り返り 15:30 ホテルへ移動（町バス移動） ※16:00～20:00の時間帯を、旅の提案（旅マップ）に必要なプレゼンのための自主活動の場とする。町旅の提案するにあたりキーマンになりそうな団体や個人を調査し、タイムスケジュールやテーマなど事前にお知らせいただければ交流及び研修の場を提供します。
		【2日目】 5月14日（日） 08:40 ホテル出発 09:00 谷口地区公民館着 谷口歴史講座 12:00 昼食（町内飲食店） 13:00 谷口銀山見学とボランティア清掃 14:30 遊学の森へ移動 15:00 振り返り（町バス移動） 16:00 新庄駅解散 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着	【2日目】 6月4日（日） 08:45 ホテルパル集合（町バス移動） 09:00 遊学マルシェ（9:00～14:00） ※運営スタッフ 14:00 振り返り 15:20 遊学の森出発 16:00 新庄駅解散 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着
	バス降車後の移動手段	町内の移動などについては町バス対応	町内の移動などについては町バス対応
	宿泊料金	※想定 宿泊料 4,500円（素泊まり、税込み） ※ホテル宿泊にアメニティ用品は含まれません。	※想定 宿泊料 4,500円（素泊まり、税込み） ※ホテル宿泊にアメニティ用品は含まれません。
必要経費	朝食、昼食は各自準備（バス移動の際に購入する時間を設けます） 山菜料理・観察会体験料 1,000円（昼食含む）	朝食、昼食は各自準備（バス移動の際に購入する時間を設けます） クラフト・昼食 2,000円	
小 計	7,500円（だいたいの想定です。）	7,500円（だいたいの想定です。）	
交通費	山形駅⇄新庄駅（往復） 2,340円	山形駅⇄新庄駅（往復） 2,340円	
合 計	20,000円程度		
学生が準備するもの	エプロン・バンダナ・洗面道具・着替え・帽子・長袖長ズボン・長靴 軍手・筆記用具・持っている方はデジカメ	エプロン・バンダナ・洗面道具・着替え・帽子・長袖長ズボン・長靴 軍手・筆記用具・持っている方はデジカメ	
留意事項	受講定員 8名（最低開講人数5名）	受講定員 8名（最低開講人数5名）	

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

地域教育文化学部 Hさん

私は金山町について調査フィールドワークをしたことで、金山町の様々な魅力を知ることができた。

まず金山町は自然が豊かで貴重な動植物の宝庫である。金山杉などの林業が盛んであることと歴史が関係していることが興味深かった。山菜料理もとてもおいしく、普段の生活ではなかなかできる体験では無いと感じる。お昼にいただいた「わらびたき」は絶品だったため、ぜひたくさんの人に食べていただきたい。そしてお手伝いをしてくださった地域の方の暖かさを身に染みて感じた。谷口銀山でも、人と自然の共存の歴史をうかがい知ることができる。ガイドをしてくれた方がおっしゃっていた、「いつ死ぬか分からないから妻子を持たなかった」という言葉が印象的だった。当時の人々は命がけで仕事をしていたのだと思う。木工クラフトでは物づくりの楽しさと同時に難しさも知った。寸法通りの木材を用意していただいたのだが、厚さが思っていたものとは違っていた。自分の中では完成形が見えていても、実際に現地に行ってみると想像とは違うものが用意されていることがあるのだと思う。これからは下準備をきちんと行いたい。旧羽州街道では、金山町の町づくりの工夫を知ることができた。一番印象に残ったのは「住民の生活に根差した街づくり」というものである。金山町は観光マップにも載っていない様々な道があり、そのどれもが美しい。歩く人が違えば歩く道も違うような、見る人によって異なる景色が楽しめるのがこの町の魅力である。

この様に金山町はたくさん見どころがある美しい町なので、もっと多くの人に訪れて欲しいと思う。そのためには、金山町のことをもっと外部にアピールすることが必要だろう。私は他の町での町おこしについて調べたが、他の町での取り組みを金山町でもそのまま運用するのは違うと思った。金山町の現地の方が「外部の人に向けて作った建物や風景は一度写真を撮ったら満足して来なくなってしまう」と言っていたことが記憶に残っている。私も、金山町の人々が守ってきた自然や街並みを見てほしいし、町そのものに興味を持ってほしい。だから、他の町の方法を真似するのではなく、金山町独自のやり方で関係者人口を増やしていきたいと思った。何度も町に赴いてもらうためには人と人との交流が大切だと考える。地域の暮らしに根差しながらも、外部の人に町の魅力を発信していくのは難しいことだと感じた。私たち大学生ができることはたくさんあると思うので、これから先も考え続けていきたいと思う。



医学部 Nさん

1、第一日程で行った事

1日目は遊学の森へお邪魔しました。午前中は山菜採りと山菜料理教室を行いました。ぜんまいやうどなどの山菜について教わり、その後の昼食を、私たちが採取した山菜に加え、遊学の森の方が用意してくださっていた山菜を使って自分たちで料理を行いました。午後には遊学の森の敷地内にあるビオトープへお邪魔し、ビオトープ内に生息する貴重な生き物の説明を受けました。ビオトープ内は人の手はほとんどいれず、自然のままの環境を保っており、絶滅危惧種の生息もしているそうです。

2日目は谷口銀山へ伺い、銀山の興り、各施設などの説明を受けました。その後、山道の清掃を行ったのち、複数の坑道の案内を受けました。谷口銀山は1159年ごろの発見とされ、かつては遊郭があるほど繁盛していたといえます。

2、第二日程で行った事

1日目はまず遊学の森にお邪魔し、木工クラフト体験を行いました。その後、金山の街並みを案内していただきました。金山町は観光客よりもまちに住む方をだいに、という考えのもと、まちの整備に取り組んでおられました。例としては石畳を表通りでなく住民が多く使う道路に用いたり、景観をよくするため道路標識を減らしたりしています。また金山は杉をブランドとしており、金山杉を用いた住居を建築する人に補助金を出しています。この補助金は金山内で循環し、仕事を生み出してまちの活性化につながるということです。

街を案内していただいている間、金山の課題点についても伺いました。金山は、観光客向けのものが少ないという事が課題だそうです。

2日目は遊学の森で遊学マルシェというイベントの運営の手伝いをさせていただきました。

このイベントには山形大学のチーム道草も参加しており、地域密着型の活動をされている事を知りました。

3、学んだ事

今回金山町でもがみフィールドワークをする中で、

金山を盛り上げようとする方々の努力、工夫を知りました。これからの活動の中で、金山の方々と連携し盛り上げるための一助となれるよう、努力していきたいと感じました。



医学部 Mさん

私は、2回の活動のうち一回しか参加することができなかったが、金山町でのフィールドラーニングではたくさんのことを学ぶことができた。

遊学の森では、森林は落葉落枝により形成された土壌で河川に流れ出る水の量を制限していること、土砂災害も防いでくれていることなどを学んだ。これまで森には虫が多いなどマイナスなイメージを多く持っていたが、人間生活との共生を真に体现されている遊学の森に感銘を受けた。特に印象に残っているのは、手付かずの自然を観察したことである。その場所は人間の手が全く加わっていない場所で、独自の生態系を形成しており、絶滅危惧種に指定されている動植物も生息していた。それと同時に人間の手による森林破壊が生態系にどれだけ大きな影響を与えるかを身をもって感じる事ができた。

金山町の散策では、町独自の街づくりを感じる事ができた。街の中心地には金山杉を使った住宅が並び、風情のある街並みを形成していた。小学校の校舎の色も独特で、街全体として景観作りに取り組んでいる点に感動した。金山町役場の方に話を聞くと街の取り組みとして、金山杉住宅を立てると補助金が出る制度を設けているが、多様性の時代に住宅の仕様を制限するのは良くないとの意見もあると聞き、街の景観づくりには住民を含んだ町全体の協力が必要ということを知った。

最後に訪れた谷口銀山では、江戸時代からの金山町の様子を遡って学ぶことができた。金山町は、江戸時代に羽州街道の宿場町として栄えていたことなどを学んだ。谷口銀山の坑内を探索することもでき、いまだ何を意味しているかわからない記号が坑内の中にあつたりと、金山町のディープな部分を知ることができた。

これらを踏まえて、私は、金山町は学びのある街として観光するのにとても良いと思った。金山町には自

然、歴史、文化を感じられる場所が多くある。今回のフィールドラーニングを通して金山町独自のまちづくり、自然と人間の共生、金山町の歴史など、学びを得られる経験がたくさんあった。エコツーリズムの観点から、金山町固有の良さを発信できるような旅のプランを考えていこうと思う。

医学部 Yさん

私はこの度金山町に訪れ、多くの貴重な体験をさせていただきました。金山町は古来より宿場町としての機能を担うとともに杉の生産が盛んな町であり、歴史的な景観の保存としての住宅づくりや杉を用いた自然の中での体験学習、銀山といった観光資源がある街だと認識できた。

金山町に訪れはじめに考えたことは町のアクセスの悪さだ。自分達は手配された町バスにより町内の活動場所に不自由なく移動できたが金山町には新庄駅からの交通バスの本数が乏しいうえ、先程挙げた観光地点が町内に点在し、いくら外部の人が興味を持ったとしても赴く手段が無く、旅行として来る人が少ない要因の一つではないかと考えた。また、プログラムを通して思ったこととして、金山町の所々を訪れる際に予約を入れる団体が個々であること、管理や主体、趣旨などが独立しすぎていることが挙げられた。その為、多くの人は体験などを申し込むのに煩わしさを覚えるうえ、個々では金山町の断片しか見せることができず、包括的な全体像が全く分からなくなるということや町全体としてのどういったコンセプトなのかの客層を求めているかがあやふやなままというのが現状だと認識した。確かにイベントごとや街の景観、自然に親しめる場所といった人々お引き寄せられる要素おこの町は多く持っているが、結局この町が何なのか、訪れた後にどう伝えていくかが不透明であると思った。

ではこの課題をどういったアプローチで解決すべきなのかを私は考えた。フィールドラーニングの中では多くの体験を行うことができ、新鮮さやワクワク感が私の中にはあり、やはり体験の喜びを観光客には知ってもらいたい。今回挙げられた現状と課題を加味した結果、私は金山町のプランとして金山町のツアー化を考えた。ツアー化を行い、交通の足を町側が提供及び案内をしていくことが金山町の観光資源をもっとも良く伝えられるとともに町全体としてのコンセプトを伝えられるのではないかと考えた。今後は発表にむけより具体的なツアープランを練りたいと思う。

工学部 Hさん

私は、5月13日と14日と6月3日と4日の合計4日間金山町でフィールドラーニングを行いました。1回目には遊学の森で山菜採りと山菜料理作り、自然観察を行いました。また、谷口銀山の見学、街並み見学も行いました。2回目には木工クラフト体験と街散策、遊学の森で開催されたマルシェのお手伝いをしました。

山菜採りや自然観察を通して、金山町の自然の豊かさを感じることができました。遊学の森のすぐ近くの森で様々な種類の山菜を採ることができました。また、絶滅危惧種の動植物がいる場所も見学させていただきました。せせらぎの音や鳥の声だけが聞こえるのんびりした環境でとても癒やされる場所でした。

5月14日に行った谷口銀山と街並みの見学では金山町の歴史を感じることができました。金山町は江戸時代に特に栄えていた場所であり、江戸時代に使われていた谷口銀山が保存されていたり、江戸時代の街並みを維持されており、歴史を大切にしている町だと感じました。

6月に行った木工クラフト体験やマルシェのお手伝いでは、実際に体験してみる楽しさを感じることができました。予想外のハプニングもありましたが、それ以上に充実感を感じることができました。

このフィールドラーニングを通して、得られたことは大きく二つあります。それは金山町の魅力をたくさん知ることができたことと、体験や人との交流を通して自分を成長させることができたということです。金山町の魅力については、豊かな自然や歴史を大切にしていることが挙げられます。また、人とのつながりを感じられる暖かいまちです。一回行くともう一回行ってみたいような深い魅力があります。自分の成長と言う点については、ゴールを見据えた綿密な計画と事前準備の大切さを知ることができました。また、今まで関わったことのない班のメンバー、金山町の方、マルシェで出会った方などとの交流を通して良い刺激をもらえたと思います。

今後金山町の旅行計画を発表するに当たって、実際に金山町に行ったことのない人にどうやって魅力を伝えるのが課題だと感じました。実際に金山町に行ってみてネットの情報や頭で考えたことと実際に肌で感じることは違うと思いました。また、金山町は交通の便が悪いことやお土産が少ないことなど街の課題もあるので、その課題を解決する方法も探していきたいです。活動報告会では自分が学んだこと、得られたものを元に地域の方に感謝を伝えられるような発表をしたいです。



農学部 Tさん

一回目のフィールドラーニングでは山菜を採り自分たちで料理をして谷口銀山の探索を行うことができた。山菜を自らとり料理を作るという体験は普段できないことなので、この新鮮な体験や貴重な谷口銀山の歴史などを多くの人に共有したいと思った。二回目のフィールドラーニングでは木工クラフトや街の散策、マルシェの手伝いなどをすることができた。金山町の美しい景観の歴史や金山杉の特徴などを知ることができた。マルシェのようなイベントを行うことで実際に足を運んでもらい、金山町を知ってもらう良いきっかけになっていたと感じた。金山の美しい景観を守るためにも、金山町の歴史や取り組みを多くの人に発信していきたい。今回のフィールドラーニングでは、金山町の魅力はもちろんのこと課題も見つけることができた。課題としては、旅をするにあたって公共交通機関でのアクセスが悪いため旅のターゲットが車を持っている人に限定されてしまうこと、金山町ならではのお土産が少ないことがあげられた。それらを解決するために旅をツアー化することで個人での移動を必要としないようにすること、金山町の特産品を活かしたお土産などの提案をしていきたい。これから金山町の旅情についての発表があるので、今回見つけた課題を解決しつつ街の魅力をアピールできるような旅のプランを発表したい。



農学部 Yさん

私は今回金山町に初めて訪れた。実際に訪れてみて、金山町は豊かな自然に囲まれていて、景観が良い金山住宅など私が思っていたよりもとても魅力がある町だと感じた。

今回のフィールドラーニングでは遊学の森中心に活動をした。1回目の活動では1つずつ名前を確認しながら山菜を採り、自分たちで料理をすることはとても貴重な経験となった。ビオトープ観察は実際に森林に行くことで五感を意識して森を感じ、川、鳥、風、虫など山の音を聞くことが出来た。谷口銀山見学では歴史についてお話を伺い、自分の目で見る銀山はとても迫力のあるものばかりだった。2回目は自分たちで設計からして木工クラフトを行った。のこぎりの使い方について丁寧に指導をしていただいた。また、遊学の森で開催されたマルシェの運営スタッフとしてワークショップの手伝いをした。

自分の課題として、下準備が足りなかったと感じた。金山町や山菜の知識をもっと身につけ、木工クラフトを作る時の手順のイメージをもっとしっかりするなど山形市にいてもやれることはできるだけやってからフィールドラーニングを行うべきだったと感じている。

金山町の課題として、金山町の教育委員会の方からお菓子などのお土産がないという話を伺った。一回目の活動で「マルコの蔵」という歴史ある建物を訪れた際にお土産を少し見てみたところ、確かに菓子類のお土産はあまりなかったように感じた。また、マルシェに来ていた方にお話を聞いたところ、金山町の住民という人のほうが多かった。マルシェは食べ物や焼き物、ワークショップなど楽しめる催し物がたくさんあったので、地元の方だけでなくもっと多くの人に来て頂きたいと感じた。

今回活動を通して、金山町には素晴らしい場所が多くあるのにも関わらず、訪れる人が少ないと感じた。目立った観光スポットがなくても街中を歩くだけで金山住宅や農業用水路では鯉を見ることが出来る。そのような観光雑誌には載っていないような場所にたくさんの魅力を感じた。そのため、実際に訪れた自分たちが金山町の良いところを発信することが重要となると考える。また、お土産に関して金山町は落花生やメープルサップなどの特産品がある。そのためこれらを使って何か金山町を代表するお土産を作ることが出来ないだろうか。金山町を活性化させるには町民しか知らない魅力をもっと発信し、新たにお土産を作る必要があると考える。今後私たちが体験した金山町を多くの人に知ってもらい、観光客向けに金山町の特産品を使ったお土産を作ることを提案する。



農学部 Sさん

これまでの人生の中で、金山町を訪れたことも自分からその町について調べたこともなかった。私が持っていた金山町のイメージはとても緑豊かで金山杉が有名な特産品として挙げられると思っていた。金山町を訪れる前の事前学習として調べていくと、町の面積の多くを森林が占めており緑の多さは自分の予想に当てはまっていた。また、金山杉を使った建物が多く立ち並んでおり情緒ある町だと分かった。

実際に金山町を訪れ、自然を耳や目、鼻などで感じられる貴重な時間であった。遊学の森での活動は山菜収穫からの調理、ビオトープ観察での自然観察を行い日常生活では味わえない風景を目にすることができた。マルシェでは、地域住民の方だけでなく様々な人と関われるきっかけづくりの場になった。

教育委員会の方から金山町の街並みを見ることを目的に近年観光客が増えてきていると話があった。町役場周辺を見ても、金山住宅という金山杉を使った家が立ち並んでいるだけでなく、町中には植物などが植えられておりとてもきれいな街並みであった。だが、観光客が増え始めた一方で金山町はある課題を抱えている。それは金山町を代表するお土産がないという点だ。一般的な観光地であれば、その土地に関するお土産が販売されている。観光客がそれを購入することで地域の観光収入が増えたり、それを買いに来る人が増えて地域が活性化したりするなどの影響がある。金山町の場合はそのようなお土産が極めて少ないと同時に、特産品が観光客にうまく知られていないと感じた。私は、このような課題を解決するために新しい金山町の特産品を提案する。金山町の杉沢地区では珍しい純国産のメープルシロップが取れるほかに、それと特産品の金山杉を活かして「金山町のバームクーヘン」を作るのはどうだろうか。バームクーヘンであれば、金山杉の何十年かけて出来上がった年輪を忠実に再現できるほかメープルシロップも加えることで、味覚でも金山町

を感じられる。遊学の森でそれを実際に作る教室を開催すると記憶にも残りやすく観光客の満足度も得られると思う。

終わりに、私は金山町の観光資源と特産品を活かしてより観光客を増やすために新しいお土産を作る必要があると主張した。現在では観光地に行く目的で旅行に来るだけでなく、その土地の料理を味わうという目的で来る観光客も多いために、この提案は金山町にとって良い影響をもたらすだろう。

山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：最上町の木を使った楽器を全世界に広めよう（最上町）

		1 回目	2 回目
日 程		【1日目】 6月10日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 11:00 最上町立中央公民館 到着 講師紹介・活動紹介等 12:00 お昼休憩 13:00 ワークショップ (楽器演奏体験等) 15:45 ワークショップ終了 17:00 宿到着	【1日目】 7月8日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 11:00 最上町立中央公民館 到着 ワークショップ (演奏練習等) 12:00 お昼休憩 13:00 ワークショップ 15:45 ワークショップ終了 17:00 宿到着
		【2日目】 6月11日（日） 8:30 宿出発 9:00 ワークショップ (楽器演奏、作製等) 12:00 お昼休憩 13:00 最上町巡り 15:30 最上町出発 新庄駅へ 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着	【2日目】 7月9日（日） 8:30 宿出発 9:00 ワークショップ (町の楽器演奏団体と交流) 12:00 お昼休憩 13:00 活動まとめ 15:30 最上町出発 新庄駅へ 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着
	バス降車後の 移動手段	教育委員会による送迎	教育委員会による送迎
	宿泊料金	瀬見温泉 松葉館 6,650円 (夕・朝食付) ※入湯税込み	瀬見温泉 松葉館 6,650円 (夕・朝食付) ※入湯税込み
必要経費	講師謝金 1人2,000円 (予定) ※参加人数によって変更あり	講師謝金 1人2,000円 (予定) ※参加人数によって変更あり	
小 計	8,650円+α	8,650円+α	
交通費	山形駅⇄新庄駅 (往復) 2,340円	山形駅⇄新庄駅 (往復) 2,340円	
合 計	21,980円+α		
学生が準備 するもの	1日目の昼食・飲み物・タオル 作業できる服装・着替え・帽子・運動靴 必要に応じて常備薬	1日目の昼食・飲み物・タオル 作業できる服装・着替え・帽子・運動靴 必要に応じて常備薬	
留意事項			

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Sさん

私はこの集中講義を通して考えたことがあります。それは最上の木をどのように広めるかということとワークショップ上での創作楽器の楽しみ方の教え方についてです。一つ目に実感したことは、泉谷さんは創作楽器を通して木材に興味を持ってもらうという活動を昔からしていますが、今回の活動を通じて泉谷さんはあくまでも音楽や創作楽器による合奏の楽しさを感じてもらい、その後に木材の良さを実感してもらうというプロセスを踏んでいるということです。創作楽器による合奏のメリットとは、皆が初心者であり経験者が誰も存在しない状況から合奏が始まるので正しく演奏する必要は全くなく、正確性ではなく純粋な気持ちで音楽と向き合うことができるということです。その純粋な音楽体験を通して印象深く記憶に残った楽器について、ワークショップ後に参加者が楽器について考えたり、木材に興味を持ってもらうようにすることが大事だと語っていました。また、最上の木はとても材質が良いのに対しほとんど認知度がなく、あまり知られていないという現状があります。そこで私たちは今回の二回の集中講義を通して木材を広める方法を模索しました。それが私が二つ目に考えたり考察したことです。一つ目のプロセスである楽器を使って木材を広めるという段階を泉谷さんから教えていただきました。私たちがなじみ深い音、音楽というものを利用して木材に親しんでもらいたいという泉谷さんの狙いは非常に合理的だと思いました。さらに私たち若者が木材に興味を持つためにはどうしたらよいか親身にみんなで話し合うとSNSで創作楽器を用いて流行している曲の弾いてみた動画を投稿すると多くの若者の目に留まるのではないかという意見が出て私もその通りだと推察しました。弾いてみた動画から楽器に興味を持ってもらうという一つ段階を踏んだ広報の仕方が非常に印象深く残っています。しかし二回目の創作楽器体験の際に私たちは泉谷さんから前述のような創作楽器ならではの合奏の楽しさを教えていただき、その泉谷さんの音楽に対する価値観をもっと多くの人に知ってもらいたいと推察した班の人と意見を出し合うと、やはり実際に演奏体験をしてもらうというワークショップを開くべきだという結論になりました。私個人的にはSNSとワークショップをどちらの意見も取り入れ、ワークショップの様子もSNSにアップしてみることも面白い試みだと思いました。また、ワークショップを開催する際は誰でも簡単に気軽に演奏してもらうことができるように音程が無い打楽器で合奏することが一番楽しんでも会えるのではないかと考えました。以上のように私は最上の木を広めるためには、講師の方の考えを借

りと、実際にワークショップで演奏体験をしてもらい音楽の楽しさ、創作楽器の楽しさを知ってもらい、そのあとで参加者が木材に興味を持ったり、深く考えてもらえるような工夫を施すことが必要だと思いました。

地域教育文化学部 Bさん

私は、今回のフィールドラーニングを通して、もがみには、創作楽器を使って創作音楽をつくり、楽しむ団体があることを知った。フィールドラーニングの講師である泉谷さんを代表とした「木と音の会」では、地域の子供たちと一緒に創作音楽をつくり、活動に参加する子供たち同士がつくった創作音楽を聴きあい、楽しんで活動している。この、創作楽器を用いて創作音楽をつくり、楽しむ活動をフィールドラーニングで行った。私たちが演奏に使った創作楽器は、最上町の木からつくられた楽器だった。最上町には幹回りが日本一太いマツといわれた「東法田の大アカマツ」があった。大アカマツの樹齢は推定 600 年、幹回り 8.56メートル、高さ 26メートルととても大きく、長生きした木であったが、2019年に枯死したと診断され、2021年6月10日に伐採された。大アカマツが伐採された場に泉谷さんは立ちあっており、その当時の話を聞いてみると、大アカマツは予想されていた以上に伐採に時間がかかったそうで、切られた部分には水分が残っており、マツが生きようとするために松やにが溢れてきたそうだ。そんな強い生命力を持った大アカマツを使ったハーブは、「北国の木材は引き締まっていて、とても良い音が出る」と泉谷さんが太鼓判を押した通り、広い音域のゆたかな音を奏でた。

最上町の木が使われた創作楽器のハーブや一音笛を演奏しながら創作音楽をつくる活動は、私に創作音楽の楽しさや魅力を感じさせてくれた。まず、正解が無く、間違いも無いという自由さが創作音楽の大きな魅力である。間違った時に感じる焦りや罪悪感が無いことで、伸び伸びと演奏を楽しむことができる。また、創作楽器の手作り感、泉谷さんが言っていたように期待値が上がらないため、緊張感を持ちすぎずに演奏ができる。活動していくうちに仲間との仲が深まることで、音楽がより良くなっているのを感じられたのは楽しかった。創作音楽を通して、絆が生まれたのも良かった。しかし、この楽しさや魅力は、実際に楽器に触れながら、今までの音楽への固定観念を持たずに演奏することで完全に感じられるものであると思った。そのため、創作音楽と創作楽器の魅力を広めるには、楽しさを感じてもらえるような工夫をする必要があると考えられる。そこで程よく完成していない前例の演奏を見せることで、普通の音楽で失敗とされる演奏が悪い演奏でないのだと、固定観念を無くすことが出来るだろうと考えた。その前例をつくったという点で、

私たちが行った創作音楽の活動は、町にも私自身にも有意義であったと考える。



医学部 Sさん

フィールドラーニング一日目の午前は最上町で制作されている創作楽器に初めて触れる体験をしてきました。講師の泉谷先生はとても優しくユーモア溢れる方だったこともあり楽しい始まりとなりました。まず楽器の特徴を知るために一音笛や創作ハーブといった創作楽器についての講習会がありました。自分は音楽経験がほとんどない状態だったため初めはできるかどうか不安なところがありましたが、泉谷先生は「失敗してもいいからとにかく挑戦してみることを」をモットーにしている方で、間違っても大丈夫と声をかけていただいたため創作楽器への抵抗を無くすことができました。また、樹齢200年の松の話もとても印象的で、この話を聞いてより最上町の気を用いた創作楽器を広めたいと思いました。午後は最終日の成果発表会に向けた音楽を決める話し合いをしました。この時に今の楽器には半音がないことが問題に上がり、半音つきの物を次回までに用意していただくこととなり、これだけでも楽器を進化させたとと言えます。二日目には打楽器についてみんなが思いついたままのリズムで即興の音楽を作り上げました。この時、創作音楽ならではの良さを感じることができたと思います。第二回フィールドラーニング初日は第一回の時に決めた発表音楽の練習に取り組みました。楽譜は班の音楽経験者が作成し、先生の手助けなしで自分たちの力で音楽を作り上げました。

こうすればいいのではないかといい意見はすぐに実践してみて、試行錯誤を繰り返しながら迎えた演奏発表会本番は、来ていただいた地域の人たちも楽しんでいただけたようで大成功となりました。アンコールでは「ふるさと」を演奏しながら地域の人たちと歌い、交流も深めることができました。

今回の私たちの最終目標は、最上町の気を使った楽

器を広めることでした。このフィールドラーニングを通して、実際に創作楽器に触れることが一番効果的なのではないかという結論に至りました。創作楽器の一番の良さは音色でも簡単さでもなく、試行錯誤を繰り返しながら音楽と向き合うことができる点だと思います。そのことを踏まえて、最上町の楽器を広めるためには楽器の体験会ができる機会を設けることで楽器の良さを知ってもらい、その様子をSNSなどでアピールすることが一番創作楽器に触れやすく効果的だと考えます。音楽と触れ合うことができるこの貴重な機会を与えてくださった講師の方と最上町の方々、山形大学の各関係者に感謝します。

医学部 Sさん

私は今回フィールドラーニング-共生の森もがみを通して、創作楽器を演奏することの楽しさやみんなで音を合わせて合奏することの難しさを感じた。今回の経験を活かして、私は最上町の木材を用いた手作り楽器を広めていく方法や現在抱えている課題の解決策に関して考察した。

現在、この最上町で行われている楽器創作・演奏活動に関して、最上町外に対する情報発信があまりなされていないことが課題として挙げられる。私はこのフィールドラーニングで創作楽器を演奏する以前、最上町で生まれた手作り木工楽器を広めていく方法を考える上で、TwitterやInstagramなどといったSNSを活用して楽器に関する情報発信を行う案を思いついた。しかし今回の活動を通じて、創作楽器の本当の魅力を伝えるためにはSNSを用いることよりも実際に楽器に触れることの方が大事なのではないかと思った。なぜなら、SNSなどといったインターネット媒介して伝わる情報は容易に拡散が可能である代わりに、その伝えたいものの魅力を目一杯伝えることが容易でないからである。仲間と創作楽器を演奏し、音を合わせる喜びは実際に体験してみないとわからないものであり、映像媒体等ではその喜びを伝えることが難しいのである。よってこれらのことから、最上町の木工楽器を最上町外に広めていくためには、ワークショップを開催し、創作楽器で音楽ができる過程を参加者に知ってもらうことが大切だと考える。

ワークショップを行う上で、主なワークショップ開催場所としては、学校の文化祭や小学校、高齢者や障がい者の福祉施設などにすることが望ましいと考える。なぜならば、老若男女問わず多くの人に創作楽器に触れてもらうためには、よりたくさんの方が集まる場所、そして幅広い年齢層の人々が集う場所が良いからである。ワークショップの主な内容としては、次の3つが挙げられる。1つ目は、最上町で伐採された木材を用いてできた楽器を使って参加者全員でアンサンブルを

することである。琴のような横置き楽器であり、弦を弾いて音を出す木工ハープや一音笛、小型のチェンバロであるスピネットといった木工楽器を用いるだけでなく、木材や生活用品などを打楽器として用いることで、さまざまな音色を奏で、音楽を作り上げていくことが大切である。特に、打楽器は他の木工楽器と違って音楽経験が乏しい人にとっても演奏しやすく親しみやすい楽器であり、ワークショップに向いていると私は感じた。2つ目は、楽器を演奏する人だけでなく聴衆も一体となって創作音楽に参加することである。例えば、曲に合わせて手拍子したりダンスを踊ったり、あるいは歌と一緒に歌ったりすることが、創作楽器のワークショップを盛り上げる上で不可欠であると感じた。3つ目は、演奏者だけでなく聴衆の意見も反映しつつ、音楽を演奏することだ。例えば、聴衆のリクエストに答えて曲を演奏することなどが挙げられる。参加型ワークショップを築き上げることが創作楽器を広める上で大切である。

創作楽器は、演奏者がみんな初心者であるという点においても楽しみやすい楽器であるため、今後ワークショップを開催していくことによって、全国に最上町の創作楽器が広まっていく可能性は大いにある。創作楽器の演奏が楽しいということを多くの人へ伝えられるような活動に取り組んでいくことが大切である。



医学部 Hさん

今回のフィールドラーニングで最上町を訪れて学んだことがある。それは「音楽を作ることの楽しさ」だ。活動に参加する前は、楽器を使った演奏と聞いてイメージするのは、決められた音を再現できるように練習を重ね、その中で自分を表現できるかということだった。しかし、今回の活動を通じて、音楽の形態はそれだけじゃないということに気づかされた。楽しむ中で生まれていく音楽もあるのだ。

講師の泉谷先生のもと、私たちは創作楽器を使って音楽を紡いでいく過程を体験した。創作ハープや一音

笛といった創作楽器は、全員が初心者である。簡単に音を出せるからこそ、音楽経験の深浅にかかわらず全員が同じスタートラインで始められる。一つの音楽をみんなで作るために、どのように演奏するのか、パート分けや楽器の種類などを話し合った。その話し合いは、決して会議のようなかまこまったものではなく、楽器を手元に皆で和気あいあいとした雰囲気のもとで行われた。「こうしたらどうか」という具体的な意見が出るたびに、実際に楽器で演奏してみるということを繰り返した。

とりあえずやってみることが案外大切だということもまた学んだことの一つである。とりあえずやってみたことで生まれた、新しいアイデアがいくつもあった。また、遊びのつもりでやってみた演奏で発見が得られたこともあった。やってみようの精神と和やかな雰囲気の中で音楽を作るとはとても楽しく、充実したものだった。楽しさの中で作られた音楽は音にその良さが如実に現れる。それは聴いている人にも伝わっていると実感した。休憩のつもりでやってみたカエルの歌のハープ演奏や、地域の方々を招いた小演奏会にて、急遽やってみたふるさと合唱など、思い付きでやってみたものが創作楽器の良さを引き出したことは、活動の中で幾度もあった。

作り出す音楽に失敗はない。これに関して、泉谷先生に教わった秘策がある。失敗してしまったかと思ったときは「今のはリハーサルです。」と言うのだ。失敗であってもそれを咎めず、純粋に音楽を楽しむマインドを学んだ。

活動を通してひたすらに痛感したことは、音楽を作る楽しさである。そしてその楽しさを作り出すのは、失敗を恐れずにチャレンジし、何でもやってみることで生まれる、偶発的かつ創作的な表現活動だ。

楽しさを学んだもがみのフィールドワークであったが、この楽しさを作り出す源とも言えるもがみの木を使った創作楽器は、最上町外にあまり広まっていないように感じる。我々は、この楽器を広め、最上の魅力をもっと伝えるため、楽しさをより実感しやすいワークショップを開催することを提案した。このような参加型のイベントは、音楽を作る楽しさとともに、もがみの木が世界に広まる最上の機会となり得るだろう。

医学部 Tさん

今回、我々はこのプログラムにて最上町固有の文化を広めるために最上町の木を使った創作楽器の持つ特性について、「木と音の会」の代表を務める泉谷先生の指導のもと創作楽器を用いた音楽活動を通して詳しく学んだ。私は授業に実際に取り組む以前に目標を聞いていたので、世界に広めるアイデアとして事前にSNS等の利用を基本とした案を考えていたが活動を通して

大きく考えを変えられる体験をした。

はじめに、私は活動を通して創作楽器がどんな人の心にも楽しさをもたらす最上の新たな文化となり得るものであると考える。先生は活動の始めに「去年の生徒たちは今までの我々にはなかった新たな視点を与えてくれました。今回の活動でも新たな刺激となるような新しい世界を期待しています。」とおっしゃられ正直何をすればいいかよく分からなかったが活動していく中で先生のおっしゃる新しい世界というものを理解し形にできたと言える結果が得られた。始めた当初はこれを形にするのはかなり難しいのではないかと思えば全員が力を出し切り協力する必要があると思えた。しかし、取り組んでいくうちに頑張っただけでなく全員が自ら率先して楽しむために音楽を作りあげようと行動していて、私を含め音楽経験が0のメンバーもいた中でたったの4日で一から音楽を作り出し最終的に地域の人々の前で披露するまで至ることができた。この創作楽器の簡明さと観客を感動させられたその普遍性には目を見張るものがありこれこそが最上町を世界に知ってもらえようという端緒となり得ると考えた。さらに、今回活動の中で現時点でこの創作楽器で表現したいけどしきれないという部分を我々で見つけ出し先生に伝えたところ2回目のワークショップではすでに改善されており創作楽器というまだ形の定まりきっていない存在の進化の可能性の余地に驚かされた。これらの簡明さ、普遍性、そして発展性を持つ創作楽器は最上町を知ってもらえようという上でこの上なく適した触媒であると言える。しかし、ここで問題となるのはその性質上 SNS 等を介して見るだけではその魅力に完全に気づくのは難しく実際に触って取り組む必要があるということだ。そのため私は今回我々が行ったようなワークショップを様々な場所で行うのが最上に興味を持ってもらうのに一番適していると考えた。大学や公民館などの人が多く集まる場所でイベントの一環として広める場を設け人々に経験させることさえできればその魅力に気づき自ら知ろうとしてくれるはずなのでやはり最上町としてはコンテンツの改善ではなく入り口の拡張を目的とした活動をまず行うべきである。そうすることで最上町の新たな文化を利用した町おこしは成功という結果を得られることだろう。

工学部 Yさん

私は今回のフィールドワークを通して、泉谷先生から創作音楽の楽しさとポジティブシンキングを学びました。私は小学5年生まで7年ほどピアノをしていて音楽経験はあったのですが、最近はおそらく音楽を聞くだけで、演奏活動をしたのは久しぶりでした。正直最初は今、音楽活動をしているみんなについていけるか心配でしたが、みんなが初心者という創作楽器のメ

リットのおかげで自分の経験を活かしつつ、創作活動に全力で取り組みました。

私が活動のなかで一番勉強になったことは、創作打楽器のワークショップです。このワークショップは泉谷先生がリコーダーで音楽を奏でて、そこに私たちが独自に作った打楽器で演奏に参加していくというものでした。最初打楽器というと木琴や鉄筋など音階があるもの、技量がないと演奏としてなりたない、と思っていました。でも、創作打楽器は音階がない分音楽経験がない人でも楽しむことができ、その場でなんとなく思いついたリズムを刻むことで一回限りの演奏ができることに気が付きました。

演奏会では観客のみなさんも巻き込んだ「ふるさと」の合唱が心に残っています。最初ふるさとの2番は歌ってみればいいんじゃないかと提案した時、面白半分だったので採用されると思っていませんでした。「面白そうだからやってみよう」というみんなのマインドのおかげで、観客の皆さんと一緒に演奏するという創作楽器の集大成のような活動ができたと思います。

このような「面白そうだからやってみよう」や「そういうとらえ方ができるんだ!」という考え方は泉谷先生の影響だと感じています。泉谷先生は、なんでもポジティブにとらえて吸収するような考え方の先生で、私はとても影響を受けました。例えば、ワークショップの休憩中に遊びでやったハーブと一音笛の同時演奏は一芸のような雰囲気でもとても演奏会で披露するものではないという空気でしたが、先生に「それいすね! 発表会でやりましょう!」と言っていたおかげで「こんな遊びでもいいんだ、逆に遊ぶことが新たなものを生み出すんだ」と学ぶことができました。この経験のおかげで、みんなが思いついたことをそのまま言ってそれをとりあえずやってみる、という流れができ様々なアイデアを生み出すことができたと思います。創作音楽は正解や道筋がないからこそ、誰でも出来て何でも完成形になるという面白い活動だと思います。もがみの発表会でワークショップを提案しましたが、これを具現化して様々な人に、面白さを伝えたいです。

工学部 Mさん

私はフィールドラーニングもがみを通して、創作楽器、創作音楽の楽しさを学び新しい音楽の形を感じました。フィールドラーニング中のワークショップにてもがみの木を用いた創作楽器の説明を聞き、その素晴らしさを感じた。

講師は1993年に「日本一」と認定され、県天然記念物になった最上町の大アカマツの伐採に立ち会い、創作楽器を制作した泉谷先生だ。楽器の説明の際には、大アカマツが切れるまでに予想よりも長く時間がかかったこと、大アカマツの生命力の凄さを語ってもらっ

た。

最上町の大アカマツの話と共に泉谷先生が熱く語ってくれたのは、普通の音楽の形とはまた違う、創作楽器、創作音楽の魅力だった。その創作音楽の形とは現在、最上町の子供たちが先生と一緒にいる音楽の形だという。

普通の音楽は決められた楽譜を練習し、上手く演奏できるかに重きを置いている。楽団によっては選抜メンバーというものがあり、上手く演奏できない人は音楽の輪から外れてしまう。しかし、創作音楽、創作楽器の世界に上手い下手はなく、上手く吹くことを考える必要は無いと先生は言う。

先生によると創作音楽の世界では全員が平等になり全員が音楽を楽しめるという。私はこのフィールドラーニングで創作音楽を体験したが、その音楽の形は未体験のものだった。まず演奏する曲や、その曲を誰がどんなパートをどんな風に演奏するかみんなで話し合いながら決めた。演奏する曲もパートも構成も自分たちで決めることで誰が上手い下手か優劣を付ける必要がなくなったことに感動した。私たち一人一人に元々あった音楽経験の差が一瞬にしてなくす、つまり私たちが創作音楽の中で平等になったのだ。

フィールドラーニングの最終日に泉谷先生は最上町の方々に「この素晴らしい音楽の形の中、子供たちが育っていく」と語っていた。私は創作音楽という素晴らしい音楽の形もそうだが、この創作音楽の中で育っていく子供たちこそ最上町が誇るものではないかと思う。

人と話し合い、人と語りながら育つことは子供の成長の中で特に重要だと私は思う。私は創作音楽こそ、そのように子供たちが成長できるようになるツールだと考えている。これは最上町に留めておくべきものではなく、もっと色々な地域に広まるべきだ。

様々な地域の子供たちがもっと身近に音楽を感じ、もっと人との関わりを持って成長していくことに創作音楽はぴったりだと思う。私はもっと沢山の人の創作音楽の魅力が伝わるようワークショップなど体験型の広め方をしていくべきなのではないかと考えている。



山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：里地里山の再生Ⅰ（舟形町）

		1 回目	2 回目
日 程		【1日目】5月20日（土）	【1日目】5月27日（土）
		08:42 山形駅発 09:44 舟形駅着 10:00～ 開講式（農村環境改善センター） 活動説明 10:20～ 野菜の定植体験活動 12:00～ 昼 食 13:30～ 野菜の定植体験活動 18:00～ 夕 食 19:00～ 若あゆ温泉入浴 体験実習館 宿泊	8:42 山形駅発 9:44 舟形駅着 10:00 農村環境改善センター着 10:20～ 野菜の定植体験活動 12:00～ 昼 食 13:00～ 野菜の播種体験活動 18:00～ 夕 食 19:00～ 若あゆ温泉入浴 体験実習館 宿泊
		【2日目】5月21日（日）	【2日目】5月28日（日）
		7:00 起 床 8:00 体験実習館 出発 8:30 朝 食 9:00～ 野菜の定植体験活動 12:00～ 昼 食 13:30～ 野菜の定植体験活動 16:00 農村環境改善センター発 16:21 舟形駅発 17:23 山形駅着	7:00 起 床 8:00 体験実習館 出発 8:30 朝 食 9:00～ 野菜の定植体験活動 12:00～ 昼 食 13:30～ 野菜の定植体験活動 16:00 農村環境改善センター発 16:21 舟形駅発 17:23 山形駅着
バス降車後の移動手段		町公車（マイクロバス）で移動	町公車（マイクロバス）で移動
	宿泊料金	農業体験実習館 1泊2食4,500円	農業体験実習館 1泊2食4,500円
	必要経費	朝食1回、昼食2回1,500円	朝食1回、昼食2回1,500円
	小 計	6,000円	6,000円
	交通費	山形駅⇄舟形駅（往復） 1,980円	山形駅⇄舟形駅（往復） 1,980円
	合 計	15,960円	
学生が準備するもの	雨具、作業着（農作業ができる服装）、着替え、洗面道具等、筆記用具 （長靴を持参してください。）		
留意事項	天候により活動が、変更する場合があります。		

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Nさん

今回の二度の舟形町でのフィールドワークを通して、一番感じたことは、農業は自分でやり方を考えて野菜や果物などを育てられるという面白さの魅力がある一方で、先が見えにくく、天候に左右されたり、労力に対して収入が十分とは言えない状況など大変な面があるということである。

また、舟形町での二度のフィールドワークを通して、高齢化や過疎化による人手不足が一番大きな課題であると感じた。特に私たちが活動した堀内地区は、他地区よりも少子高齢化による人口減少が著しく、お店がなくて働く場所も少ないため若者が減少したり、小学校の閉校により住民が集まる機会も減少するなどかなり深刻化していると考えられる。農業の面で見ると、過疎化のほかにもJAにかなり利益をとられていることや、実は耕地面積が少ないということ、減反政策により米作りが制限されていること、伝承野菜である「西又カブ」の作り手がほとんどいないということなど多くの課題があると感じた。

課題解決に向け、若者減少に対しては「山形県立農林大学校」と地域間での関わりをたくさん持つことが有効であると考え。「山形県立農林大学校」と連携することで、農具や農業用機械の開発、栽培技術の向上などにより農業の課題解決にも効果的だと思う。また、減反政策により米を作らなくなった土地で栽培しているそばを活用して蕎麦屋を増やし、働く場所を作るとともに町外から人を呼ぶことができるのではないかと考える。他にも、ふるさと納税の「ふるさと移住交流支援促進プロジェクト」により、ふるさと納税者と地方団体が継続的な関係を持ち、地方団体は移住希望者に移住交流促進事業を行うことで総務省による特別交付税措置を受け、移住者を増やすこともできると考えた。

特に私たちの班では、舟形町の伝統野菜である「西又カブ」がこの町を救うことができるのではないかと考えた。「西又カブ」は皮も中身も鮮やかな赤色で大根のような形をしていて、歯ごたえがあるのが特徴である。このカブをブランド化できれば農業による収入が増え、この地域での農業のハードルが少しでも下がると考える。しかし販売を目的とした生産者がいなくなり、ブランド化のために原種に戻すには5、6年はかかるため解決策としてすぐに効果が出ることはないが、私たちができるとしてはインターネット販売による販路の確保、ブランド名やロゴの開発、まずは大学内での知名度を上げることなどがあると思う。私たちにできることもたくさんあると思うのでぜひ魅力ある舟形町を救いたいと思

った。

人文社会科学部 Mさん

舟形町でのフィールドワークでは、大山さんと伊藤さんのもとで「なす」「きゅうり」「じゃがいも」の定植、きゅうりを植えるための支柱立てなどを行なった。お二人は今回私たちの講師として野菜の定植の先導や舟形町の現状についてご教授してくださった。この活動の中で特に支柱立てが大変だった。その内容としては5kgくらいある支柱を畑の外から持ってきて一旦畑におき、支柱を立てたり支柱同士をくっつけたりするものである。また、お二人が育てている舟形町の伝承野菜「西又かぶ」の花を観察した。西又かぶを作る人が減少し、伝承が途絶えてしまいそうだったところに山形県が、舟形町堀内地域協議会の役員であるお二人に声をかけたそうだ。そこで今回は伝承野菜である「西又かぶ」について考えていこうと思う。

そもそも西又かぶとは、舟形町の西又地域で作られていた伝承野菜で、主に農家さん個人個人で栽培していたそうだ。特徴としては芯まで赤くサクサクとした歯応えをしている。なぜ伝承が途絶えそうになっているのかというと、栽培していた農家さんが亡くなってしまったから、また、西又かぶに他の野菜の花粉がつき受粉してしまったため西又かぶの特徴である「芯まで赤くなる」というものにならないからだという。そのためお二人はビニールハウスの中で他の花粉が入ってこられないような工夫を施し栽培している。

また、大山さんはかぶの安定した販路を探していた。完全な西又かぶの種が取れるのは今から5~6年かかるらしいがその後の販路について悩んでいた。現在山形県と協議中だが良いアイデアが生まれていないそうだ。そこで私は仙台市にある五橋中学校などを中心に仙台市内の学校と協力すれば良いのではないかと考える。なぜ五橋なのかというと昔から舟形町と五橋中学校に関係があり、中学生がよく舟形町に農業体験をしていたからである。少しでも関係があるのなら協議をして供給することが可能なのではないかと考える。そして五橋を中心に、市内の中学校や五橋には東北学院大学の新キャンパスがあるのでそこに供給できないのだろうかとも考える。

今回のフィールドワークでは農家さんの大変さ、そして安定した販路の確保の難しさを理解することができた。舟形町は他の町と同様少子高齢化も進んでいる。そこで提案したいのは西又かぶのブランド化である。伝承が途絶えそうなところからブランド化がなされれば作る人が増え、若者が他の地区から移住してくるかもしれない。すると活気が溢れ明るい町になるのではないだろうか。これについては私一人ではどうすることもできないが班の方々や大山さん達と協力してブランド化のこ

とを考えていこうと思う。



医学部 Kさん

私たちのグループはフィールドラーニング共生の森もがみ「里地里山の再生 I」の中で農業体験をやらせていただきました。普通の農業体験と違い今回は裏方の作業とも呼べる農作業をやらせていただき、農業のイメージが大きく変わりました。

1 回目のフィールドラーニングでは、茄子の定植作業を行った後、畝を囲うトンネル型の支柱建てを行いました。これがとてもつらい仕事でした。軽くない鉄パイプを畑に並べ、約 3.4 人で組み立てを行いました。

「農業のスマート化」などと言われている現代の農業の現実を見たような感じでした。普段講師の大山さんは 2 週間ほどかけてこの作業を行われているそうです。講師の方が当たり前のように行われている作業の大変さを知ったうえで、「人手不足だから舟形の農業に参加してほしい」とただ呼びかけることは、無責任で、農家の方にも失礼に当たることを初日に痛感しました。だから人手不足の解消は、フィールドラーニングを行ったことで、困難なことであると実感できました。

2 回目のフィールドラーニングは約 700 本のキュウリの定植から始まりました。前回の茄子と違ったところは、「苗を化学肥料に浸す」作業をやらせていただいたことです。この作業は主に私ともう 1 人の班員が担当しました。まず水を井戸から吸い上げる作業から始まります。その水に化学肥料を入れ、約 20 個の苗が入った籠をつけて、手押し車に乗せるという作業を行いました。つける前の籠はすでに重く、水をつけるとさらに重たくなります。このつける作業は地面で行うため、手押し車に乗せるために持ち上げるのもとてもきつかったです。私はすべてやり切れず、途中で講師の方に代わっていただきました。次の日背中と腰は案の定激痛で湿布を貼らないといけなくなりました。こんなにつらい作業を普段 1.2 人で行われているということは私にとって信じられない事実でした。ほかの班員は畝に苗を植える穴を開け、そこに肥料を入れるから始めていました。間隔や畝のどのあたりに植えるかは

しっかり決められていました。しかし私たちがあけた穴は畝の外側すぎると作業後大山さんから注意されてしまいました。その時は分らなかったのですが、午後の作業で「ばか棒」とよばれる支柱を立てて、そのばか棒をトンネル型の支柱の網に絡める際やりにくくなってしまいました。一度畝に穴を開けて苗を植えてしまうとやり直しはききません。農業の細かい作業のポイントはすべて後の作業につながっていて、舟形の農業は昔ながらの農業ですが、とても合理的だなと思いました。

このフィールドラーニングで私たちの班が目にしたのは「西又かぶ」と呼ばれる伝承野菜です。私たちの講義を担当してくださった大山さんが西又かぶの維持の指揮をとっておられる方でした。私が特に西又かぶを取り上げなくてはならないと思った理由はすでに失われてしまったほかの伝承野菜があると知ったからです。私は伝承が困難と聞いても、喪失まで思い浮かびませんでしたし、実際そのような事実があることも当事者の町の方しか知らないと思います。この事実を知ってもらうことで西又かぶに興味を持ってもらえるきっかけが作れるのではないかと、フィールドラーニングでの大山さんのお話を聞いて、私は考えました。

医学部 Uさん

私は、今回の舟形町でのフィールドワークで現在日本が直面している過疎化や少子高齢化、農業従事者の減少を目の当たりにしました。現在の舟形町は、十年ほど前と比べて人口が 200 人程度減少し、高齢者割合は 20%以上増加しています。そのため、高齢農家（65 歳以上）割合も同様に 20%ほど増加し、現在 42%となっています。今回大学生 11 人で野菜の定植体験をして、とても大変と感じたので高齢者が少人数で農業を行うことは年齢を重ねるごとに厳しくなっていくと思いました。また、今回はなす、きゅうり、じゃがいもの定植、支柱立てやネット張りなど一部の作業のみでしたが、農業を一から全て行うとなると相当な時間と労力が必要です。舟形町では、農業のみでは十分な収入を得ることができないため、ほとんどの方が兼業をしているそうです。そうなる農業のみに時間をかけることができません。また、体験していた中であまり機械化が進んでいないとも感じました。その為、手作業が多くその分時間も労力も必要でした。これらの舟形町の現状を打開するために、私たちは舟形町の西又かぶのブランド化・販路の拡大を目標にしました。西又かぶとは、出荷を目的とした生産者がいなくなった舟形町の伝承野菜の一つで、鮮やかな赤紫色と大根のような形が特徴的な野菜です。現在は原種に戻すために育てられています。ただ、その原種に戻すだけでも 5・6 年の時間がかかってしまいます。現在の西又かぶ

は要対策品目とされています。そのために、フェアの開催や SNS を活用した知名度の向上などが検討されています。しかし、現在の舟形町には SN を運用できるような人材がいません。ある程度コンピュータを使っても、使いこなすまでには至らないので、地元の若者や大学生の支援などで SNS を活用できる環境を作る必要があります。フェアを行う際にも SNS での宣伝があることでさらに多くの人に来てもらうことができます。このように、現在はまだまだたくさんの課題がありますが、西又かぶのブランド化・販路の拡大という目標を通してさらに具体的な対応策を見つけて舟形町の活性化の手助けをしたいです。

過疎化や少子高齢化が進んではいましたが、今回のフィールドワークで舟形町の良さがとても伝わりました。自然も豊かで、若鮎温泉もとても居心地がよく、一度来た人ならまた行きたくなるような場所だと思いました。なので、西又かぶのブランド化や、その他イベントなどを通して一度舟形町に足を運んでいただきたいです。



工学部 Hさん

舟形での農業体験を通して改めて農業の大変さや楽しさを知ることができた。具体的には、支柱立て、ネット張り、なす、きゅうり、じゃがいもの定植などの多くの作業を体験させて頂いた。これらは正直骨の折れる地道で大変な作業だったが、終わった時の達成感はとても大きかったし、その後のご飯もいつもの何倍も美味しく感じられた。舟形産のお米や山形の郷土料理である芋煮、肉蕎麦など、地域に根付いた食べ物を楽しむことができて良かった。

そんな充実した体験活動の中で、大山さんが地域の方々を代表して、舟形町の課題と行っている対策について教えてくださいました。最大の課題は過疎化で、舟形町堀内地域の人口は 10 年前と比べて 22%も減っている。過疎化に伴い優秀な人材が育たない事も課題となっている。また、舟形町の農業は農家としての利益のみで生きていくことが難しく、兼業が前提になるほど生産者が儲からないという問題も抱えている。その要因として、多くの作物は JA を通して販売しており多

額の手数料が発生する事や、日本の米の消費量低下に伴い値段も低下している事、主な消費者である舟形町民が減少している事などがある。堀内地域はそれらを解決するため、堀内地域協議会を作成し、将来ビジョンを示したり、農事組合法人堀内農産を立ち上げ、他の組合と連携をとったりする事で対策を進めている。

これらの話を踏まえて、舟形町の過疎化の解決策として、地域産業の活発化が効果的だと考える。その手段として最も有効なのが、販路の拡大だ。大山さんが仰っていた悩みの一つに、農作物を作っても買い手が見つからないという事があった。確かに、舟形という小さな市場のみではなかなか利益を出しづらい。そこで楽天やメルカリなど、ネット通販という大きな市場で販売する事でこの問題を解決できると考えた。この方法のメリットは、手数料が最高で 15%程度だという事だ。JA が 40%だという事を踏まえると、明らかに利益率が上がるため、ネット通販を積極的に利用すべきだという事が分かる。しかし、農家の多くはご年配の方々のため、インターネットの利用に慣れておらず、利用方法が分からない事が問題として挙げられる。そこで、私たちがネット通販の方法について調べ、分かりやすく農家の方々に伝える事で、舟形町の素晴らしい農産物を全国に届けることが出来ると考えた。

以上のような舟形町の農産物の販路拡大、それに伴う地域産業の活発化によって、舟形町全体が活気づくことを期待する。

工学部 Gさん

今回フィールドワークに参加して普段は出来ない野菜の定植体験ができました。一回目の体験活動では、なすの定植・支柱立て・黒ワイヤー張り・風避けの青ネット張り・西又かぶの花見をしました。二回目の体験活動では、きゅうり、じゃがいもの定植・水道管整備・地域散策をしました。きゅうりとなすはすでに育ててある苗を植えました。植える際には穴を掘り、その穴に肥料を入れ土と混ぜてから苗を埋めました。きゅうりは今回の定植体験で700本植えましたが、11人で作業したので4時間ほどで終えることが出来ました。しかし11人で作業することで数時間で終えることが出来ましたが、これを数人でするとなると数日かかると感じました。黒ワイヤー張りでは立てた支柱を支えるためと伸びてくるツルや茎を支えるために張りました。黒のワイヤーはプラスチックで作られており伸縮性がとてもあり結ぶときは初めて見る結び方をしました。体験学習をする以前には想像も出来なかった色々な道具が必要になりました。更に肥料や農薬がとても高いことを知りました。

舟形町は9つの集落に分かれているがすべての集落で人口を減らしている。更に少子高齢化が進み集落の機能が維持できなくなっているところもある。舟形町には古

くから伝わる野菜があり具体的には、西又かぶ・くるみ豆・青黒・長尾かぶがある。しかし農業従事者の高齢化と若者の後継者不足により伝承が難しくなっている。特に、西又かぶは地域独自の貴重な財産として生産・販売していた農家の方が亡くなられて以降、出荷を目的とした生産者がいなくなった伝承野菜の1つである。現在、伝承野菜が途絶えないようにするために舟形町農業振興課と県立農林大学校、堀内ファームの協力体制のもとで、伝承野菜を生産し続けられるような体制づくりが検討されています。生産された伝承野菜は、山形県伝承野菜協議会の審査により基準を満たした農産物に特徴的な名称やフレーズ、デザインをつけることで、競合商品との差別化を図ります。こうした取り組みによって競争に打ち勝てるだけの知名度や競争力を獲得し、増収増益が見込めます。

今回フィールドワークに参加して過疎が進む地域の課題とその対策が難しいことがわかりました。現在、日本中で同様の現象が起きているので自分も他人事でないと思いました。

工学部 Kさん

私たちは舟形で主に野菜の定植、野菜を風から守るために鉄パイプを立ててネットを張るなどの活動をしました。

1回目の活動1日目ではナスの定植とネット張りを行いました。定植の際には茎が折れないように、バカ棒と呼ばれる棒を根を傷つけないよう茎に添わせて刺しました。ネットを張るだけでなく野菜1株ごとに棒を刺すのは労力のかかることだと思います。2日目は次植える野菜のための準備で鉄パイプのドームのようなものを立てました。13人で活動したにもかかわらず半日で畑1面分程しか作業が終わりませんでした。この仕事をさらに少ない人数で行っている農家の方々の大変さがよくわかりました。同時に、この畑1面分のきゅうりで利益が70~80万円程であることは割にあっていないのではと考えました。

2回目の活動1日目はきゅうり、じゃがいもの定植を行いました。きゅうり、じゃがいもはなすと違い病気になるために薬剤を蒔きました。こちらも重労働で、これらの仕事を2人で行う大変さは容易に想像できます。「農作業を機械化できないだろうか」と仰っていたので、高齢化している農村では必須なことなのだろうと思います。しかし、機械化には莫大な資金が必要となってきます。舟形町では井戸から水を汲み上げるのにエンジンを使っていました。エンジンを使っても、起動するには人手が必要です。農家の方は、「電気化すればタイマーをかけて自動化できる」と仰っていました。しかし、農家への国の支援は、新規就

農者への最初の2年、3年の支援のみです。これでは機械化などというのは夢のまた夢です。舟形町では新規就農者に対して、農機具やトラクターの貸出が行えるそうです。それに加え、蕎麦の収穫のお手伝いなどで給料を出すなどの支援も行っているようですが、これだけでは贅沢などできないそうです。このような現状では、新規就農者の増加は見込めないのではと思います。市町村ごとの支援は難しいことであるため、国が支援を増やしていくことが新規就農者を増やすためには必要であり、その移住先を舟形町にするための魅力を考えていかなくてはなりません。

私たちが舟形町を魅力的にするために考えたのは、伝承野菜である「西又(にし)のまた)カブ」などをブランド化していくことです。西又カブは根全体が赤く、サクサクとした食感が特徴のカブです。ほかにも舟形町では、「雪室」と呼ばれる雪をかぶせて野菜を保存する方法により、野菜の甘味をより強くするなどの工夫がされています。これらの特徴を生かし舟形町の野菜を有名にしていけば、収益が上がり、新規就農者が集まりやすい環境が整うのではないかと考えています。ブランド化するにあたって考えることは「販路の確保」「ブランド名の発案」「ロゴ、パッケージの発案」です。販路はJAを利用した場合手数料がたくさんかかってしまうため、ネット販売に重点を置きながら考えています。ブランド名、ロゴ、パッケージは「人の目につくこと」を大事にしながら考えたいと思っています。

工学部 Kさん

興味本位で申し込んだフィールドラーニングの活動だが、自分にとって貴重な体験をさせてもらったと思う。思うこと、考えたこと、考えさせられたこと、新たな発見など、色々な事を学ぶことができた。最初に舟形駅に到着した時、とても自然豊かで落ち着いた町だと思った。バスに乗ってセンターに移動するときも、自分の地元とは全く異なって田んぼ、畑、焼畑農業、山に囲まれた壮大な自然、目を引くような光景が広がっていた。センターに到着し、舟形町の説明、現状を聞いた。少子高齢化が進み、町も活気がなく、若者が都市の生活を求めて転出し、悪循環となっていること、また限界集落と呼ばれる集落が存在し、後継者がおらず作物が伝承されず、その作物が絶滅してしまうことなど厳しい現状を知った。最初に行った活動はなすの定植活動であった。今まで小中学校で経験したことがあったのでスムーズに行うことができた。次に外周のネット張りを行った。この作業はとても大変で二人一組で協力しなければならず、時間が掛かり態勢もきつかった。普段は一人でこの作業を行うと考えるとすごく労力が必要だと思った。ネットを張り終えてみると達成感を感じることができた。その日の夜わか

あゆ温泉に入った。露天風呂では舟形の街を見下ろすことができ絶景だった。次の日は支柱を立てた。一本ずつゆがんだり、ずれたりしないようにしないといけないので精神的にも体力的にも大変だった。二回目の活動では一日目にきゅうりとじゃがいもの定食を行った。穴をあける作業が大変だった。二日目は舟形町巡りであった。限界集落と呼ばれている地域を実際にバスの中から眺めた。高齢化が進み、人数が少ないながらも各々が農作業を一生懸命に行っている姿を見ることができた。この活動を通じて僕たちはどうすれば舟形を活気づけ、町興しをし、町の魅力を伝えられるか考えた。SNSを使った方法はないか、とある作物に目をつけてブランド化できないか試行錯誤してみた。お世話になった舟形町の方々に少しでも還元できるような最終発表会にしたい。

工学部 Yさん

私はフィールドラーニングを通して、高齢化の怖さを感じました。中学・高校の授業で高齢化について考えることが多かったのですが、高齢化の影響をこんなにも感じることはありませんでした。少子高齢化問題は、若者だけで解決できる問題ではありません。柔軟に考えることのできる若者を中心に、経験豊富な方に指導をいただきながら地域を巻き込んだり、世代を問わずに協力したりしていく必要があると感じました。

工学部機械システム工学科として、農産物の機械化を進めることができれば、農業の大変さを軽減できるのではないかと考えました。植物を育てていくには人間の手でないとわからないこともあります。ロボットができるのはほんの一部でしかないため、どの点を機械に任せるとか話し合いを重ね何度も作り直します。そのため、農業の機械を作るには農家とのコミュニケーションが必要となります。フィールドラーニングでお世話になった方のように柔軟な考え方ができる年配の方は少ないと聞きました。若者が寄り添う姿勢を見せることで心を開いてくれるようになるのではないかと考えます。また、完成しても普及させていくためには買いやすい価格に設定することも必要になります。農家の方も使えるお金には限りがあるので、機械を作る側の利益だけを考えず、ここでも農家の方と連絡を取り合ってお互いの妥協点を見つけることが大事になってきます。

私はコミュニケーションを取ることが上手いと言われたことがあるので、農業ロボットの研究は自分に向いていると考えます。この体験を通して、災害救助ロボットを作ることを目標に大学に入ったけれど、農家を増やす取り組みの一部として農作業ロボットの研究にも携わりたいとも思うようになりました。さくらんぼを収穫するロボットを作ることができたように、ナ

ス、キュウリなどの定植・収穫作業ができるロボットの研究開発も進んでいけば、農家にとっても、高齢化の面でもプラスに働いていきます。私が農家になることはできないけれど、農家の手助けをすることはできるので、専門科目や農業について勉強して社会に役に立つスキルを身に付けていくことを目標にしていきたいです。



農学部 Aさん

私は舟形町の堀内地域に行ってフィールドラーニングの活動を行った。四日間で次のような活動を行った。自己紹介・大山さんによる舟形町(堀内地域)についての説明・茄子の定植・きゅうりのための支柱立て・西又蕪の花を見に行く・畑の外周を覆う青いネット張り・きゅうりのための黒ワイヤー張り・きゅうりの定植・ジャガイモの定植・水道管の整備・西又地区の散策・葛餅、笹巻の試食。

実際に大山さんに聞いた話によると、堀内地域は約十年で人口が2分の1となり児童数は十人以下となり堀内小は舟形小と統合、さらに教育施設・路線バス・JAがなくなり、郵便局が一つ、商店が二つ、病院と歯医者者が一つずつとなってしまった。それにより、流入人口が大幅に減少し高齢化が進んだ。地域の活性化のためにH27年に堀内協議会・法人堀内ファームを設立し農村の維持に取り組んでいる。現在減反政策対策としてそばの栽培がおこなわれており、70haの減反農地のうち、40haでそばを栽培し、30haが各々栽培しそのうち10haを法人が買取を行っている。しかし、法人自体も高齢化・人材不足のより農村の維持までは難しいという現状だ。

そんな堀内地域にも特産品がある。雪室野菜と西又蕪だ。雪室野菜では大根・人参・白菜・キャベツが栽培される。西又蕪は栽培方法を独占していた方が亡くなり、現在は西又蕪を復活させる段階にある。

見えてきた課題は「過疎」による地域の利便性の減少や農作業の過酷化である。これらの課題を解決するため、そばを使ったイベントの運営、西又蕪のブランド化・販路の確保である。実際に西又蕪を使った商品を開発しアピールをしたかったが実物がないため、ブ

ランド化の円滑化を行うことにした。具体的には、ラベルのデザイン、制作・SNSによる西又蕪の情報の拡散・クラウドファンディングによるラベル代の確保・イベントへの出店などである。現在は計画・準備段階であるができる限り実行できるよう活動に尽くしていこうと思う。

今回実際に農作業を体験して大変さを感じ、農村が抱える課題を体感することができた。農学部である自分にとって貴重な体験ができたと思う。まだ自分には知識が浅いため解決に導くのは難しいと思うが最善を尽くしていきたいと考えている。

農学部 Uさん

今回私たちは山形県の最上地方に位置する舟形町に行き野菜の定植体験を主な活動として体験してきた。

まず具体的な活動内容について書いていく。初めに堀内ファームの大山さんという方から堀内ファームの活動についての講話や舟形町の現状や舟形が抱える問題などについてお話をいただいた。お話が終わった後、堀内ファームの所有する畑に向かいナスの苗の定植活動をした。具体的にはナスの苗を肥料が溶けた水につける、それから等間隔に畑に穴を開けナスを植える。そのあとに風が吹いても倒れないよう 60cm くらいの棒を苗の近くに刺す。定植活動が終わるとアーチ状の金属を設置するために等間隔でうね（野菜を植える少し山ようになった場所）の横にその金属の骨組みを置いていった。置き終わったところで昼休憩となった。食後は堀内ファームの所有するビニールハウスに行き西又カブの花を見に行った。そのあとに畑全体を囲うように青いメッシュ状の幕を張った。これで一日目が終了した。二日目は一日目に置いた金属の骨組みを畑に設置した。これで一回目の舟形町での活動が終了した。

二回目の活動では最初にきゅうりの定植活動をした。約700本のキュウリを植えた。約700本のキュウリを植え終わったら次はジャガイモを植えた。うねに穴をあけ半分に切ったジャガイモの断面を下にして植えた。これで一日目の活動を終えた。二日目は二回目の活動でやる予定だった活動が一日目ですべて終了したということでもう一度ビニールハウスに行きカブの花を見たり舟形町を散策したりした。これで舟形町での体験活動の全日程を終了した。

この活動を通して私は農業の大変さを痛感した。農業はただ作物を植えるだけでなく植える前に支柱を立てたり周りにメッシュ状のシートを張ったりほかにも様々な作業を経てやっと作物を植えることができる。また終わりが見えない中これを少人数でやらなくてはいけない、そしてきゅうりを700本植えても収入は約100万円程度と労働と報酬が割に合わないなど農

業の課題と現状を知ることができ若者が農業から離れていく理由がすこしだけ分かった。

また大川さんの話を聞き伝承野菜の現状についても知ることができた。現在堀内ファームでは一度絶滅しかけた西又カブというものを育てておりブランド化しようとしていて、今は西又カブが持つ本来の芯まで赤いという特徴を持った原種に戻すという活動している途中だということだが、同じ最上地方で栽培されていた吉田カブというカブは絶滅してしまったそうでこのような昔から作られてきた伝承野菜が全国で絶滅してしまっていると思い残念な気持ちになった。伝承野菜の絶滅を減らすためにそこに住む人たちが県や町が協力して絶滅しそうな野菜を保護し伝承野菜を広めていく活動が必要だと思う。



山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：子どもの自然体験活動支援講座（真室川町）

		1 回目	2 回目
日 程		【1日目】6月10日（土） 08:42 山形駅発 09:52 新庄駅着 10:00 新庄駅発（真室川町のバスで自然の家へ） 10:40 自然の家着 11:00 オリエンテーションで真室川町について学ぶ 12:00 昼食（館内食） 13:00 自然体験活動実習 17:30 夕食 18:30 体験活動の意義についてのワークショップ 19:30 ふりかえり 20:00 入浴 21:30 就寝	【1日目】7月1日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着（舟形駅は9:44着） 企画事業「わんぱく探検隊」活動支援 ※プログラムによっては、自然の家へ移動するか、活動場所へ直接移動するかになります。 （真室川町のバスで自然の家へ） 自然体験活動支援 12:00 昼食 自然体験活動支援 17:30 夕食 自然体験活動支援 21:00 子ども就寝 スタッフミーティング 21:30 スタッフ就寝
		【2日目】6月11日（日） 06:00 起床、朝の集い 07:30 朝食 09:00 打合せ（指導員・ボランティア・学生） 10:00 企画事業「めんごキャンプ①」活動支援 自然体験活動支援 12:00 昼食 自然体験活動支援 わかれのつどい 14:30 後片付け・FLミーティング 15:10 自然の家バス発（真室川町のバス） 16:14 新庄駅発（舟形駅は16:21発） 17:23 山形駅着	【2日目】7月2日（日） 06:00 起床、朝の集い 07:30 朝食 寝具片付け 09:00 自然体験活動支援 12:00 昼食 13:00 ふりかえり（参加者） 14:00 わかれのつどい 14:30 後片付け・FLミーティング 15:20 自然の家バス発（真室川町のバス） 16:14 新庄駅発（舟形駅は16:21発） 17:23 山形駅着
	バス降車後の移動手段	・新庄駅～自然の家および活動エリアへの送迎については、真室川町教育委員会のバス	・新庄駅～自然の家および活動エリアへの送迎については、真室川町教育委員会のバス
		・新庄駅～自然の家および活動エリアへの送迎については、真室川町教育委員会のバス	・新庄駅～自然の家および活動エリアへの送迎については、真室川町教育委員会のバス
	宿泊料金	630円	630円
	必要経費	飲食事代、シーツ代、活動費 3,370円	飲食事代、シーツ代、活動費 3,370円
	小計	4,000円	4,000円
	交通費	山形駅⇄新庄駅（往復） 2,340円	山形駅⇄新庄駅（往復） 2,340円
	合計		12,680円
学生が準備するもの	<ul style="list-style-type: none"> ・野外活動に適した服装 ・帽子 ・内ズック ・ズック（トレッキングシューズ） ・長くつ ・着替え ・タオル ・軍手2組 ・洗面用具 ・懐中電灯（ヘッドランプ） ・かっぱ ・筆記用具 ・水筒 ・リュック ・健康保険証 ・大きめのビニル袋3枚 	<ul style="list-style-type: none"> ・野外活動に適した服装 ・帽子 ・内ズック ・ズック（トレッキングシューズ） ・長くつ ・着替え ・タオル ・軍手2組 ・洗面用具 ・懐中電灯（ヘッドランプ） ・かっぱ ・筆記用具 ・水筒 ・リュック ・健康保険証 ・大きめのビニル袋3枚 ・水着とその上に着る長袖、長ズボン 	
留意事項	幼児～小学2年生までの児童とその保護者を対象とした事業「めんごキャンプ①」の班付きスタッフとして、事業のねらいを意識しながら子どもの自然体験活動支援にあたります。活動内容は天候等により変更する場合があります。	小学3・4年生を対象とした事業「わんぱく探検隊～夏～」の班付きスタッフとして、事業のねらいを意識しながら子どもの自然体験活動支援にあたります。活動内容は天候等により変更する場合があります。	

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Sさん

私はフィールドラーニング共生の森もがみの一回目である「めんごキャンプ」と二回目の「わんぱく体験隊」のスタッフとして活動してみて、子供の成長のスピードの速さと神室少年自然の家が実施しているプログラムの素晴らしさを知った。

子供たちと初めて接したときは、お互いに緊張していて私が質問してもはっきりと答えたり、反応を示したりすることが少なかったが、活動を通していく中で私が何か話題を作らなくてはいけないというよりも、子供たちの方から積極的に学校での友達のことや、趣味、家族について教えてくれるようになった。また、初めは活動に積極的ではなく、他の子に交じることなく一人で行動していた子に関しても後半の活動では、私の方から声掛けをしなくても自分から積極的に手伝いをしてくれたり、他の子どもたちに交ざって楽しそうに遊んだりする様子が多く感じられた。初めて会った子達と協力したり、喧嘩したり、泣いたりもしながら自然の中で成長していく子供たちを見て、子供の成長スピードと吸収力の速さに驚かされた。

このように子供が成長する機会というのは日常の中にたくさんあるが、神室少年自然の家が実施している自然の中で活動する非日常でしか成長できない部分というものもあるのではないかと考えた。神室少年自然の家が実施しているプログラムの「めんごキャンプ」と「わんぱく体験隊」のスタッフとして活動してみて、どちらも子供の自主性を重んじていると感じた。テントを組み立てる時も、ご飯の準備や後片付けをする時も、大人の介入は最小限にし、子供たちが自分からやらなくてはいけない状況が多かったと感じる。子供のうちに普段の生活とは違った中で自分なりに考えたり、自然に触れたりしながら、たくさんの経験をするのが大切だと感じた。

昔と比べて自然に触れたり、外で遊んだりする機会が少なくなってきた今、神室少年自然の家が実施しているようなプログラムは子供たちの成長や経験値にとって大切なものだと考えた。神室少年自然の家では他にも豪雪地帯であることを生かしたプログラムなどがあり、雪国の文化を学んだり、雪上でキャンプをしたりなど様々なことを体験できる。このような体験は子供たちにとって大切であり、神室少年自然の家が実施しているプログラムをもっと多くの地域に広めていくべきだと感じた。

地域教育文化学部 Kさん

フィールドラーニング第一回目では小学校入学前、小学校低学年の子供たちと活動した。二回目のフィールドラーニングは小学校中学年の子供たちとの活動だった。一回目も二回目も子供たちと一緒にカレー作りをしたり焚火を囲んでマッシュマロを食べたりした。二回のフィールドラーニングで私は年齢による子供たちの行動の違いを身をもって体験した。小学校入学前、小学校低学年の子供たちは大学生に言われたらなにかをするという感じだった。しかし、小学校中学年の子供たちは自分で考えて行動している子が多いように感じた。例えば、カレー作りのとき小学校中学年の子供たちは「次はこれをやるんでしょ」と言って次使う道具や材料を持ってきてくれたりした。一回目と二回目を比べると周りをみて行動できている子が増えたと感じた。また、一回目の子供たちはグループの子供たち同士で協力しあったりということがあまりなかった。どちらかというと一人で遊ぶか大人と遊ぶかという感じだった。ほとんどの子が少人数で遊んでいた、しかし、二回目の子供たちはグループ内の子同士で協力しあって仲良くなっていた。一回目と違って集団で遊んでいた子がほとんどだったように感じた。一回目の子供たちと比べて激しい遊びをするようになっていたし、体力もあるなど感じた。また、二回目は一回目と比べて言葉の喧嘩をしている子が多かったように思う。同じグループの子同士の会話が盛んな分、言い合いをしたりすることが多かった。まだ、小さい子供だとうまく自分の気持ちを言語化できないため手を出してしまうことが多かった。一回目も二回目も泣いてしまう子供がいた。一回目のフィールドラーニングでは自分が転んでしまって痛かったから泣いたなど自分のことで泣いている子が多かったように思った。しかし、二回目のフィールドラーニングでは誰かに何かをされたから泣いたなど自分以外のことが原因で泣いている子が多かったと感じた。このように一回目と二回目のフィールドラーニングでは年齢の違いによる子供たちの変化が印象に残った。

今回フィールドラーニングで行った真室川町は林業が盛んである。現在真室川町は少子高齢化が進んでおり、人口の約四割が高齢者である。このままでは林業を継ぐものがいなくなってしまう。この問題を解決するにはフィールドラーニング内で林業に関する活動をし、子供たちに少しでも興味を持ってもらうことが大切だと考えた。

地域教育文化学部 Tさん

私は、真室川町での子供の自然体験活動支援講座を通して、主に真室川町の特徴についてと子供との接し方について学ぶことが出来た。第一日程のめんごキャンプの5歳ぐらいの子と第二日程のわんぱく探検隊の小学校3年生ぐらいの子と比べると、どの年代の子供たちでも活力を持っていたが、進んで自分の役割を果たそうとする小学校中学年の凄さを実感した。しかし、それに伴って、小学校中学年となると、他者との交流を積極的に行っていたと感じた。それにより、意図せずとも相手にきつい言葉をかけてしまったり、されたら嫌なことをついてしまったりした子どもが増えていたように思う。私自身今までは、嫌なことをされた子のフォローは、できる限りのことをしたいし、落ち着くまでそばに居てあげることがベストだと思っていたが、その時にちょっと離れたところで見守るのも優しさであると気付かされた。実際にフィールドワークでも自分の班の子どもが他の子からいやなことをされたたと泣いていたが、大学生が直接手を差し伸べるのではなく、自分でその事と向き合い、自分一人で乗り越えた姿を見ることができ、成長を感じた。私自身、泣いている子など見てしまうとつい放っておけなくなるが、あった出来事を自分で咀嚼し、乗り越えていく過程も大事であると学んだ。また、こどもの安全に関わらないことであれば、直ぐに大人や大学生が手を差し伸べるのではなく、子供がどうしたいのかを尊重し、必要に応じて手助けを行うのがちょうどいいのではないかと思った。神室少年自然の家の方々はそのような対応をされており、振り返ってみると、最もその子の成長を手助けできる方法だと思った。

今回の真室川町での子供の自然体験学習活動の支援を通じて、多くの気づきや発見があり、また同じ大学生や神室少年自然の家の方々からも良い刺激を頂けた。子供たちも成長できたイベントであったが、私も今回のイベントで成長できたと感じている。今現在、地域教育文化学部で教育について学んでいる私にとって大変有意義で、貴重な体験をさせてもらったと感じている。将来的には小学校教員を目指しているので、この経験を胸に、今後も様々な活動に積極的に参加していきたいと思っている。



地域教育文化学部 Mさん

今回のフィールドラーニングの活動を通して、子どもの自然体験は成長においてとても重要であり、心身の健康と成長に影響を与えると考えました。屋外で遊ぶことや自然の中で活動することは、運動能力の発展や、体力の向上に寄与します。例えば、走り回ったり、木登りをしたりすることで筋力やバランス感覚が養われ、適切な運動量を確保することができたり、日光を浴びることで免疫力を高めたり、成長に必要な要素を補うことができます。また、自然の中ではストレスが軽減され、子どもたちはリラックスした状態で自分自身を表現することができます。活動では、自然の美しさや豊かさに触れた子どもたちが好奇心を刺激され、自然の中での遊びで創造性を発揮している姿が多くみられました。この経験から、自然の中での活動は、子供たちの幅広い能力を促進し、バランスの取れた発達をサポートするため、子どもたちには自然との触れ合いを通じた体験をさせてあげることが重要だと感じました。

しかし、インターネットやテレビ、ゲームの普及、また感染症の流行などにより、近年では子どもと自然の直接的なかわりが急激に減少しているという現状があります。そこで私は、この現状に対する解決策を2つの立場から考えました。まず、学校や地域団体が、自然とのかわりを促進する取り組みを行うことが重要です。例えば、校庭や公園に自然を取り入れた学習スペースや遊び場を整備したり、学校が地域の自然保護活動と連携し、子どもたちが実際に自然活動を保護する活動に参加する機会を提供できるようなカリキュラムを組み込むなどが挙げられます。また、家族は子供たちが自然に触れる機会を提供する重要な役割を果たすと考えます。散歩やピクニック、キャンプなどのアクティビティを計画し、家族全員で自然とのつながりを楽しんだり、自宅の庭やベランダで植物や菜園を行うことで、子どもたちに自然を身近に感じさせることができます。また、現代の子供たちはデジタルデバイスに多くの時間を費やしている傾向があるため、デジタルデトックスを行い、代わりに自然への関心を向けたり、価値や美しさを伝えることも有効だと思います。これらの解決策を組み合わせることで、子どもたちが自然に触れる機会が増え、自然とのかわりを通して子供たちは豊かな体験から健全な成長と発達を促進できると考えます。

神室少年自然の家では、「ChanceにChallengeしChangeする」という「3つのC」がかかげられており、参加していた子供たちとめったに体験することのできない大自然での活動で、半日や1日という短い時間の中でもたくさんのことを感じ、学ぶことができました。子供たちとの関わり方やサポートの仕方を自分自身が学

ぶのと同時に、子どもたちが自分たちで協力して活動を進められるようになっていき、ともに成長することができたこと、そして好奇心で目を輝かせていた子供たちの笑顔をたくさん見ることができ、とても幸せで学びの多い活動となりました。真室川町の豊かな自然と、子どもたちが自然と触れ合う貴重な機会をこれから先も残していけるように、私たちにできることはないかさらに探究していきたいと思います。

地域教育文化学部 Kさん

私は、真室川の自然の中で子どもたちと密にかかわるという貴重な体験から、様々な学びを得ることが出来た。その中でも、想像では分からなかった子どもの実態や、子どもに対する関わり方が第一に挙げられる。本講座を受講する前は、子どもというものは自分のやりたいことだけをしたり言ったりする我儘なものだと思っていたが、子どもたちと実際に関わってみてそのイメージが大きく変わった。皿洗い、テント設営など、きちんと頼めばほとんどの子が遊ぶことをやめて手伝ってくれた。それ以上に、自分のできることは率先してやりたいという気持ちが伝わってきた。今までは、子どもたちと接するときは興味を向かわせるところから手取り足取り教えてあげなければならないのだと思っていたが、子どもたちは十分に自立性を持っていて、挑戦したいという好奇心が旺盛であるということを学んだ。実際に、神室少年自然の家の職員の方々も、子どもたちを特別扱いするというわけではなく、ダメなことや嫌なことをしっかりと伝え、「やってあげる」ではなく「やらせる」ことを徹底しているように感じた。子どもと関わる時は気を遣う必要があると思いついていた私にとって、このような学びはこれからの子どもとの関わり合いを大きく手助けしてくれるだろう。そして、本講座では2回の自然体験キャンプのサポートを担当したが、年齢による子どもたちの様子の違いを感じることができた。1回目のキャンプでは幼稚園生から小学校低学年の子どもたちと、2回目のキャンプでは、小学校3・4年生の子どもたちと触れ合った。年齢が低い子たちと比較して、小学校中学年の子どもたちは人の話を聞く力がついているように思えた。年齢が低い子たちは、大人の話は聞ける場合が多くても、ほかの子の話聞くことが難しい様子だった。小学校に通い始めて同じ年の友達と関わりあうことにより、大人だけではなく同じ年代の子どもたちともしっかりと意思疎通が出来るようになるのではないかと考察する。また、年齢の低い子どもたちは会ったばかりのうちから壁もなく接してくれたのに対し、小学校中学年の子どもたちは対面した最初のうちは大人しく礼儀正しくして、打ち解けるうちにだんだんと子どもらしさや個性を表すようになって

いった。これも、何年間かの通学によって「自分」と「他人」の区別ができるようになり、パーソナルスペースが築けるようになったのではないかと考察する。

また、活動を通して、子どもだけではなく一般の大人に向けた自然体験事業の大切さも実感した。私は今回の講座が何年かぶりの自然体験になったのだが、都市部では感じることでできない自然と触れ合えたことはとても良い経験になった。私の地元の自然の家について調べると、ボランティア養成以外の大人向け自然体験が開講されていない施設もあれば、一般大人向けの体験事業を盛んに行い、SNSを通じて大人向けのキャンプ情報を発信している施設もあった。神室少年自然の家でも、大人一般向けの自然体験講座が開かれている。自然と触れ合うのが難しい都市部の人や若者にとって、こういった活動を行っていることは神室少年自然の家の強みになるのではないだろうか。

このように、本講座を通して様々な発見や体験を得ることが出来た。今回学んだことを活かして、これからも積極的に子どもたちと関わったり自然と触れ合ったりすることを心がけたい。



理学部 Yさん

今回、神室少年自然の家に行き、真室川町が開催しているめんごキャンプとわんぱく探検隊での子供の自然体験活動の支援員としてこの二つのイベントに参加した。今回、この活動に参加するにあたって、子供の「好奇心・やりたい気持ち」と「安全性」の二つの観点を特に意識して参加した。まず一日目に小田原短期大学の島貫織江教授の子供についての講義を受け、子供を「見守る」ことについての重要性や難しさについて学んだ。めんごキャンプでは幼稚園から小学校低学年までの子供を対象とした活動であり、カレー作りや薪割りなどを行った。包丁や鉈などの刃物を扱ううえで好奇心と安全性の両方を確保するのはとても難しかった。一回目では子供のやりたいことを見守るというのは想像以上に難しいことが分かった。

二回目のわんぱく探検隊では一回目の「好奇心・やりたい気持ち」と「安全性」の二つの観点に加え、「見守る」ことを意識して活動に臨んだ。わんぱく探検隊は子供たちと神室少年自然の家で一泊二日過ごし、野外炊飯や川遊びを行った。また、対象が小学三、四年生であり一回目に比べ活動に対して「安全性」を考える機会が少なかったと思う。反面、子供たちの「やりたい」という声をよく耳にする機会が多かったように感じる。また一回目に比べ子供たちが言い争い押し合っている場面をよく見たように感じる。一回目に比べ年齢が上がり、個々の意見をはっきり持った子が多く、また今回の活動では自主性を重んじたため、意見の衝突が多くなったためではないかと考える。また川遊びでは子供たち同士で流れている場面も多くみられ、子供たちの成長を感じられる場面が多かった。しかし、活動中に泣き出してしまいうもいたため、使う言葉や表情には十分に気を付けなければならないと思った。

今回のフィールドラーニングで学んだことは、子供を「見守る」ことの重要性和難しさである。「見守る」ことは、単に子供の自主性を育てるだけでなく、子供が様々な欲求を満たす機会につながるからである。子供の「やりたい」という欲求を満たすために私たちはすべての行動をサポートするのではなく、子供たちが自分たちでできるようわかりやすい言葉で説明したり、最初に自分がやってみて、ポイントを説明するといったことで子供の「できた」という成功体験を増やすことで子供たちの成長につながるのではないかと考える。しかし、すべてを理解し、安全に作業を進めることは不可能なので、そういった場合には最低限のサポートをすることも必用になってくると考えられる。将来、子供と関わる機会が絶対できると思うので、今回学んだ「見守る」ということを意識して子供と接し、子供の「やりたい」という好奇心を満たせるような行動を取っていききたい。今回のフィールドラーニングでは将来必要になる能力や考え方を学ぶ機会になったと思う。

理学部 Sさん

私はフィールドラーニングに参加し、真室川町のめんごキャンプとわんぱく探検隊の活動を行った。2つの活動に参加し子供との向き合い方、自然の素晴らしさを感じることができた。めんごキャンプとわんぱく探検隊は対象とする学年が違い、めんごキャンプは幼稚園生と小学校低学年を対象の活動で、わんぱく探検隊は小学校3.4年生を対象とした活動だった。一回目のめんごキャンプでは、幼稚園生を対象としていたので、関わり方、怪我などの面でもとても不安があった。真室川町の神室自然の家についてすぐに山内を案内してもらい、危険の場所を教えてもらった。また、まきの割り方や火起こしの方法を学んだ。初日からたくさ

んのことを教えてもらい、怪我の面では防ぐことが出来る自信ができた。いざ、幼稚園生の子と関わってみると、私が思っていなかったことが幾つも起こった。子供は自然で、やりたいことはやる、やりたくないことはやらないと単純だ。このようなときにどう対応を行うのかを私たちに問われていた。私は子供から目を離してはいけないと考えていたが、この解は間違っていた。子供は1人であることを嫌う。つまり、私が目を離すことによって、子供は自然と自分がしないといけないことを気付くことが出来る。この発見は、体験活動を通して知ることが出来た。

2回目のわんぱく探検隊は2日間子供と一緒に活動を行った。めんごキャンプと比べると年齢が高いこともあり、サポートする面が少なかった。私が担当したグループの班員4名は全員違う小学校出身で初対面の集まりだった。最初は、指示を出す機会が多かったが時間が経つにつれて、子供たちだけでも活動をすることができるようになっていた。また、班を超えて、いろいろな子と、協力している場面を見ることができ、短時間で子供の成長をはっきり見ることができた。

このフィールドラーニング2回の活動を通して、楽しさも勿論あったがそれ以上に子供の関わり方など沢山の学びを得ることが出来た。感じること・考えていることは、個人差があるということを確認することができ、それぞれの子にどう対応しないといけないかを考えるきっかけになった。また、子供自身も成長することができたのと同時に私自身も成長することができた。このフィールドラーニングは、神室自然の家の職員の皆様を始め沢山の人の協力のおかげで、活動ができました。この貴重な経験を生かせるようにしたいです。

理学部 Kさん

私は、真室川町での子供の自然体験支援講座に参加して、子供たちの成長の様子を肌で感じるすることができた。FL1 回目の「めんごキャンプ」は、年中から小学2年生までの子供たちが親元を離れて自然体験をするプログラムだった。最初は不安そうにしていた子供も居たが、野外炊飯や自由時間での遊びを通して、自分の役割を立候補したり、鬼ごっこやかくれんぼなどの遊びを主体的に企画したりする様子が見られた。FL2 回目の「わんぱく探検隊」は、小学3・4年生がテントで寝泊まりする1泊2日のプログラムだった。「めんごキャンプ」より年齢層が上がっていたため、子供たちから落ち着きを感じられた。プログラムが始まった当初は、班員同士でも少し距離を置いた関わりが見られたが、1日目の野外炊飯やキャンプファイヤーを経て、仲間意識が形成されていたように感じた。テント泊では子供たち同士でスペースを確保したり、ブルーシート泊で眠れなかった子を快く受け入れたり協力、気遣いを

しながら夜を過ごす様子が見られた。2日目は川遊びを行った。急流に足を取られそうになりながらも手を繋いで助け合う子供たちの姿が見られた。

今回の自然体験支援講座では、子供たちを「見守る」立場で子供たちを引率することが求められていた。神室少年自然の家の講師の方々から危険な場所や植物、道具の使い方などを教わり、それらの危険に注意しながらもなるべく子供たちの意思に沿った活動が出来るように手を貸す具合などを考えながら活動した。改めて子供たちはそれぞれ多様な性格や考え方を持っていることを実感し、やりたいことが異なる子供たちに対しても他の班の仲間と連携を取りながら気を配ることができたと感じている。仲間と打ち解けて次第に積極的な行動が見られるようになる子供たちの成長の機会を妨げることが無いよう見守った経験は今後、子供と関わる上で大きな糧となるだろう。

また、子供たちのほとんどが神室少年自然の家のプログラムのリピーターであるということが興味深く感じた。神室少年自然の家には自然や雪を生かしたプログラムが豊富にあるため普段の学校での活動とは違った学びを得ることができ、バリエーションに富んだ活動を楽しめることが要因であると考えられる。子供たちの中には虫や植物に強い関心を持っている子も多く、小さい頃からの自然体験が子供たちの好奇心に良い影響をもたらしているのではないかと考えた。

今回の神室少年自然の家での活動では子供たちの成長を見届けながら我々も貴重な成長を得られたと感じている。子供との関わり方のノウハウを教えていただき、子供たちに対しての褒め方ややるべきことに誘導する方法など子供たちに自主的に動いてもらうための学びを得ることが出来た。ボランティア活動に対しての関心も高まり、非常に有意義な活動であったと感じた。

理学部 Kさん

今回のフィールドワークを通して普段接することのない小学生と大自然の中で活動をするという貴重な体験をすることができました。

一回目のフィールドワークの一日目は子供たちにどのように教えながらキャンプ設営や火起こしをするかを考えるために大学生だけで野外炊飯をしました。ここでは食材を切る時は安定した形までは大学生が切るや、薪割りで鉈を持つのは大学生などと子供たちと活動をするにあたり安全に進めていくための注意点を考えながら進めていきました。その後は、島貴先生から子供について学び、子供がどういう考えで動いているのかや子供とどのようにして話すべきなのかを学びました。

二日目ははじめにめんごキャンプの受付として子供

や保護者の方に名札を渡す作業をしました。ここでは立って子供と接しているときは「怖い」という風に言われてしまったので怖がらせないように膝立ちをしてできる限り子供と目線を合わせるなどの工夫をしました。次に子供たちとカレー作りを行いました。ここでは一日目で考えた安全に進めるための注意点や島貴先生から学んだ子供との話し方を意識しながらカレー作りを進めていきました。カレー作りの次は自由時間となり子供ちと鬼ごっこなどでたくさん遊びました。ここでわかったのは子供の体力は尽きることを知らないということです。子供たちと遊んでいると大学生の私たちが先に疲れてしまっていることが多くありました。

二回目のフィールドワークでは前回と行う内容は似ていたので一回目で学んだ注意点を意識しながらプログラムを進めることでうまくいきました。また前回よりも年齢が上がっているの一回目より子供たちに任せられるようになりました。しかし年齢が上がり子供たちの語彙力や力が成長しているため喧嘩をする場面をよく見るようになりました。しかし子供はその時喧嘩をしても次の日には仲良く話しているということが多くあったので心も一緒に成長していると感じました。

今回のフィールドワークで調査したことは、子供が神室自然の家についてどう思っているかです。子供に神室の家で何が足りないかと聞きました。そこで子供の回答は「ない」でした。この答えを子供から聞いて私はこの神室自然の家というものがどれだけ子供たちから愛されているかがわかります。神室自然の家は自然が豊かで遊具もあり、職員の方々も子供たちの心をすぐにつかむとても良い人ばかりでした。その環境こそが小学生の子供にとっては素晴らしい場所なのだと思えることができました。



医学部 Tさん

2回のフィールドドローイングを通して、1回目は未就学児から小学校低学年、2回目は小学校中学年と、年齢の違う子供たちと関わりました。この体験から、子供は年齢によって発達度合いが異なるため、キャンプの活動を行う上で大人が意識すべきことが違ってくるということがわかりました。具体的には、1回目のキャンプでは、子供たちが元気いっぱい、すぐに大学生とたくさん話してくれるようになった印象でした。2回目のキャンプでは、年齢が上がって自分でできることが増えたり、精神的な発達によって人見知りをしたりしていて、1回目とは子供たちの様子が違っていました。また、2回目の小学校中学年の子供たちは、大学生とも遊んでいましたが、子供たち同士でたくさん遊び、仲良くなっている印象が強かったです。私は今回のようなキャンプに班付きスタッフとして参加するのが初めてで、子供との接し方がわからなかったため、子供と関わる時のコツを調べ、実践してみました。

まず意識したのは、子供に共感することです。一緒に遊んでいるときに子供が「楽しい」という発言をしたら、私も「楽しいね」と言ってオウム返しをするようにしました。また、夕食のカレー作りのときに、積極的に手伝いをしてくれた子や、頼んだことをやってくれた子には、「ありがとう」と感謝の気持ちをしっかりと伝えることも意識しました。そのほかにも、私の担当した班以外の班の子供たちとも、鬼ごっこやだるまさんが転んだなどで遊び、距離を縮めることができたと思います。そうしていく中で、最初は人見知りをしていて、私が話しかけても緊張した様子で目を合わせず、うなずきだけだった子が、だんだんと笑顔を見せてくれるようになったり、話してくれるようになって、とても嬉しかったです。事前学習で調べたことが実際に役立ち、私にとっても調べたことを実践するという、成長の機会となりました。

今回のキャンプ活動を通して、子供たちの年齢が3歳ほど違うと、行動や言動、自分でできることが大きく異なることを実感したため、子供の成長スピードはとても早いということに気づきました。また、子供の年齢に合わせて、大人の声かけや手助けの程度など、意識すべきことがたくさんあることがわかりました。今後、今回のような子供の自然活動支援を行う機会があったら、今回の経験を活かして、子供にとっても私自身にとっても学びや成長の機会となるように努めたいと思います。

医学部 Sさん

私は今回真室川町で行われた子どもの自然体験活動に参加して、子どもたちの年齢に応じて接し方を変える必要があることを学んだ。年齢によって同じ班の子との接し方や、活動への参加意欲などが異なっていることに気が付き、子どもたちに合わせた適切なサポートについて考えるきっかけになった。

1回目の活動である年中、年長児、小学1、2年生を対象としためんごキャンプ①では、「見守る」ということがキーワードとなった。大人が介入しすぎると、子どもたちが自ら考え、成長する機会を奪ってしまうということに気が付いた。子どもたちへの関与を「見守る」ということだけにすることで、子どもたち同士でコミュニケーションをとり、協力して活動に取り組むことができるということが分かった。しかし、実際にやってみると、子どもたちを「見守る」ということはすごく難しかった。活動の途中で飽きてしまい遊びに行ってしまった子どもに私が活動に戻るように説得してしまったり、一人でいる子について話しかけすぎてしまったり、できないと言われたらすぐに手伝ってしまったりというように、子どもたちに介入しすぎてしまった。

2回目の活動である小学3、4年生を対象としたわんぱく冒険隊～夏～では「積極的に関与する」ということを大切にしたい。めんごキャンプ①とは違い、班に関わらず、子どもたち同士のつながりを子どもたち自身で作っていることに驚いた。大人が積極的に関与し目標を提示すると、自分たちでどのように目標を達成するかについて考え、協力して目標を達成しようとしていた。また、活動中にほかのことを始めてしまった子どもに対し子どもが注意するといった場面も見受けられた。しかし、「積極的に関わる」ことの難しさも実感した。危ない行動を制御するために、強く注意しなければならない場面があったが、子どもにどこまで強く注意していいのかと悩むことがあった。

以上のように、年齢層の違う子どもの自然体験活動に参加したことで、子どもたちの年齢によって関わり方を変える必要があり、どちらの関わり方にも違った難しさがあることがあるということを実感することができた。普段、小さな子どもと関わったり、子どもたちの成長を近くで見たり、適切な関わり方について考えたりする機会がなかったため、今回の自然体験活動はとても良い経験になった。

真室川町の豊かな自然の中で行われる自然体験活動は子どもだけでなく、一緒に参加した私たち大学生も成長させてくれるものだった。

医学部 Kさん

私は、真室川町で行われた「子供の自然体験支援講座」へ参加し、合わせて2回の日程で行われたフィールドラーニングの授業を通して、真室川町の地域の課題点や、その地域の魅力について考えを深めることができた。本レポートでは、私自身が現地での活動や、子どもとのかかわりを通して考察したことを述べる。

自然体験活動の対象は、1回目が幼稚園児で、2回目は小学校中学年の子供たちであった。どちらの子供たちにも共通していたことは、サポーターとして参加した大学生の私たちと初めて出会った時と、一連の自然体験活動を終えた後とは、大きく成長が見られたという点である。初めて出会ったときは、こちらが穏やかに接していても緊張があつてか、中々輪に入れない子、誰に対しても敬語で話し、壁を作ってしまう子など様々であり、私自身も統制が取れるのか不安に感じていた。しかし、子供たちは自然の中で目にする生い茂った木々や、自然の中の遊具、初めて行うテント設営などに多くの刺激を受けて、初めて行うことに目を光らせ、積極的に自分のできる事を探していた。特に、その反応が顕著であった活動は、野外炊飯でカレーを作る活動だ。両日程の多くの子供たちは、今まで包丁を持って料理をしたことがなかった。しかし、渡された具材をどの様に切ろうか子どもたち同士で話し合い、注意する点も理解したうえで積極的に取り組んでいる姿が見受けられた。その際、私たちが指示を出して円滑に活動を進めさせることは容易であったはずだが、子ども自身が考えを巡らせて好奇心のままに挑戦する様子を「見守る」ことが大切であると感じることができた。子どもたちが自然に触れる中で多くの刺激を受けて、好奇心のままに自由に行動している姿をみて、発達段階に関わらず子供時代に自然の中で生活し、自然に触れる機会を多く持つということは、心身の成長を促し、その子のアイデンティティの形成に良い影響があると考えた。



工学部 Iさん

私は今回、「山形から考える」の中にある、もがみの集中講義で真室川町に訪れた。真室川町は新庄駅から車で約30分の場所にある自然豊かな町である。私たちは、神室少年自然の家で一泊二日の活動を合計二回行った。一回目の一日目は、二日目の「めんごキャンプ」のサポートの仕方や、二回目の活動の時に必要な事をいろいろ教えていただいた。特に印象に残っているのは、ご飯を釜で炊くときに使う焚火に、必要な薪の割り方と火のおこし方である。他にも、テント泊の為のテントの立て方なども印象に残っている。私たち大学生全員が夢中になり、自分たちが授業で真室川町に来ていることを忘れてしまうほど、とても楽しい貴重な経験をさせていただいた。二日目は、一日目に学んだことをふまえ、遂に子供たちと活動を行った。小学生低学年の子供たちと初めて会った時にはなかなか話してくれないことや、何でも自分でなく大人の人たちを頼ろうとしていたが、半日一緒に活動していく中で、なるべく自分で考えて、自分でできるように工夫してサポートした。その結果、どんどん打ち解けていき、子供たちの笑顔があふれていった。また、まず自分でやってからというように行動が変わっていき、半日でこんなに子供は成長するのだなと感じた。二回目の時には、一日目から今度は小学生中学年の子供たちと行動した。中学年にもなってくると、逆に自分一人でやろうとしたり、他の子たちと喧嘩が始まったりなど逆に大変なことが多かった。そのため、なるべく自分一人でやらせたりするのではなく、他の子たちと協力してやるように誘導しながらサポートするように意識した。すると、一日目のお昼過ぎには、子供たち同士が仲良くなって、子供たち同士でやり方を教えあうような行動が増えてきているのを見ることができ、子供の成長の早さを感じた。また、職員の方々も基本的に自分でやったことは自分で何とかしなさい、というような対応をしているのを見てここまで冷静に見守ることができるのはすごいと思った。

この二回の活動を通して、自然を体験するだけでなく、子どもの人としての成長も促すことができると知り、このような活動を子供にさせるのはとても大切だと感じた。また、二回目の事前学習の時に、子供同士の会話や行動を促す方法などを調べていたため、実際二回目の時にはそのことを踏まえてサポートをするようにし、子供同士でのやり取りが増えているのを見ることができてとてもよかったなと感じた。また、子供との会話で「あれ何？」などいろいろな疑問をぶつけられることが多く、子供の好奇心と触れ合うことができ、自分たちのような大学生や大人も子供に見習うべきことがたくさんあるのではないかと感じた。今回のフィールドラーニングに参加して、自然の素晴ら

しさと、子供からも学ぶことが多くあるということに気づけたため、大人にとっても参加するといろんな体験や発見ができるようになった。このようなプログラムの偉大さを知れて、とても貴重な経験になった。

工学部 Nさん

私は今回の集中講義で真室川町にある神室少年自然の家に訪れました。真室川町は山形県の北部に位置する自然豊かな町です。神室少年自然の家は新庄駅からバスで約40分ほどで到着する場所に位置し、道中は田舎ならではの自然の風景を楽しみながら移動しました。一面に広がる畑や田んぼの景色は圧巻でした。私たちはここで1泊2日の活動を2回行った。1回目の活動では、2日目に「めんごキャンプ」という幼児・低学年対象の親子同伴のイベントがあり、私たちはこの活動に向けて前日に活動にあたって注意すべき点を確認しました。この活動のねらいは「自然体験活動を通して、自然の良さを感じようとしたり、仲間と関わろうとするきっかけをつくる。また保護者は、幼児・児童期における自然体験、生活体験の意義や子育てについて理解を深める。」とされており私たちはこれを達成するために努力します。自然の家の職員からはこの活動で大事なことはあくまでも「見守る」ことであり、子どもたちの自主性を育むため私たち大学生は必要以上に手出ししてはいけないと言われていました。しかし当日にいざ子どもたちと直面してみるとこれが難しく、つい口出ししてしまう場面もありました。ともに参加したメンバーからも指摘され、始めは子どもとの接し方に苦戦していたが、注意して行動することを心掛け、終盤には慣れてきて子どもと楽しく過ごせました。また、初めは緊張しているのか全く話しかけてくれなかった子どもが多かったが、最後には進んで絡んでくるようになり子供の成長を感じられた気がしてうれしかったです。

2回目の活動では対象年齢が少し上がり小学生3・4年生です。また1回目とは違い今度は丸々2日間ともに行動します。前回よりも年齢が上がったことで子どもとのコミュニケーションがとりやすくなったが、前回よりもより性格の違いがはっきりと感じられるようになり、その違いから子ども同士で意見が合わなくて喧嘩に発展してしまうこともありました。泣いたりする子どもでできて子どもの喧嘩に大人がどこまで干渉してよいのか苦戦しました。しかし終わるころにはみんな笑顔になってお別れの時はバスの中から名前を呼びながら手を振ってきてくれた時にはこの活動に参加できて心の底から良かったと思えました。

この自然体験活動を通して、子どもたちとのコミュニケーションやリーダーシップの重要性を再認識しました。彼らは純粋で好奇心旺盛であり、私たち大人に

とっても貴重な存在です。彼らから学ぶことは多くあり、彼らと過ごす時間は私の成長にも繋がりました。少年自然の家での活動は、子どもたちとの絆を深め、自然とのつながりを感じる素晴らしい機会でした。その経験を通じて、共感力や教育的な視点の重要性を学び、人間関係や社会貢献の意義を改めて実感しました。



農学部 Iさん

今回のフィールドラーニングがみでは、最上地域にある真室川町の神室少年自然の家で子供の自然体験活動を支援するというのをしました。この、講義は6月に一回、7月に1回の合計4日間で行われました。どちらも、子どもたちと野外活動やキャンプを一緒にするなど子どもの自然体験活動の支援をしました。1回目の1日目は私たち大学生のみで、テントを実際に立てたり、カレーを釜で薪を使い作ったりして、野外活動やキャンプの際に必要な知識を、身につけました。また、その時に、子供たちと一緒にやる時に注意するところやなるべく子どもたち自身でやるようにするにはどうしたら良いのか考えながらやりました。また、その日には、真室川町の概要についての説明を受けました。そして、2日目は、めんごキャンプという日帰りでの幼児と小学校低学年を対象とした活動を支援しました。2回目は、1回目と変わり、わんぱく探検隊という小学校中学年を対象とした1泊2日の日程で行なった活動を支援しました。

私は、この4日間、大自然の中で子どもたちの行動や野外調理をする時の行動を見て気づいたことがあります。それは、野外活動をしている子どもは「やりたいこと」であふれていて、初めてのことにチャレンジしている姿がたくさん見受けられたということです。どちらの活動も子どもたち同士は、ほとんど初対面なのにも関わらず、野外活動を始めるとすぐに仲良くなり、カレー作りなどでは、お互いにわからないことを教えあったりしてとても協力的に行動していました。この時、私たちは、子どもたちがチャレンジしているところをなるべく止めないようにするため、少し離れたところから見守っていて、危ないことをしていたら注意するという意識を行動しました。また、

子どもたちは時間が空いていたら周辺の生き物を探しに行ったりして、とても好奇心旺盛な姿を見ることができました。

このように、子どもたちが野外活動をする、自然の素晴らしさを感じるとともに、仲間と大自然の中で協力し合い、「やりたいこと」を自ら見つけ自ら何とか解決することで、協調性や自主性が育ち、普段の生活ではなかなか成長させることができない人間的な部分を鍛えることができたと思います。人間的な部分で成長することで、これから生きていくために必要な力が鍛えられます。これは、勉強より大切なことだと思います。

だからこそ、この子どもの自然体験活動はこれからも行っていくべきで、あるいは、もっとたくさんのところで行っていくべきだと思います。全国には、今回のような自然体験活動を行っているところはあるのですが、神室少年自然の家は他と比べキャンプなどの体験が多く、そもそもの体験イベントの数も多いため、真室川町は子どもの教育（生きる力）をするのに最適だと思います。これは、真室川町の強みです。そこで、子どもを真室川町で育てたいと思う人をこの神室少年自然の家の体験活動で増やせば、真室川町の問題である少子高齢化は止めることができると思いました。



山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて（大蔵村）

		1回目	2回目
日 程		【1日目】5月27日（土） 8:42～9:44 山形駅発 ～ 舟形駅着 9:45～10:20 舟形駅発 ～ 肘折着（いでゆ館） 10:25～11:20 オリエンテーション 11:30～12:30 昼食（いでゆ館） 12:45～15:00 村の歴史と文化を伝え残す活動 「歴史・湯治文化・山岳信仰」 15:00～15:20 肘折ホテルチェックイン・荷物整理 15:30～15:45 伝統工芸「肘折のこけし」見学 15:45～17:00 こけし絵付け体験 17:00～17:10 移動（つたや肘折ホテル） 17:10～18:00 休憩・自由時間 18:00～19:00 夕食 19:30～20:30 肘折の湯治文化 20:30～23:00 入浴・レポート記入・自由時間 23:00 消灯	【1日目】6月3日（土） 8:42～9:44 山形駅発 ～ 舟形駅着 9:45～10:10 舟形駅発 ～ まつぼっくり着 10:15～10:25 オリエンテーション 10:30～11:30 笹の葉採り・下処理 11:30～12:45 昼食 12:45～14:00 笹巻作り「食文化の保存活動」 14:00～14:20 移動（中央公民館） 14:30～17:00 大蔵トマト見学・農業体験 「若者グループの産業・地域活性化」 17:00～17:30 移動（赤松生涯学習センター） 17:30～18:00 休憩 18:00～19:00 夕食 19:00～ 入浴・レポート記入・自由時間 23:00 消灯
		【2日目】5月28日（日） 6:30 起床・肘折朝市見学 7:30～8:30 朝食 8:30～8:45 荷物準備・集合 8:45～9:00 移動（四ヶ村地区の棚田） 9:05～9:20 棚田保存活動について 9:30～11:30 田植え体験 11:30～11:50 移動 11:50～12:50 昼食（そば処 寿屋） 12:50～13:30 移動（赤松生涯学習センター） 13:30～14:45 合海田植え踊り体験 「大蔵村伝統芸能について」 14:50～15:50 レポート記入・荷物整理 15:55～16:10 赤松生涯学習センター発 ～ 舟形駅着 16:21～17:23 舟形駅発 ～ 山形駅着	【2日目】6月4日（日） 6:30 起床 7:30～8:30 朝食 8:30～8:50 準備 10:00～10:30 移動（合海地区） 10:30～11:30 合海田植え踊り見学・参加 「大蔵村伝統芸能について」 11:30～12:00 移動（赤松生涯学習センター） 12:00～13:00 昼食 13:00～13:15 移動（清水地区） 13:15～14:45 大蔵村の歴史学習 15:00～15:50 レポート記入・発表・評価 15:55～16:10 赤松生涯学習センター発 ～ 舟形駅着 16:21～17:23 舟形駅発 ～ 山形駅着
	バス降車後の移動手段	公用車（マイクロバス）	公用車（マイクロバス）
	宿泊料金	6,500円	0円
必要経費	2,500円	5,000円	
小 計	【当日現地で支払】9,000円		
合 計	14,000円		
学生が準備するもの	<ul style="list-style-type: none"> ・屋外で活動するための汚れてもいい動きやすい衣服、靴 ※「田植え体験の際は、上下ジャージに裸足（サンダル可）で行います。ハーフパンツも持参してください。」（汚れてもいいように、着替えは多めにお持ち下さい。） ・洗面用具・お風呂セット・着替え・屋外活動用バッグ（リュックサック等）・筆記用具・メモ帳 ・雨具（カッパ・ポンチョ等動きやすい物）・汗拭きタオル・カメラ（班で1台・スマホでも可能） 		
留意事項	○荒天の場合、一部スケジュール変更となる場合があります。		

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Iさん

1.活動報告

私は、今回のフィールドラーニングで大蔵村という人口3000人ほどの山に囲まれた地域に行った。四日間の活動の中で地蔵倉や史跡などの歴史を学ぶとともに、田植え踊りや温泉などの伝統文化、山菜、笹巻きのような食文化を学んだ。

2.考察

実際に大蔵村を訪れたことで、大蔵村の村民の郷土愛の強さが分かった。トマト農家の方も、合海田植え踊りに参加していた方も、大蔵村で話を伺った方々全員が大蔵村を愛し、これからも住み続けたいと笑顔で話していた。一度大蔵村を出たが、大蔵村の良さに気がつき戻ってきたという方もいた。大蔵村のどこが好きなどではなく、全てが好きで、帰ってくる場所は大蔵村だけだと話す方もいた。郷土愛についての実際のアンケート結果などが存在しないため、数値として証明することは難しいが、私は実際に村に行き、村民の大蔵村への愛を強く感じた。

しかし、今回のフィールドラーニングのタイトルに「知られざる大蔵村」とあるように、村の魅力が周りに伝わりきっていないという課題がある。これについて解決策を提案する。それは、商品販売手段の多様化である。まずはオンラインショップである。大蔵村は最寄りの電車站から遠く、豪雪地帯でもあるためやや訪れにくい。そのなかで商品を全国に売り出すためにはインターネットの活用が不可欠である。現在、大蔵村では四ヶ村の棚田米やトマトはインターネットで注文できるようになっている。これらに、肘折こけしや肘折温泉朝市の商品も追加することで他の地域との差別化を図ることができ、より魅力が伝わりやすいと考える。また、生産者や製造者の方が想いを語った動画をショップのホームページに掲載することでより魅力が伝わると考える。

もう1つはキッチンカーの貸し出しである。田植え体験が行われる日やほたる火コンサートの日のようなイベントのある時に大蔵村の食文化を移動型で提供するのはどうだろうか。キッチンカー販売は店舗を開業するよりも低コストで、少ない人数で運営できるという利点がある。また、オンラインショップとは違って対面となるため、村民の方々が直接販売することとなる。対面で販売することで村民の方々の雰囲気や会話から大蔵村の魅力が購入者により伝わると考えられる。

大蔵村のことを愛する村民の方から実際に聞く大蔵村の話がどんな資料よりも魅力的であると私は考えている。今回のフィールドラーニングでも多くの資料を頂

いたが、やはり笑顔で大蔵村の魅力語る村民の方々から聞いたお話が1番大蔵村の魅力が伝わってきた。キッチンカーによって対面で会話をしながら商品を買ったり、オンラインショップにおいても生産者が想いを語った動画を追加したりするなど、大蔵村の村民の郷土愛を全面におしだした地方活性化活動を私は提案する。また訪れたい、もう一度あの村の雰囲気を味わいたい、そう思わせてくれる不思議な力が郷土愛にはあると思っている。



地域教育文化学部 Iさん

1. はじめに

今回のフィールドラーニングを通して、私は人と人とのつながり、温かさを実感することができました。大蔵村の魅力と体験を述べていきたいと思います。

2. 地蔵倉

1日目、まず私たちは地蔵倉に向かいました。一つ一つの場所に名前と由来、歴史がありとても趣深い場所でした。地蔵倉は肘折温泉開湯伝説の地であり、老僧が住んでいたとされています。縁結び、商売繁盛の神として、多くの人が訪れています。子作り地蔵では石の上に木が生えているため、「気」とかけられ生命を生むとされています。また他にも、下のほうが曲がっていることから「孕み松」やこよりを通すと願いが叶うとされている岩肌の小さな穴もあります。

3. 肘折温泉

肘折温泉の由来が興味深かったです。昔肘を折った人が温泉に入ったところ治ったという言い伝えから肘折温泉の名前が付いたそうです。農家のひとの疲れをいやすために昔から主に使われていて歴史を感じました。実際に入ってみると、温泉に入った後も温かさが持続してとても気持ちがよかったです。

4. こけし作り

こけし好きには有名な肘折のこけしで、職人さんの作っているところを見て、感動しました。一つずつの

道具が手作りできていて、こけし作りに対する強い情熱と愛を感じました。実際に私たちもこけしに絵付けをしました。細かい筆で絵をかくのはとても難しく、プロのこけし師になるには10年かかると言っていたことに納得しました。

5、田植え

大蔵村の四ヶ村の棚田は日本の棚田百選にも選定されており、眺めがとてきれいなうえに、毎年様々なイベントを開催している様子でした。中でも、蛍火コンサートではピアノやオカリナの演奏が棚田の風景と蛍火に加わり、とても美しい眺めのです。田植えも実際に行ってみるととても楽しく、地域の方との仲も深まりました。

6、合海田植え踊り

衣装や化粧をして田植え踊りをする姿に迫力がありました。歌の意味にも出稼ぎにでていった人たちがみな帰ってきて豊作を祝うもので昔の人々の思いが感じられました。実際にやってみて、手や足の動きが難しかったし、これを同じ人で何回もするのはとても大変なことだと身に染みて感じました。

7、まとめ

今回のフィールドラーニングを通して、大蔵村の魅力をたくさん知ることができた。人と人のつながりの温かさを知ることができたし、コミュニケーションの大切さを知ることができた。もっと観光地として推している場所だと感じた。大蔵村の歴史と魅力を少しでも多くの人に知ってもらうために、私たちにできることを模索していきたい。



理学部 0さん

1、はじめに

私はフィールドラーニングに応募して、5月27日に初めて大蔵村に行きました。4日間の旅で、外国人として、知らなかった日本、知らなかった山形を初めて見ました。それについて述べていきたいと思っています。

2、地蔵倉

初日の午後に初めて地蔵倉に行きました。地蔵倉は断崖に安置されている仏教遺跡です。ちょうど地蔵倉の祭りの日でした。おじいさんが1人でお寺の中で座ってお酒を飲んでいました。少し寂しさを感じました。案内人により、地蔵倉は肘折温泉の開湯伝説に繋がっていることを知りました。出羽三山の道を探していた源翁が地蔵の化身した老僧に遭遇し、肘折温泉の存在を伝えたという伝説がありました。地蔵倉の周りには雨水に侵食され、無数の穴があります。紙繕いや紐を穴に通して結んだら、縁結びとなって、願いを叶えることができると言われています。とても素敵な景色でした。

3、こけし

大蔵村にすごい職人がいることを知りました。鈴木征一さんが肘折の作業部屋で1人でこけしを作っています。球形の頭部と円柱の胴だけのシンプルな形態をしているおもちゃはこけしと呼ばれています。こけしは東北特有なもので、合計12系統があります。征一さんが作っているのは肘折系と言います。以前は数十人の職人もいたが、現在肘折系を作るのは征一さん1人しかいないです。こけしは簡単に作れるものと見えるが、征一さんはいいものが作れるまでには10年かかると言いました。すごい腕が必要だと伝えました。この後皆が自分のこけしを作ってみました。

4、笹巻き作り

山形での笹巻き、他の県ではちまきと呼ばれます。簡単に言うと浸水後に水切りしたもち米を笹の葉で巻き、結びひもをかけた後、熱湯でゆで上げた食べ物です。中国には似ている粽子(ツォンズ)というものがあります。昔はよく作るものですが、現在はお年寄りしか作らない傾向になりました。おばあさんたちが作り方を教えてくれました。親切な人達で教え方も上手なので、皆がすぐ正確に作れるようになりました。

5、肘折温泉

肘折温泉は肘折にある温泉で、「肘折」という名の由来には、肘を折った老僧がこの地のお湯(上の湯)に浸かったところたちまち傷が癒えたという説があります。それはもう約1200年前のことで、肘折温泉は非常に長い歴史を持つ温泉です。泉質はナトリウム-塩化物・炭酸水素塩泉で、傷やリウマチ、婦人病に効き、皮膚をツルツルすると言われています。肘折温泉街も歴史を持つ温泉旅館や、朝市などがある有名な観光地です。

6、感想

私は大蔵村を訪れて、温かい村の人たちに歓迎されて、素晴らしい村だと思います。大蔵村の美しさを感じました。もう一度行ってみたいと思います。大蔵村の今は観光客がなかなか来なくて、問題となりますが、このいい場所をもっと多くの人に知ってもらいたいと思います。

医学部 Mさん

実際に大蔵村を訪れ文化に肌で触れてみると、本やインターネット上では感じる事ができないたくさんの魅力に気づくことができました。

中でも私が最も惹かれたのは、大自然の中で生活することでもたらされる安らぎや心地よさである。4月から大学の講義やら部活やらで多忙な日々を送っていた私にとって、今回の4日間は自分をリセットする良い機会になったと感じる。豊かな森林を登り進めていくこと、村の方々とお話をすること、広大な土地となった城跡に当時の様子を思い浮かべること、多様な生物の生きる広い棚田に足を浸かること。大蔵村と触れ合ったすべての体験が私の心を静め、穏やかにしてくれたと感じている。普段の生活とは少しかけ離れたのどかな村での生活は、私たちの脳を新鮮にし、クリエイティブに考える力を恵んでくれた。たった数日間ではあったが、この貴重な体験を忘れることはない。

日々タスクに追われ、本当の意味で一息つく暇のない現代人にとって、大自然に触れ合う体験は心に安らぎを与え、気持ちを切り替えて新たなスタートを切るきっかけとなるのではないだろうか。大蔵村での生活で身についたフレッシュな心の在り方は多くの現代人を魅了するに違いない。もっと多くの人にこの感動や安らぎを味わってほしい。大蔵村には美しい文化が眠っているだけでなく、人の心を動かす自然の大きな力が備わっている。自然を求める人にとっても、村にとっても、この力を享受することによって今後の生活がより生き生きとしたものになると思う。大蔵村での体験や感動を、国内外かかわらず多くの人へ発信していくことで、大蔵村の魅力に気づき始める人が増えるのではないか。多忙な現代人に対して、一泊二日の自然体験として宿泊客を呼び込めば多くの利益が見込めるだろうし、大蔵村に惹かれた人々が移住を考えるかもしれない。海外からの観光客もたくさん訪れるかもしれない。ユーチューブのショートやティックトックを使ってこの自然体験を発信していくことが大蔵村の活性化につながると考えた。

一方、大蔵村は人口減少という大きな課題を抱えている。この問題は、農業や文化の後継者不足を引き起こしている。主な原因は、大学進学や就職のために大蔵村を出ていった若者がそのまま戻ってこなくなってしまうことにある。若者が村に戻らない理由には、農業で生計を立てていく具体的なイメージが湧かないこと、村を出たほうが稼ぐことができると考える若者が多いこと等が挙げられる。担い手不足に困っている農家の方のお話は印象的だった。

解決策として、小中高校で大蔵村の文化体験を増やすことが挙げられる。合海田植え踊りで街をめぐる際、小学生低学年以下の小さな子供たちが踊りを見学する

様子は見られたが、中学生、高校生の姿はあまり見られなかった。将来の職業選択を真剣に考え始めるのは中高生の時期であることがほとんどだ。この年代での大蔵文化の触れ合いを増やすことで、将来の選択肢に大蔵村を選ぶ人が増えるのではないかと思う。地元に戻ってくる方々の大きな理由は村への愛である。村の文化を体験し魅力を感じ取ることで、郷土への愛も強くなると考えられる。

医学部 Sさん

1.はじめに

私たちは、5/27,5/28,6/3,6/4 に大蔵村に行ってきました。そこで私は、大蔵村にしかない良さを感じることができました。それについて述べていきたいと思います。

2.地蔵倉

1 日目、私たちは地蔵倉（じぞうぐら）に行きました。地蔵倉とは、凝灰岩の断崖に地蔵菩薩の石像が安置されている仏教遺跡です。岩壁には雨水による浸食によりつながった無数の穴があり、念じながら紙縊りを穴に通すことができました。願いが叶うと言われていました。また、「子造り地蔵」や妊婦のおなかの形をした松の木である「ハラミ松」といったものもあり、縁結びのスポットとなっています。

3.四ヶ村の棚田

豊牧、滝の沢、沼の台、平林の4つの地区を総称して四ヶ村と呼んでいます。四ヶ村には、約120ヘクタールにも及ぶ広大な棚田があり、スケールは東北随一とも言われています。日本の棚田百選にも選定されており、稲が風でなびいている姿はとても趣があります。また、ほたる火コンサートといったイベントも行っており、コロナ前は1000人ほどの観光客が訪れていたそうです。私もいつか行ってみたいなと思いました。

4.肘折温泉

肘折温泉とは、肘折カルデラの東端に位置する温泉です。泉質はナトリウム塩化物・単線水素塩で、食塩や重曹、炭酸ガスによる効用で保湿効果があり、古い角質を乳化してくれることにより、肌がツルツルになります。効用としては、切り傷、リュウマチ、神経痛、骨折、胃腸病などあらゆる病に効くとされています。肘折温泉街では朝5:30から7:30まで朝市というのが開かれています。笹巻きや山菜など大蔵村の名産品を購入することができます。

5.大蔵村の名産品

大蔵村では、山菜や笹巻き、トマトなどが名産となっています。わらびなどの山菜は郷土料理のみそ汁などにも入っているので、肘折温泉街に宿泊した時には1度は必ず食べることでできる品となっています。笹巻きとは、もち米を笹に包んで1時間蒸すことででき

る餅のようなものです。笹には殺菌効果があるため使用されています。さらに、笹の香りがもち米をより一層おいしく感じさせます。砂糖の入ったきなこや黒蜜をかけて食べるととてもおいしいです。おやつにぴったりな料理だと思います。大蔵村で作られるトマトは、大蔵トマトというブランド品です。山間部の比較的冷涼な気候を生かして栽培されたトマトで、水分が多く、甘みと酸味の程よいバランスが特徴となっています。

6.感想

私は大蔵村を訪れてみて、大蔵村は観光にぴったりな場所だと感じました。大蔵村は由緒ある場所や広大な自然を眺めることができる場所などもあり、とても落ち着く場所です。ですが、あまり多くの方には知られていません。もっと多くの方にそんな大蔵村の良さを知ってもらいたいと思いました。



工学部 Tさん

私は今回のフィールドラーニングで大蔵村を訪れました。大蔵村では人口減少と高齢化の進行が問題視されています。この現状を打開するためには交流人口や定住人口を増やすことが必要であり、特に地域に若い人を呼ぶことが重要だと考えました。そこで私は大蔵村を訪れて気が付いた魅力や課題点などを踏まえ、大蔵村の魅力をどのように発信し若い人を呼んでいけばよいのかを考察しました。

まず、大蔵村の魅力の一つは独自の伝統文化が今も脈々と受け継がれており、実際に見たり体験したりできるところです。大蔵村にある肘折温泉は開湯 1200年の歴史ある温泉で、多くの人が湯治に訪れ賑わっていました。今でも温泉目当てに全国から多くの人を訪れます。営業している温泉はどこも 100年以上の歴史があるほか、春から秋にかけては朝市が行われ、地元の農家さんから山菜や笹巻きなどを買うことができます。また四ヶ村の棚田では 800年以上前から米を作っている他、田植え体験もおこなわれています。さらに合海地区では合海田植え踊りという江戸時代に始まった

踊りが今でも踊り続けられていて、実際に見ることもできます。中でも一番印象に残っているのは、実際に作らせていただいた笹巻きです。笹でもち米を包んで煮ることで、笹の殺菌作用で長持ちさせたり中身がこぼれることなく持ち運ぶことができ、さらに紐の結び方を工夫することで田植えの際に汚れた手で食べやすくなるという工夫がなされていて、昔の人の知恵を感じることができました。また、これらの伝統文化が途絶えることなく受け継がれているのは、地域の方々の大蔵村愛の賜物であり、それも大きな大蔵村の魅力であると感じました。

こうした魅力を伝えて若い人実際に来てもらうには、若者や子供、その親世代など様々な人に向けて発信していくことが重要です。しかし、今大蔵村の伝統文化や特産品についての情報は個々のホームページに掲載されていたり、現地で渡された資料にしか載っていないものが多く、知りたくとも情報を得るのが困難な状況です。私はここが大蔵村に人を呼ぶにあたっての大きな課題点だと考えました。この課題を解決するためには、多くの世代が利用している SNS で大蔵村の伝統文化や特産品について詳しく発信すべきだと考えました。そうすることで情報を集約し見つけやすくするとともに、互いの距離が近い SNS を用いることによって大蔵村の雰囲気や地域の人の大蔵村愛がより伝わるのではないかと考えたからです。

今回は実際に大蔵村を訪れることで様々な歴史や風俗、地元の方々の大蔵村に対する誇りなど様々な魅力に触れることができました。地元への愛があるからこそ歴史や伝統を守りつつ、新たな試みも取り入れながら地域をより良い形にしていくことができるのだと感じました。

工学部 Aさん

私はこの大蔵村プログラムを通して、行ってみなければわからないことがあり、そして昔から語り継がれてきた素晴らしいことをこれからどうにか若者が継承していかなければならないと思いました。山形在住でしたが初めての大蔵村。事前に調べたり、親に大蔵村について聞いてみたところ肘折温泉が有名だよと聞いてこの研修に臨みました。いざ行ってみると、温泉だけではなく、職人の技あふれる伝統工芸品こけし、田植え体験をした棚田、地蔵倉、大蔵トマト、おいしい山菜などここに書き記すには余白が足りないほどの魅力がたくさんありました。地蔵倉をのぼって素晴らしい風景を眺め、伝統工芸品づくり体験、田植え体験、あつという間に時間は過ぎ去り、一日大蔵村を歩きつくした疲れた体を肘折温泉で癒す。そしておいしい山菜、おいしいお米で腹を満たす。またこのプログラムで一緒になった人と、とてもおいしい同じ釜の飯でも食べたからか、すぐに仲良くな

ることができました。昔は農作業の農閑期に疲れた体を癒していた湯治場として栄えていた肘折温泉ですが当時の様子を偲ばせるように五感を使って、素晴らしい大蔵村文化を体験することができました。また、現地の人たちもいい人、郷土愛にあふれる人たちばかりで、とても住みよく、素晴らしいところでした。山形に住んでいたのに何で今まで来てなかったのだろうと思うほど、もっと多くの人に知ってもらいたいし、もっと早く来てみたかったと思うほどでした。しかし現状、少子高齢化で住民減少に拍車がかかり、後継者不足に悩まされる日々だそうです。こんなにも素晴らしいところをどうすればみんなに知ってもらえるか、と考えたところ、ただやみくもに集客するのではなく、客層をしぼることが大切なのではないかと思いました。多くの人に来てもらうために、景観を壊してまで呼び込むのは少し違うと思いました。折れた肘を温泉に付けたらたちまち治ったという伝説が残っているほどの温泉の効能と、休息地として有名観光地に引けを取らないと思う大蔵村は都会暮らしや仕事など高ストレスな社会に、またおしゃれ、レトロチックでモダンな雰囲気に女子会など需要はたくさんあると思いました。そういった人たちを呼び込み、ロコミや満足度を大切にしていくことで海外シェアなども自然と上がっていくのではないかと考えました。実際に体験してみることは大切だし、大蔵村にはここに書いたことだけではなくもっとたくさんのいいところ、郷土料理があって、行く人々に十人十色の楽しみ方があります。それを体験できるルートをもっと広めて、たくさんの人に大蔵村を楽しんでほしいと思う、そんな楽しいプログラムでした。

工学部 Tさん

私は2回の活動を通して、大蔵村はもっと多くの人に知られるべきだと考えました。このように考えたのは大蔵村の魅力に気づくことができたからです。

まず私が魅力だと感じたのは、大蔵村の景観です。大蔵村には豊かな自然にも負けない観光名所があり、中でも肘折には江戸時代からつづく歴史ある旅館が建ち並んでおり、歴史ある街並みと肘折の湯を楽しむことができます。また、四ヶ村の棚田では夏に「ほたる火コンサート」が行われ、美しい棚田と演奏を堪能できます。このほかにも地蔵倉では大蔵村の壮大な景色を一望することができます。

つぎに魅力だと感じたのは大蔵村の文化や歴史です。伝統工芸として肘折こけしがあり、私が見学をした際こけし職人の鈴木さんがこけしやコマをあっという間に削り出していてとても感動しました。また、合海田植え踊りは約400年の歴史がある伝統的な踊りで、毎年6月の第1日曜日に合海集落全戸で披露されます。踊りの練習をする場は村の若者と大人が交流する場に

もなっているのです。私が練習に参加したときはとても賑やかで練習していてとても楽しかったです。私はこの踊りの中で大黒舞が好きになりました。なぜなら、見ていてとても癒されるし、踊っている姿がとても大黒様に似ているからです。

最後に魅力だと感じたのは大蔵村の人の良さです。今回の活動に関わった大蔵村の方が温かく迎えてくださったおかげでとても充実した活動になったといっても過言ではありません。印象的だったのは田植え体験のとき自分も含め参加していた人全員が楽しく田植えをしていたことです。うまく田植えができると褒めてくれたり、大蔵村のことや田植えのことなど色々話をしたりしてくれたのでとてもうれしかったです。たくさんの魅力が大蔵村にありますが課題もあります。中でも若者の減少が課題だと考えています。そこで、私は観光客を増やすことでこの問題を解決していきたいと考えています。具体的には8月にある「ほたる火コンサート」の宣伝をしていきたいと考えています。大蔵村にはたくさんの魅力があるのでとにかく大蔵村に来るきっかけを作ることが良いと考えます。また、ほたる火コンサートは8月にあり今からでもできることであり、コロナも落ち着いてきて観光課客も来やすくなっているのでもっといいと考えました。宣伝の内容としては、コンサートの概要だけでなく肘折温泉や地蔵倉などの大蔵村の観光スポットも紹介したいと考えています。



農学部 Tさん

僕が実際にフィールドラウンジで大蔵村を訪れ、大蔵村の魅力ある場所を見学、体験させていただく中で大蔵村は人間の五感(視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚)すべてで楽しめる場所だと感じました。

地蔵倉では、険しい山道を登りながら、小造り地蔵、孕みマツといったものをみつつ、高いところまで登ると山の下に広がる肘折カルデラの絶景を見ることができた。10000年前に浸食されていたことで岩が特殊

な形をしており、その特徴を生かした『こより結び』という行いがあり縁起が良いと感じた、そしてところどころに全国1, 2位を争うほどの豪雪地域である大蔵村ならではの景観もあった。(雪の重さによって木が湾曲していたり、安全のために設置している鉄でできたフェンスが折れ曲がっていた。)

笹巻きづくりの体験や温泉街の散策、棚田の田植え体験、合梅田植え祭りなどでは大蔵村に住む地域の方々とのつながりの深さを見ることができた。

笹巻きは笹の葉に抗菌性があるらしく保存食の包装として使い、畑仕事の合間に食べていたらしく、山形に住む昔の人たちがどのように笹巻きを食べていたかという情景が浮かび、文化が途切れず今まで継承されていることに感動した。

合梅田植え祭りの見学ではコロナ禍になる前は、朝から晩まで一軒ずつ回っていたらしく、踊りを体験したことで難しさを知っていたので、地元の方々の伝統芸能への愛を感じることができた。

今回フィールドラーニングをする上で、事前学習の際に大蔵村について調べましたが、実際に大蔵村を訪れて見学させていただいた建物や体験、食べさせていただいた山形の郷土料理や山菜といったもの全てが調べただけでは分からない魅力的なものであり、大蔵村に住む方々に案内をしていただいたりする中で、次々と大蔵村について知りたいと思うことが増え、質問をすることでプログラムのテーマでもある『知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて』探究活動をするすることができた。そして大学で行う最後のプレゼンテーション発表とは別に、大蔵村で自分たちが村民になったつもりでポスターを制作し発表する機会(班どうしで見せ合う)があったので、班のメンバーと大蔵村の魅力について話しながら、意見を交わすことで、自分だけでは気づけなかったさらなる魅力の発見につなげることができ、とてもいい活動だった。

考察

実際に訪れたことで大蔵村にはたくさんの魅力があることがわかりましたが、事前学習でインターネットで調べた際に、大蔵村に関する情報があまり多いとは言えなかったため、実際に行きたいと思わせる方法がないかを考えたい。最後の発表に向け班員と話し合い、学びを深めたい。



農学部 Tさん

① フィールドラーニングでの感想

私にとって、人生初のフィールドラーニングでした。食事も、文化も、自然も、私の出身地域とは異なる、初めての体験ばかりでした。各市町村、あるいは地域にそれぞれの特徴があり、魅力があるのだと、身をもって感じました。

② 大蔵村の課題と考えられる解決策

人口減少は大蔵村にとっても、他の地域にとっても同様の課題だと思います。それを踏まえた、私の考える大蔵村の課題は、交流人口の減少です。

大蔵村の肘折温泉は、かつて温泉湯治場として栄えました。湯治とは「農家が農閑期に温泉地に長期間宿泊し、農作業で疲れた体を癒す」(注1)というものです。大蔵村は、湯治目的に訪れる交流人口によって形成されてきた特殊な場所であると言えるでしょう。

しかし近年は、専業農家の減少や生活様式の変化で湯治文化そのものが衰退してしまいました。現代において湯治文化を再興させるというのは困難ですが、温泉を活かした新しい形での長期滞在を提案することができれば、一定の交流人口を確保できると考えました。

具体的には、自然や文化を学ぶ小中学生向けの林間学校や、農業に興味のある高校生を対象とした長期農業体験、就農を考える若者を対象とした宿泊型農業研修などです。このフィールドラーニングもがみのような、大学の集中講義あるいは研究の場を提供する機会を増やすのもよいと思います。

私自身、当プログラムを通じて多くの学びを得ることができました。この体験から、学びの提供の場としての交流を増やすことが、大蔵村のよさを活かせる、交流人口の増やし方ではないかと考えました。

③ 活動を通して学んだこと

今回のフィールドラーニングで得られた、私にとって最も大きな学びは「事前調査を徹底したつもりでも、行ってみて気づいたことのほうがはるかに多かった」

ことです。

例えば以前、米の価格によって多くの米農家の方々が苦勞されていることを、大学の講義で学びました。私はその解決案として、田んぼを畑に転作すればよいのでは、と考えていました。実際に大蔵村で、転作田の取り組みが行われていることも調査済みでした。

しかし、実際の農家の方にお話を伺ってみると、転作田にも多くの課題があることが分かりました。水はけが悪いこと、農業機械を一から買いそろえる必要があること、そのためコスト面での援助が十分でないこと、などです。

ある程度農業に触れている方ならば、安易に考え付くことかもしれませんが、私はそれまで気づくことができませんでした。

私は日々、農業についての講義を受けていますが、その学びが何になるのか、誰の役に立つのか、意識したことがありませんでした。このフィールドラーニングでの体験が、今後の私自身の学ぶ姿勢を大きく変えてくれたと思います。

山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：里山の自然を調べよう（鮭川村）

		1 回目	2 回目
日 程		【1日目】 5月20日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 10:45 米地区公民館着 開講式 鮭川村自然保護委員会についての説明 12:00 昼食 13:30 里山自然観察（米地区の杉・雑木林） まとめの時間 17:00 宿泊場所到着（入浴 ぽんぽ館）	【1日目】 6月17日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 10:45 米地区公民館着 里山自然観察（米地区） 12:00 昼食 13:30 湿原保全体験 まとめの時間 17:00 宿泊場所到着（入浴 ぽんぽ館）
		【2日目】 5月21日（日） 8:00 宿泊場所出発 里山自然観察（かご山の巨木群・樺林） 12:30 昼食 14:00 曲川の大杉見学 15:00 鮭川村中央公民館着 まとめの時間 15:30 鮭川村中央公民館出発 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着	【2日目】 6月18日（日） 8:00 宿泊場所出発 8:30 米湿原駐車場到着 湿原保全体験 12:00 昼食 13:00 米湿原まつり参加 感想発表 16:45 米地区出発 17:22 新庄駅発 18:35 山形駅着
	バス降車後の 移動手段	公用車 2台	公用車 2台
	宿泊料金	7,000円	7,000円
必要経費	昼食代（弁当）700円×1日、2日目の昼食は店で食べたいものによる（～1,000円程度 各自支払い）※飲み物等は各自で購入	昼食代（弁当）700円×2日 ※飲み物等は各自で購入	
小 計	8,700円	8,400円	
交通費	山形駅⇄新庄駅（往復） 2,340円	山形駅⇄新庄駅（往復） 2,340円	
合 計	21,780円		
学生が準備するもの	動きやすく汚れてもいい服（ジャージ等）、汚れてもいい長靴（レインシューズ等の丈の短いものは×）、上下分かれているレインウェア（100均で売ってるものでもOK）、帽子、タオル、着替え、洗面用具、飲み物等を買うお金	動きやすく汚れてもいい服（ジャージ等）、汚れてもいい長靴（スパイク付き、レインシューズ等の丈の短いものは×）、上下分かれているレインウェア（100均で売ってるものでもOK）、帽子、タオル、着替え、洗面用具、飲み物等を買うお金	
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 荒天の場合、活動内容に変更が生じることがあります。 ・ 食物アレルギー等がある場合はお知らせください。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 荒天の場合、活動内容に変更が生じることがあります。 ・ 食物アレルギー等がある場合はお知らせください。 	

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Yさん

鮭川村のフィールドワークに参加して特に記憶に残っていることは2つあります。1つ目はヨシ刈りです。米湿原の貴重な動植物の保護などのために定期的に行われている活動ですが、今回の活動で自然保護活動に実際に参加することができ、自分も鮭川村の自然や地域のために貢献できていると実感できたと、とても楽しくやりがいのある活動ができました。

2つ目はヨシ刈り後に行った米湿原まつりです。湿原の保護活動を終えた後に行ったまつりでは、地域のひとと食べ、話す機会がありました。地方出身である私はあのようなフレンドリーな環境が一人暮らししてからなくなっていたのでとても懐かしく、いい思い出になりました。

今回の参加者は企業の方々、関係者、ボランティアの方々、我々という中で作業を行いました。地域として活動する事業としてせっかく希少で面白い活動なので他の学生などを巻き込んだ活動として行うことができたなら良いなと思った。そのためにも周囲の人たちに鮭川村の魅力を伝えていくだけでなく、人の集まる企画の作成やそれを発信する方法など、まずは鮭川村の知名度を向上させる具体的な方法を模索していきたい。



理学部 Kさん

私は普段は宮城県に住んでいるので、フィールドワークに行くまでは鮭川村はおろか、山形のことを何も知りませんでした。1回目のフィールドワークでは鮭川村には貴重な絶滅危惧種が生息していることや自然保護委員会の活動について教えていただき、保全活動の必要性について学びました。そして実際に里山の自然を観察しました。そこら中に絶滅植物が存在し、この環境を守らなければいけないと感じました。

後に調べてみると、山形県内で生物多様性上重要な里山里山の選定地は鮭川村を含め22か所あり、山形には希少種が生息する場所が多数存在することが分かりました。

2回目は里山の保全体験をしました。湿原の貴重な植物を守るためにその周りに生えているヨシを刈るという作業です。しかし、希少な植物とヨシは似ているため、気を付けて刈らないといけません。炎天下の中での作業は疲労が溜まりましたが、段々湿原がきれいになっていくのが目で分かるのでやる気が出てきました。2日目はグループのメンバーだけでなく、企業の方も多く参加しており、約2時間の作業で多くのヨシを取り除き、1日目とは見違えるほどきれいにできました。しかし、普段は毎日矢口さんが一人で一時間ほどこの作業をしていると聞きました。また、作業に参加している若者が少なかったことも気になりました。鮭川村には高校がなく、小学校と中学校がありますが、全体で160人程度と人数がとても少ないそうです。私は村の人だけで里山の自然を守っていくには人手が足りないと感じました。

私がこの活動を通して、鮭川村の自然を守るためにはもっと多くの人に鮭川村について知ってもらい、保全の必要性を学ぶことがあると感じました。鮭川村に行ったことを山形出身の友人に話したところ「どこ？」と聞かれ驚いたことを覚えています。鮭川村には多くの絶滅植物が存在する貴重な場所であること、そのような場所は守られるべきであるという情報を発信していくべきであると思います。また、全国の方に鮭川村を知ってもらうきっかけとして夏休みなどの長期休暇に鮭川村の自然観察や保全活動を体験する宿泊プログラムを計画すればいいのではないかと考えました。地域の活性化にもつながり鮭川村の魅力を感じてもらえると思います。

私はこのフィールドワークで鮭川村の魅力をたくさん感じる事ができました。多くの人に鮭川村について知ってもらうためにはどうすれば良いかこれからも考えていきたいと思っています。そして、機会があればまた鮭川村を訪れたいと思います。

理学部 Mさん

私はフィールドワーク共生の森もがみに参加して、地域社会が抱える問題や環境保護に関する問題について実際に自分が地域社会の一員として活動するという形で考えを深めることができた。今まで事実として学んできた地域社会のあり方や問題の解決について、実際に体験してみないと気がつかないことが多々あり、より幅広い視点から考える機会になった。

私たちの班は大きく分けて2つの観点から活動を行った。まず山形県鮭川村が有する貴重な自然環境や生

物について理解を深めることによって、絶滅の危機に瀕する数々の生物がいたる所に存在するという重要な自然環境が今でも存在し、最後の頼みの綱として保護していくことの大切さを改めて学んだ。次に、活動しながら地域社会の在り方について焦点を当ながら地元の方々と関わった。

山形県に限らず、日本、世界中にはまだまだ膨大な生物を有する貴重な自然環境が存在するが、この多くは人間の活動を中心とする様々な原因により破壊されつつある。その中でも山形県最上地域は里山を中心とする村を形成しており、そこに住む人々は里山による恩恵を受けている。このような生態系サービスを最大限に享受するためには人間による適当な里山の管理が必要である。しかし、少子高齢化や過疎化が継続的に進んでいることにより適切な管理を維持することが難しくなってきた。この問題は山形県に限らず多くの地域社会が抱える問題であるため、具体的な改善策が必要である。山形県鮭川村では昭和30年から日本の高度経済成長に伴って東京への人口流出が始まり、平成27年までの60年間で人口は51%減少した。今後も人口減少と少子高齢化の傾向は続くと考えられる。このような過疎化が進んでいる地域へ私たちのような村外部の学生が実際に地域の活動に参加することで、その地域が抱える問題について考える機会をつくることには大きな意味があると思う。私たちは環境保護、生物多様性の維持の観点から米原原の「ヨシ」と呼ばれる植物を刈り、背丈の小さい植物にも日光が当たるようにすることで植物種の減少を防ぐという活動をした。この活動をして考えたことは、植物に関する環境保護活動は目に見える形の成果が非常にわかりやすいということだ。職員の方にお話を伺ったがすぐにたくさんの種類の植物がみられるようになる。環境問題の改善に向けて行動する人が少なく、環境が改善していかない理由の1つとしてその成果が分かりにくいことがあるのではないと思う。鮭川村で行われている「ヨシ刈り」を通して環境保護に向けて何か行動を起こすことが重要であるということ、実際に成果を見て感じることは意味のあることなのではないかと考えた。

2つ目の観点、地域の在り方についてはヨシ刈りの活動を通じて地元の方々に関わった。地域の方と一緒に活動させていただいただけではなく活動後に毎回行われている「オカリナコンサート」、「米原原祭り」に参加した。地元の方々は地元を温かい故郷として心から愛しているということ強く感じた。ボランティアにも多くの方が参加し、地元を守るためにできることはないか考え、地元の方と交流するのを楽しみながら活動している方が多いという印象を受けた。過疎化や少子高齢化、環境保護など地域社会が抱える問題は多岐にわたるが、実際に地元の方と活動する中で

最も感じたことは地域の温かさだ。問題を解決するために行動することは重要だが、それよりも地元の方々が地元を心から愛し、温かい環境の中で交流が行われること、地元の方がそれを楽しみにしていることが何よりも大切なことなのではないかと感じた。地元を守りたいという強い志のもと様々な活動が行われ、それはボランティアから始まりさらに私たちのような外部の学生などを巻き込んだ活動に拡大していき、地元の方だけではなく県民そしてその地域を重要だと思う人々が行動していくことで改善される問題はたくさんあると感じた。今後も引き続きボランティアに参加することなどを通して私たちができることを模索していきたいと思った。



工学部 Sさん

活動内容

第1回フィールドワークでは鮭川村で管理している里山や管理されなくなった里山に登り、鮭川村では数多く生息している植物や虫などを観察し、人の手が加わっている里山と放置されている里山との違いを実際に触ったり地面を掘ったりして比較した。

また、昔から残されている大きな杉やその杉にまつわる昔の考えや神話、伝説など、昔の人が自然をどうとらえて接していたのか、お話を聞くことができた。特に記憶に残っているのは実際に放置されている里山と管理されている里山の比較を一目で行うことができたことで(Fig.1)、人の手が加わることでこんなにも差ができることを実感した。管理されている里山のほうが貴重な植物が生育しやすいように地面に日光が当たり、数も多かった。しかし管理されていない場所の地面は背丈の高い草や小さな木が日光を遮り、貴重な植物が育ちにくい環境になっていた。

また歩いているときに見かける蝶やトンボが全国では絶滅の危機にある種が多いと聞いたが、鮭川村では生息数が多く、よく見かけることができたため絶滅の危機にあるようには感じなかった。鮭川村の住民たちが環境を守ろうと活動してきたことで数が少ない蝶や

トンボが鮭川村内では当たり前に見かけることができるのだと思った。

第2回フィールドワークでは実際に保全活動として米湿地のヨシを刈る手伝いを行った。ヨシの周りには高確率で貴重な種が生えており、ただ無心で刈ってしまうと残したい植物も刈ってしまうのでしっかり確認しながら刈る必要があり、大変だった。しかし数十人で行ったのもあり、刈る前と刈った後では明らかな違い(Fig.2)があり達成感があつた。

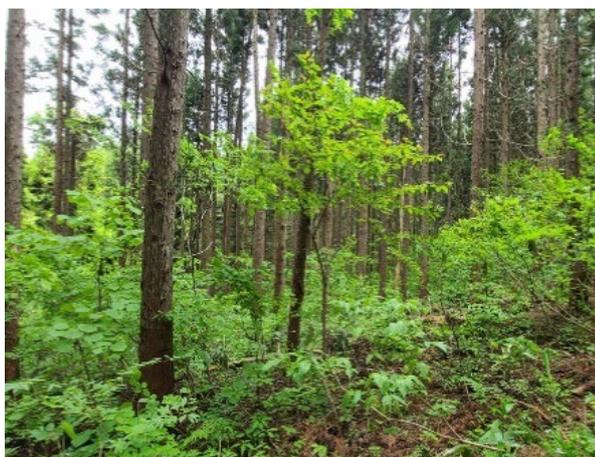


Fig.1 管理されていない里山(上)と管理されている里山(下)の比較



Fig.2 刈る前(上)と刈った後(下)の比較

感想

今回の活動を行う前、私はそんなに大変な労働をして残そうとする自然にそんなに価値があるのか疑問に思っていた。しかしこの活動を通して、自然を残すことは大変だが残す価値はあると感じた。まず外を歩いていると当たり前のように希少な虫や植物が生えていることに普段住んでいる山形市とはかなり違う雰囲気があった。さらに自然を守ろうとすることで鮭川村全体でまとまることができているのではと感じた。自然を守るという大きな目標に向かい村全体で協力しているのがフィールドワーク4日間だけでも感じる事ができた。もしこの保全活動がなければ、ここまでみんなで協力し、まとまることはないと思う。

農学部 Eさん

今回最上地方でのフィールドワークを通じて様々なことを学びました。鮭川村は山や川に囲まれている自然豊かな場所で、とても美しい場所でした。現地の方々が自然を大切に、自然と調和した暮らしをしていることが印象的でした。

一回目のフィールドワークでは現地の方々と一緒に里山の散策を行いました。里山を散策しながら、ギフチョウの幼虫が食べるウスバサイシンやヒメカンアオイなどの貴重な植物を観察できました。鮭川村の貴重な動植物や生態系のつながりや大切さについて知識を深めることができました。また、かご山の太桂に行くまでの道中、道なき道を切り開いて進んでいったのでとてもスリリングでした。里山の散策はかなりの急斜面をあがったり、長距離を歩いたりしたのでとても疲れました。また皆さんとのコミュニケーションでは訛りなどの言語のギャップが強く感じられてとても新鮮なものでした。

二回目のフィールドワークでは現地の方々と一緒に米湿地の保全活動をしました。私は元々自然保護に興味があったので保全活動が楽しめました。保全活動は葦というイネ科の植物を刈り取る作業で、腰をかがめて作業するので次の日から腰が痛くなりました。葦が多くなりすぎると夏の間地面近くに光が行き届かず貴重な植物が生育しづらくなってしまうので、足を夏のうちに刈り取りました。一日目は学生と補助の方で作業を行ったのですが、二日目にはたくさんの地元の方や企業の方がいらっしゃって、大勢での作業になりました。大勢での作業はとても楽しいものでした。作業の後の食事会ではオカリナを聞いたり地元の食事や言葉に触れたりすることができました。

この二回のフィールドワークを通して、自然や地元の方々との関係を再認識し、感謝の気持ちと共に自然の尊さや人の温かさを学ぶことができました。それらを通じて自然や地域社会により深くかかわり、守り、受け継ぐには、地域の方々そして私たちの協力が不可欠であり、理解と尊重が求められます。今後も地域に根付いた学びや体験を積極的に体験し、長期的な視点での社会貢献をしていきたいと思いをします。



山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：里山保全とSDGsを学ぶ（戸沢村）

		1 回目	2 回目
日 程		【1日目】 5月13日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 戸沢村のマイクロバスで移動 10:25 改善センター到着 オリエンテーション（SDGゲームの 説明含む） 10:50 蕎麦打ち体験 12:20 昼食休憩 13:20 山菜採り 15:20 山菜の下ごしらえ 16:20 振り返り 17:00 農家民宿へ移動	【1日目】 6月10日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 戸沢村のマイクロバスで移動 10:40 改善センター到着 準備 11:00 改善センター出発 11:15 杉の台入口到着 12:30 昼食休憩（トイレ前駐車場） 13:00 浄の滝へ出発 13:30 浄の滝到着 13:45 浄の滝出発 15:15 杉の台入口到着 15:30 改善センター到着 17:00 農家民宿へ移動
		【2日目】 5月14日（日） 9:00 改善センター集合 山菜料理づくり 12:00 昼食 13:00 杉林の除伐・間伐 15:00 振り返り 15:30 新庄駅へマイクロバスで移動 16:14 新庄駅発山形行きに乗車	【2日目】 6月11日（日） 9:00 改善センター集合 オリエンテーション 9:20 木エクラフト体験 11:30 昼食休憩 12:30 SDGsゲーム 14:30 振り返り 15:15 改善センター出発 16:00 新庄駅到着 16:14 新庄駅発山形行きに乗車
	バス降車後の 移動手段	当団体所有の車で移動	当団体所有の車で移動
	宿泊料金	5,000円	5,000円
必要経費	5,000円（昼食代含む）	5,000円	
小 計	10,000円	10,000円	
交通費	山形駅⇄新庄駅（往復） 2,340円	山形駅⇄新庄駅（往復） 2,340円	
合 計		24,680円	
学生が準備 するもの	エプロン、三角巾、タオル、簡易雨合羽、虫よけ	簡易雨合羽、水筒、タオル、虫よけ	
留意事項	服装は長そで・長ズボンでお願いします。食物・動物アレルギーのある方は大学事務局に申し出てください。	服装は長そで・長ズボンでお願いします。食物・動物アレルギーのある方は大学事務局に申し出てください。	

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

地域教育文化学部 Yさん

第一回目の活動は、戸沢村に触れることのできた活動だった。

そば打ち体験は、失敗してしまったものの、とても楽しい体験だった。そば打ちを教えてくださいました先生が、勉強とは違ってやり続けなければ上手に作る事ができないとおっしゃっていたことが、体験を通じてひしひしと伝わった。実際に自分で打ってみると、頭の中の理解だけでは追いつかない感覚に頼っている部分がとても多く、難しかった。

山菜採りは、量を集めるのも根気のいる作業だったが、収集するのがとても楽しく、夢中になって取り組んだ。地元の方が、数ある山菜のひとつひとつを覚え、日々の職に生かしていることにとっても感心した。また、下ごしらえと料理に関しても、地域の方の経験から及んでいる知識量に驚いた。山の恵みを最大限活用した生活に直に触れることのできた体験だった。

木の除伐・間伐は、ただ無作為に伐採しているのではなく、他の木への影響なども考えて行っていることを自分の目で見て知ることができ、貴重な体験だった。

第二回目の活動は、戸沢村の良さをさらに知るとともに、第一回目の活動も踏まえながら、地域活性化の方法について考えることができた。

浄の滝は、険しいトレッキングコースを歩ききった達成感と、滝の美しさが爽快だった。今回歩いたコースは初心者用であったが、とても険しく感じたため、数あるトレッキングコースを目当てに全国から登山好きの方々が集まるような方法があればよいと思った。全国的に浄の滝やトレッキングコースが知られるようになることで、戸沢村のさらなる活性化につながれるのではないかと考える。その方法として、SNSを利用した発信が挙げられると考える。

木工クラフトは、自然のものだけでフクロウを作れることが面白かった。作る人によって、使う枝によって、個性がとても出るものなので、特別感を与えられる体験だと感じた。防腐加工などをしてキッドにして売り出したり、体験教室を開くことで、観光客は世界に一つだけの特別なお土産を持ち帰ることができるのではないかと考える。また、子供の想像力を掻き立てるのにとっても良いと思ったので、ひとつひとつのパーツを大きくし、子供用のおもちゃを制作することも有効だと考える。

SDGs ゲームは、農家の方の生活や農作物の知識などをゲームから知ることができ、面白かった。スマートフォンのアプリケーション化することで、戸沢や最

上地方の生活がもっと知られ、興味を持ってもらえるきっかけになるのではないかと。

木工クラフトの子供用のおもちゃは、SDGsの面からもとても有効であると考えます。まずは、間伐材を使用することによって資源の無駄遣いを減らすことができる。加えて、おもちゃの年間廃棄量は約6000トンであると言われている。市販のおもちゃは、プラスチック製品が多いので、6000トンものおもちゃを廃棄する場合、多くのエネルギーを必要とする。その反面、私たちが体験した木工クラフトをおもちゃ化することで、環境にも考慮したおもちゃを作ることができ、戸沢村をもっと知らせるきっかけになるのではないかと。

私は、全4日間の日程から得た多くの学びを通して、私たちの体験した木工クラフトのおもちゃ化を推進したい。

とても学びと実りある活動で、日々興味深く楽しかった。また戸沢村を訪れたいと心から思う。



地域教育文化学部 Hさん

先日、5月13日から14日、6月10日から11日の計4日間にわたって計画されていたフィールドラニング「里山とSDGs」に参加した。

戸沢村は山形大学から50kmほど離れた、最上郡にある自然に恵まれた村である。私たちは山形駅から電車で1時間ほどかけて新庄駅まで行き、戸沢村教育委員会の方が運転してくださったマイクロバスで戸沢村まで行った。

13日は初めにそば打ち体験をした。そば打ち体験は私がこのプログラムを選んだ大きな理由の一つであり、大変楽しみにしていた。そばの生地作りは、粉に水を混ぜ、練って伸ばすという一見単純な作業の繰り返しだが、実際にやってみると思い通りにはいかず、伸ばす作業の時切れたりひびがはいったりするというハプニングが起きた。指導者の方と同じ配分で生地を作っていたはずだったが、出来上がったものを見ると同じ

とは言えなかったので、歴史の長い技術を受けて訓練を積み重ねた職人の凄さを改めて感じ、お店で買った頼んだりするときにはこの日のことを思い出し、作り手に感謝して食べたいと思う。また、もしまたそば打ちができる機会があれば是非挑戦したい。

そばを食べたのち、次の日の山菜料理作りのために山に山菜を採りに行った。山菜には思っていたより種類があり、驚いた。山菜を採る際、全部採らずに少し残しておくことで次の年以降も採れるようにしているという話が印象的で、村の人と自然のつながりの強さを感じることができた貴重な体験となった。山菜以外にもたくさんの知らない植物があり、事前にもっと森について調べていれば、より深く学べたのではないかと思った。

参加者全員で反省会をしたのち、私は農家民宿である阿部さんの家に宿泊した。ここでは、戸沢村で採れたキノコや野菜、山菜などを作った料理が振舞われ、戸沢村の食文化に触れることができた。阿部さんに村の話聞いたことで、少子高齢化や農業や林業の後継者不足などの課題を村の方々自身も感じているということが分かった。過去に田植えの時期などの特に人手が不足している時期に大学生が農作業の手伝いをしてきたことがあったということなので、また戸沢村に行き手伝いをさせていただきたい。

1回目の2日目は、山菜料理作りと杉林の除伐・間伐を行った。山菜料理作りでは、山菜の種類によって味も調理方法も様々だということを知り、山菜の奥深さを感じたとともに、もっと山菜について知りたくなった。私はゼンマイやわらびは今までも食べたことがあったが、その他の山菜はなかったので、今回食べることができてよかった。これを機に実家に帰った際家族や曾祖父にも紹介し、戸沢村と山菜のよさを知らせたい。

杉林の除伐・間伐では、森に行き、健康な木の邪魔になるなどの理由で切ったほうが良いと思われる木に印を付けたり、健康な木の邪魔をしている蔓などをのこぎりで切ったりした。また、引率の方の話聞き、森は状態を保つのにお金も時間もかかり、大変だということ、不要な木を切ってもそれらを撤去する作業が大変だということを知った。林業は年々担い手が減っていて、若者の需要があるということだが、やはり若い世代の林業への関心は薄いだろう。

そこで、若者に実際に村に足を運んでもらうことで村の良さや林業の重要性を感じてもらう必要があると考えた。戸沢村には美しい自然や美味しい山菜があり、町で暮らす人にとっては新鮮な場所だと思う。フィールドワークで私が戸沢村に興味を持ったように、地域のイベントを企画したり、参加してもらったりすることで、戸沢村の良さを村の外の人にも知ってもらえる

と考えた。

2回目の活動の1日目は、杉野台入り口から浄の滝に行き、1日で10km以上の距離を歩くトレッキングに参加した。普段あまり運動をしない私は少し長く感じたが、辿り着いた滝は写真で見たものより美しく、来たかきがあった。第1回の活動でやったように、印が付いている木が何本もあり、徒歩でしか行けない山奥でも人の手による管理がしっかりとされていることが分かった。

今回参加したトレッキングを観光業として人を呼び込むとすると、私はもう少し距離や完走までにかかる時間を短縮するために、コースを簡略化した方が良いと考えたが、お金がかかる上森を破壊することになるので、厳しいのではないかと考えていた。しかし、活動終了後に村でもらったパンフレットを見てみると、今回歩いたコース以外にもたくさんコースが存在することが分かったので、コースを無理に変えることはせずにトレッキングの催し自体を発信する方向で考えたい。

本来であれば2回目の2日目は木工クラフトとSDGsゲームの活動をする予定だったが、トレッキングの活動と日ごろの運動量との差による疲労のためか、体調不良で1日目の夜に帰ることになってしまった。貴重な1日を無駄にしてしまったことが大変悔やまれるので、今後は私生活に運動の習慣を取り入れ、丈夫な体作りにも励んでいきたい。

2回の活動を通して、戸沢村の自然との関わりの深さを学ぶことができた。たくさんの方々や田んぼが広がっており、今の暮らしからは考えられないほどのどかだった。コンビニエンスストアやスーパーマーケットなど、普段私たちがよく利用している店が全く見られなかったことも印象強かったが、その分自給自足をし、自然と繋がりを持って暮らしていることが素敵だと思った。

戸沢村の課題は農業や林業など、産業の後継者不足であると考えた。私は、戸沢村は一度行くとまた行きたくなる場所だと感じたので、観光地や名物を発信して戸沢村に一度足を運んでもらい、今村で暮らしている方々が繋いできた思いを来た人たちに伝えることで、いい場所だと思ってもらうことが大事なのではないかと思った。

理学部 Kさん

まず初めに、私たちの体験活動を振り返る。一回目のフィールドワーキングでは蕎麦打ち、山菜採り、山菜料理作り、林業体験を行った。これらの活動は、実際に戸沢村の生活と結びついた体験活動で新鮮味を感じるとともに、自然環境と生活が密接に結びついていることからの大変さを感じた。また、活動を通して得

た学びとして林業の現状と課題、間伐の重要性、里山保全の持つ意味などが挙げられる。

次に二回目のフィールドラーニングでは、トレッキング、木工クラフト、SDGs ゲームなどの活動、また、担当の方からやまがた森のミクスという構想について説明を受けた。これらの活動を通して戸沢村の自然の豊かさを再確認すると共に、観光資源としての可能性を感じた。また、SDGs ゲームに関しては楽しく最上地域の特産品や農業の様子、生活風景を知ることができ、非常に完成度が高いと感じたので是非参考にした。

ここで、体験活動とは別に農家の方々に伺ったことについて振り返る。まず、戸沢村では小学校が何校か廃坑しており、現在は幼稚園、小学校、中学校が一貫化している。このことから戸沢村の少子化が著しいことがわかる。次に、昨今農業をするうえで重要な肥料の価格が高騰しているようで、それに加えて農業用機械の値段が高いこともあり、農家の負担が大きくなっていることがわかった。最後に、戸沢村で行っているトレッキングツアーが最近雪崩や土砂崩れによりコースを変更せざるを得なくなったようだ。実際にそのコースを歩いた感想としては危険な道が所々にあり、安全性の確保ができていないのか不安になることもあった。

以上の体験活動の振り返りを踏まえて、私は戸沢村の課題として大きく二つを取り上げる。

第一に、里山保全の課題である。特に山の管理においてとても重要な役割を持つ、間伐という工程が近年人材不足や間伐材の運搬が困難であることから、十分に行えていないことが大きい課題だと考える。間伐の重要性として、土砂災害の防止や木の成長促進、生態系の維持などがあり、間伐によって山林の持続可能な利用を期待できる。また、間伐材の利用方法としても付近の木質バイオマス発電所などに需要があることがわかった。しかし、林業をしていく後継者が不足していることや、間伐材を山奥から運び出すのは困難だと農家の方が言われていたので、人材と運搬方法を解決する必要がある。

第二に、人口減少の課題である。上記にあったように、戸沢村は今現在少子化が進んでおり、若者の数も少ない。私は若者の数さえ増えれば農業、林業ともに後継者を育てることができ、里山保全の課題の解決にもつながると思う。よってこの課題を解決することが近道だと考える。

これらの課題を改解決するためには、まずより多くの人にもがみ地域について認知してもらうことが不可欠であると私は結論づけた。そのために何ができるかについては、実現が難しいものを含め次のようなものを提案したい。山菜やもがみの伝承野菜を生かした料理のPR、都会に住んでいる人に戸沢村での生活を実際

に体験してもらい、豊かな自然を観光資源として生かしたアスレチックパーク、間伐材など山のものでのDIY体験活動、戸沢村での日常をSNSで発信などだ。特に現在SNSの影響力が大きいコンテンツの一つとして田舎の暮らしを発信しバズることで多くの人に興味を持ってもらえるのではないだろうか。

医学部 0さん

私は今回の戸沢村でのフィールドラーニングを通して、戸沢村の課題は後継者不足だと考えました。なぜなら、フィールドラーニングでの様々な体験をしてみても、山菜採りや杉林の間伐など戸沢村が自然と共生して生活していくために必要なことはとても体力がいることだと感じ、高齢化が進む戸沢村では今のような生活をこの先も長く継続していくのは困難なことなのではないかと思ったからです。また地元の方々の生活だけではなく、里山の保全という面からみてもある程度の人間の手が必要だと教えていただいたため、後継者を確保していくことが求められるのではないかと考えました。

戸沢村の後継者不足を解決するためには、まず戸沢村の存在を広く知ってもらうことが必要だと思います。そこで、私は体験型イベントを開催することを提案したいと思います。例えば、小学生の親子を対象にしたイベントで今回私たちが行ったような木工クラフトを材料探しからやってもらい、戸沢村ならではの豊かな自然を感じてもらい、木工クラフトで参加者全体の合作を作成し、山形のいろんな人に見てもらえる場所に展示することで参加者の方以外にも作品を見た人たちが戸沢村に興味を持つきっかけづくりになるのではないかと考えました。

他にも、フィールドラーニング中、地元の方から浄の滝トレッキングの道は整備も難しいと伺ったので、高校生や大学生、社会人の方向けに、トレッキングコースの途中にあるヒメサユリやダム、小川など指定した場所の写真を撮影してきてもらってスタンプラリーのようなことを行い、指定の写真を揃えられた人には戸沢村の山菜をプレゼントするというイベントを提案したいと思います。浄の滝だけでなく道中の景色やおいしい山菜を楽しむこともでき、写真に残してもらうことで見返したときにまた行きたいと思ってもらえる思い出にもなると思いました。また、イベントに併せて農家民宿の方にも協力してもらうことで戸沢村の優しい方々、おいしいごはん、戸沢村での気持ちのよい朝を体感してもらうことができ、戸沢村への移住を考えてくれる方も増えるのではないかと考えました。このフィールドラーニングでは山形県出身の私でも知らなかった戸沢村の良さを五感で感じることができ、また戸沢村に尋ねてみたいと感じる楽しい体験でした。同

じように多くの人にも体験してもらい、自然と共生していくことのできる戸沢村を守っていくとする人たちをもっと増やすために、戸沢村のお祭りなどのお手伝いをする事などで、この先も積極的にかかわっていききたいと思います。

工学部 Hさん

私は4日間のフィールドワークで戸沢村の皆さんや自然から自然と共生していく暮らしやSDGsの観点から環境保全の大切さや課題を学びました。

1日目はそば打ち体験、山菜採りを行いました。そば打ち体験は水の量やこねるときにとっても繊細な技術が必要で、難しかったです。午後からは山菜採りを行いました。人が山をきれいにして、山菜の採る量を調整することで、来年も再来年もおいしい山菜を食べられるよう工夫していることにとっても驚きました。さらに、大きくなったコシアブラの木は伐採し民芸品にすることや山の自然を展望台として利用していることにとっても驚きました。人が山の環境をよくすることで自分たちがおいしい山菜を食べられたり、観光に利用できたりと、自然と共生していく工夫を学びました。山にごみ一つも落ちていないことにとっても驚きました。しかし展望台に上る際、言われるまで入り口がわからなかったため看板が必要だと考えました。

2日目は間伐体験と山菜料理作りを行いました。間伐体験ではSDGs達成のために改善しなければならない問題の一つを知りました。それは後継者の問題であり、特に林業の衰退は日本の材木価格が下落することにより外国産の安い材木との差が大きくなることにより売れなくなる、1・2本ではお金にならないいうえ重機を使うとさらにお金がかかるということなどが要因になっています。しかし間伐は大切な作業であり、育ちの悪い木や枯れかかった木を伐採することで、森全体に光が入りやすくなりさらに育つだけでなく、土砂崩れなどの災害を未然に防ぐなどの効果もあります。一帯を伐採すれば効率はいいものの環境破壊となり生態系を崩すこととなるでしょう。私は国からの援助を増やすことで給料を上げることや生活手当などの暮らしの面でも何かしらの優遇が必要だと考えました。さらに興味を持ってもらう人を増やすため、体験会を開くだけでなくインディードやバイトルなどの求人サイトを積極的に活用するのによいと考えました。

3日目は白糸の滝まで散策したことにより、SDGsと観光や暮らしの関係の問題を知りました。間伐や

バイオマストイレの導入など、環境保全を意識していることや雪解け水による豊富な栄養素を持った水などにより、森の奥ではクロモジやトチの木などの珍しい植物などが育っていました。しかし、近年の異常気象により干ばつや洪水、土砂崩れが起ききれいな川には魚がおらず、砂防ダムの周辺一帯の木が枯れるなどの光景を見ました。温暖化の影響が見え隠れしていました。また、参道の舗装がほとんどされてないことにより、観光としても使える自然が保護地区ということもあり、整備に限界があることがSDGsと観光や暮らしの発展の両立の難しさだと考えました。私の意見としては整備によって観光客を増やすというよりは昔の状態に戻すような政策を行うことが先だとかんがえました。

4日目は木工クラフトとSDGsゲームを行いました。木工クラフトでは繁殖力と成長力が高いハンノキを使うことで間引きした木の活用法の一つを学びました。SDGsゲームではSDGsウェディングケーキモデルを戸沢や最上地方を中心としたゲーム形式で楽しく学ぶことが出来ました。一方で、SDGsそのもの課題や問題点として、人間の自己満足なのではないかと考えました。SDGsが達成できれば、貧困などがなくなりますが、それらのために行う政策が果たして自然環境にいいものかと言われると、必ずしもいいものではありませんし、他のゴールを目指すうえで矛盾している政策が多いと考えられるからです。

この4日間の体験を通して自然と共生していく暮らしやSDGsの観点から環境保全の大切さや課題を学びました。最上の課題やSDGsの課題は自分や少数の力ではどうしようもないと思いますが、もっと周りの人に知ってもらい解決に向けて動き出せるようひとつずつ自分にできることを見つけ出し、活動したいと考えました。



工学部 Sさん

今回のフィールドワークに参加して、協調性と責任感を成長させることができました。戸沢村は事前学習の段階から自然豊かでとても落ち着く村だなと感じていました。こういった場所でしかできない貴重な体験をたくさんさせていただきました。初日の蕎麦打ち体験では、こねる作業や生地を伸ばす作業がすごく大変で、職人さんのすごさを改めて感じる事ができた体験でした。山菜取りでは、自然に親しみながら楽しく活動できました。山菜をむやみに採るのではなく、後のことを考えて採る量をあらかじめ決めていたところに考えられているなと感じました。ウドやワラビなど、普通に生活しているだけでは出会えなかった美味しい山菜を知ることができてよかったです。二日目の山菜料理作りでは、どういう風に調理すれば美味しくなるかなどの知識をつけることができました。戸沢村で採れる山菜を使った料理をまとめたパンフレットみたいなものを作ると、山菜に興味をもってくれる人も増えるのではないかなと思いました。杉林の除伐・間伐体験では、目の前で木を切るのを見たのは初めてですごい迫力を感じました。木を倒す方向を事前に決めておいて、どのようにしたらその方向に木が倒れるのか考えながら作業するのは難しいことだなと思いました。また、ただ木を切るのではなく、切ったほうがいい木の見分け方や切った木の処理の大変さに気付くことができました。課題として、後継者の不足が問題だなと思いました。今回の体験のように、伐採するところを見ることのできる体験を増やしたりすることで、興味を持つ人が増えるのではないかなと思いました。三日目の浄の滝を見る体験では、普段あまり意識してこなかった自然を感じる事ができてとてもいい経験をすることができました。実際に見た浄の滝は、すごくきれいで迫力があって両岸に見える岩壁が特徴的でした。この滝を観光目的の一つとして滝を見ることのできるイベントなどをもっと作ると、観光客も増えて、また戸沢村の良さを広められるのではないかなと思いました。問題点としては、道中が険しすぎるところで、そこを改善すれば観光客の世代の幅を広げられるのではないかなと思いました。四日目の木工クラフトでは、木を切る作業に苦戦し、お手本のようにはできませんでした。しかし、仲間と協力することの大切さや楽しさを学ぶことができすごく楽しかったです。今回は材料がすべて用意されていたので、次は材料から森に入って自分で選ぶというのやってみようかなと思いました。SDGsゲームでは、地域の特産品をただ知るのではなく、それがSDGsとどうつながっているかなどゲームを通して知ることができるというのが面白かったです。ゲーム性自体もすごく考えられていて、子供から大人まで地域とSDGsの関係性について学びながら楽しめるというのがすごくいいなと思いました。全体の課題として、生産者の不足や後継ぎがないというのが問題になっ

ていると感じたので、実際に地域の野菜や特産品を作る体験や、食べてもらう機会を増やすことで、農業に興味を持つ人の増えるのではないかなと感じました。

工学部 Aさん

今回のフィールドワークを通して初めての経験を五感で感じる事ができました。そして、現地に行っただけからこそ見えてきた課題もあった。

まず、1回目の活動では主に、山菜採りと杉林の伐採をしました。山の中に入り、採りに行った山菜にはたくさんの種類があった。私は、あまり山菜について詳しく知らず、食べたこともあまりなかったことから、はじめは食べることを躊躇っていましたが、いざ食べてみるととても美味しく、それぞれに調理法の違い、味や食感の特徴があることや、現在ある料理の代用品としても使えることから、山菜の奥深さを知った。しかし、山菜の多くが種を蒔いてから収穫まで時間がかかることや、大量生産に不向きなことから、山菜の良さを伝えていくことも大切だが、乱獲などによって自然が破壊されることのないよう注意するなど山菜との関わり方などについても考えさせられた。次に、杉林の伐採は倒木の迫力に驚かされた。近年、人間の森林破壊が問題になっていますが、人間が森に入り、伐採を行うことが、新たな植物が育ちやすくなる美しい環境の保全や土砂崩れなどによる事故や災害の防止にもつながるということを知った。しかし、自分たちで実際に木を切ってみて、森林の伐採には多くの労力を要することが分かった。需要が高いはずの林業も若者減少により人口が減っている状況であるため、このような伐採の体験を通して、若者に社会にとっての林業の需要を知ってもらうなどの改善が必要だと思った。

次に、2回目の活動では主に、浄の滝登りや木工クラフト、SDGsゲームをしました。浄の滝登りは険しい道の連続でとても大変でしたが、素晴らしい景色を見ることができ、大きな達成感を得ることができました。木工クラフトは、とてもよい自然の利用方法だと思った。また、全て手作りであるため、個性的な作品が作れることから、子供や家族で来て楽しそうだなと思った。自然を身近に感じる事の出来る良い体験であると考えた。最後に、SDGsゲームでは、ゲームや動画を通して様々な学びを得られた。動画で紹介された、甚五右エ門芋や畑なすといった最上伝統野菜はぜひ一度食べてみたいと思った。古くから受け継がれてきた伝統の食べ物であるため、インターネットでの販売によってより多くの人に知ってもらい、食べてもらうことで残していければよいと考えた。

今回の活動を経て、戸沢村の課題を発見したと同時に見習うべき点についても発見した。戸沢村のある最上地域は、食料自給率が高く、水田が多いため限りあ

る資源である水をうまく活用してとても感動した。他にも、「やまがた森林ノミクス」といった自然を食物や観光資源、さらには発電といった様々な利用する方法も考えられていてとても興味深かった。

このように、戸沢村には多くの魅力が詰まっていることが分かった。しかし、その魅力をあまり伝えられていない現状があるため、インターネットなどを駆使した情報発信によって多くの人に戸沢村について知ってもらい、実際に来て体験してもらうことが地域の活性化にもつながると考えた。このような素晴らしい体験をさせていただき、戸沢村の皆さん本当にありがとうございました。

工学部 Hさん

戸沢村には多くの自然がある。山の中の山菜や浄の滝、森林などさまざまである。そこで私は戸沢村の魅力とその魅力をどうすれば多くの人に伝えられるか考察していきたいと思う。

第一回一日目の活動を通して戸沢村には多くの自然があることを身をもって感じた。山に山菜を取りに入った際今まで見たこともなかったような山菜を目にすることができた。また、その山菜を地元の方々が日常的に食べており、山菜を取りすぎてしまうと次の年生えてこなくなってしまうから取りすぎないようにするなどして大事な戸沢村の自然を守っていることを知った。山菜は塩漬けにして保存し冬の間も食べられるようにすると民宿で聞いたので昔ながらの知恵を使って今も生活しているのだと感じた。また、民宿で人手不足解消のために畑にまく農薬をドローンで撒いていると聞き、とても画期的な方法だと感じた。しかし、農薬をドローンで撒いたせいで毎年飛んでいた蛍がいなくなってしまうともおっしゃっていたので人で不足を機械で補えることは素晴らしいことだが、せっかく美しい自然が残っているのにそれを壊してしまってもったいないので何らかの対策をする必要があると考えた。第一回二日目の活動では初めて山菜料理を味わった。山菜は下ごしらえが大変でしたが手間をかけた分おいしくいただくことができた。料理を教えていただいた際家によって微妙に作り方が異なっているとおっしゃっていたので代々家で受け継がれてきた味がしっかりあるのだと感じた。木の伐採に関しては機械ではできないどの木を切るかの選定やほかの木に引っかからないように木を倒すなど今まではどのように行うのか想像していたつもりでしたが、実際に身をもって体験したところ想像よりはるかに大変で時間のかかる作業だった。また、植林などをした木を売りに出せるまで育てるには何十年もかかるとおっしゃっていたのでその間ずっと植えた木の世話をするのは大変だと考えた。

第二回目一日目の活動を通して大自然の壮大さを感じることができた。

実際に行くまでは少し山を登ったら滝が見えると考えていたが、実際に行ってみると一人で行ったら遭難すると感じるほどに道順が難しく険しい道のりだった。このように人の手があまり加わっていない場所だったので今まで見たことがなかった植物に出会えた。実際に足を運んでみないとわからないことが多くあった。浄の滝はまだ雪が残っており、滝の迫力もすさまじかったのでその景色は圧巻でした。この素晴らしい景色をより多くの方々に広げていきたいと考えた。

私が体験した活動を通して戸沢村の魅力が伝わったのでこの魅力をどのように多くの方々に伝えていけるのかを考えていく。私が特に取り上げたい戸沢村の魅力は山菜、森林、浄の滝についての三点だ。初めに山菜に関しては私がインターネットで調べた限り、わらびの収穫体験しか行っていなかったのでそのほかの山菜の収穫体験もできればさらに話題になると考えた。また、収穫体験に来た方々に戸沢村でとれる山菜の情報を書いたパンフレットを渡したり、その山菜の調理法を書いたものを渡せば、次はほかの山菜を取りたいと再び足を運んでもらえると考えた。この活動を通して、SDGsの17の目標のうち12、つくる責任つかう責任を達成できる。自分自身の手で収穫して調理まですることによって製造過程での食品ロスをなくせるからだ。次に森林についてだ。私は森林の間伐をしなくてはならないということを経験を通して初めて知った。このことから若い担い手がいらないのは自分たちにとって身近な仕事ではなく、どのような仕事をしているのか想像がつかないことも要因の一つだと考えた。この問題を解決するために間伐した木は学校などの床板や家具、文房具などにも使われていると知ったので、学校で間伐した木を使ってできていることを伝えるためにポスターを貼ったり、間伐材マークについてもっと多くの人が認識できるように学校の授業で扱ったりすべきだと考えた。この活動を通して、SDGsの17の目標のうち15、陸の豊かさを守ろうが達成できる。森林を整備することによって森を守ることができると考えた。最後に浄の滝につてだ。浄の滝はとても美しく多くの人に見てもらいたい場所の一つだ。しかし、歩道の整備は難しく浄の滝にたどり着くまでの道のりはかなり厳しいのが現状だ。よって私は、上っているときの映像や写真をSNSで発信するべきだと考えた。このようにすれば体が不自由な方も戸沢村の美しい景色を楽しむことができる上に、SNSで浄の滝を知り実際に足を運びに来てくれる方も訪れると考えた。この活動を通して、SDGsの17の目標のうち15、陸の豊かさを守ろうが達成できる。実際に体験することによってこの自然を守りたいと考える人が出てくると考えるからだ。

このように戸沢村の魅力がたくさんあることが分かった。しかし、魅力の一つである自然を守るためには多くの人の手と時間が必要であると感じた。多くの人に知ってもらい、訪れてもらうために若者層をターゲットにしたSNSを積極的に活用するべきだと考えた。また、戸沢村の発展とともにSDGsにも取り組めるので地球や人々を守ることもつながると考察した。

工学部 Aさん

私は、今回のものがみでのフィールドワークの体験を通して、経験していないことはまだまだあるということを感じました。私は初め戸沢村のイメージは道の駅と白糸の滝だけでした。しかし、今回のフィールドワークで戸沢村のおいしいご飯・山菜から、秘境の地である浄の滝、木の間伐を通して、戸沢村の良さを最大限受けることができ、考えを改められました。

そば打ちでは、初めて行ったわけではないですが、自分で作るとなるととても難しく、いつも食べているそばとは全く別のものができてしまいました。協力して作業を行えることはとても楽しかったです。戸沢村ではそばの実を減反政策によって栽培を始めたとお聞きしたので、体験の一つとしてそばの実から作る体験があればまた違った大変さと魅力があるのではないかと考えました。

山菜取りでは、山菜の知識がなく、どの山菜でどれくらいの量をとればいいのか分かりませんでした。したがって、戸沢村の観光ワラビ園に看板を立てるともっと楽しむことができるのではないかと考えました。看板は、ワラビの豆知識が書いてあるものを想定しています。

山菜料理では、今まで食べたことがあるものでもこれほどの手間がかかっていることを知らなかったし、初めて食べたものがこんなにもおいしいということは体験してみないと全くわからないことに気が付きました。今回の料理作りを通してコシアブラの天ぷらやウドと水菜のバター醤油炒めを作ることはできるのではないかと考えました。

杉の木の間伐では、木をチェーンソーで切り落としているのを目の前で見るととても迫力がありました。また、よく木にピンクや緑のカラーテープが巻いてあるのを見たことがあります。どの木を切るかという林業を行っている人の目印だと聞いてとても驚きでした。私はよく会社の事業で「〇本木を植えました」という記事を見たときに、この植えた木はどのように手入れをしているのだろうと考えるときがあります。したがって、戸沢村でもどこかの会社と提携を結んで戸沢村の山に木を植えて、管理も事業の一部にしてもらうことで、若者が一定期間くる理由になるのではないかと考えました。その間に戸沢村の良さをたくさん

知ってもらえるとよりいいなと考えます。

浄の滝のトレッキングでは想像よりも過酷で疲れましたが、登り切った後に見た滝はきれいであり、やりきった達成感とともに感動ものでした。この感動は全国の人々に知ってもらいたいとまで思いました。しかし、浄の滝のトレッキングは秘境の地にあるので誰もが見られるものではないとも思いました。戸沢村でも何度も改修工事をしていることをお聞きしましたが、全て冬になると雪の重みで壊されてしまったり、土砂崩れが起こって危険になったりと苦戦しているようでした。また、自然の保護区であるため私は、道を整備するのではなく、高校の山岳部に呼びかけをおこない来てもらったり、羽黒山にある茶店のようにトレッキングコースに建設したりすると、話題性が上がるのではないかと考えました。

最後にSDGsゲームでは、農作業を体験していないのに、体験したかのような知識量と楽しさを感じることができました。また、SDGs ウェディングケーキモデルを基本としていて、SDGsについても知らないことを知れて一石二鳥だとも感じました。このSDGsゲームはとてもよく作りこまれていると感じたので、大人数で遊べる人狼ゲームのようなアプリゲームとして、「家族やお友達と一緒に楽しく学ぼう」というキャッチフレーズのもと作成すると触れてくれる人が増えるのではないかと考えました。また、アプリ化が難しいようであれば、カードゲーム化をして、特に県内の小中学校で授業に使ってもらおうと、このカードゲームがつくられた戸沢村の道の駅に行ってみようとか、この角川カブ食べてみたいから買いに行こう、またはこのポンポ館楽しそうだから行ってみようという風に話題性が広がるのではないかと考えました。

ものがみのフィールドワークを通して、たくさんのことを経験し、たくさん戸沢村がこうなるといいなということを考えることができたいい時間だったなと感じました。これから個人でも戸沢村に行きたいと思えるほどにいい体験ができてよかったです。



工学部 Tさん

私は、戸沢村での四日間を過ごし、現地に行かなければわからない雄大な自然を学ぶことができました。

一回目の訪問、新庄駅からバスで戸沢村へと向かったのですが、大きな建物がある都市からだんだんと緑が目に入り、戸沢村に着くと見る限り山と畑で、家がぼつぼつと建っていました。人口の減少を感じる第一印象でしたが、我々を招いて下さったり、小学校などとの交流をしたりしていると知り、まだまだ活気のある村であると思いました。

そば打ちは、生地をこねる、のばす、切るなど、見よう見まねでやってみたのですが、これがまた難しく、あまり出来栄えよく作れませんでした。指導された方もまだまだ未熟だと言っていたので、そば打ちの奥深さを体験できました。

山菜採りでは、たくさんの山菜を採ろうと息巻いていたのですが、どれが食べられるものか判別がつかず、教師の方が採っているものに似ているものを採るばかりでした。私たちと教師の方では見える景色が違うのだろうと感じました。採った山菜は天ぷらやご飯に混ぜて食べました。想像以上に優しい味で、おいしく食べられました。多くの人に食べてもらいたいですが、山菜を採りすぎないようにしなければならぬため、折り合いが難しいと感じます。

林業体験では、実際に木を切るところを見たり、枝を切ったりして、山の管理、保全のしくみを学びました。この体験も山菜と同じく、限りがあるため、実際に体験する以外にも興味を持ってもらう方法がないか考えます。

二回目の訪問、険しい山道を超えて見た滝は恐ろしいほど雄大で、これまでの疲れを吹き飛ばすほどでした。道の途中で土砂崩れがあった跡やかつてイワナがいた川をみて、昨今の異常気象の影響を直に感じました。私たちの話し合いの中で、多くの人を呼び寄せるとしたら険しい道をどうかしないといけないとなり、様々な意見がでました。道を舗装するにしても自然を壊すことになるし、お金の問題もあるしで、難しいのですよね。私たちが看板を作るというものや、逆に険しさをアピールする、避暑地を売りにするなどの意見がありましたが、私たちができることを考え、これから検討していきます。

木工クラフトとSDGsゲームでは、どちらも戸沢村や最上の自然、特色を知ることができました。最上伝承野菜を作っている農家の方が、この野菜を絶やしたくないと言っていて、どうにかして私たちが戸沢村を発信できないかと話し合いました。SDGsゲームが意外と戦略性あって面白かったので、アプリにしたり、教育に使ったりなど広めようとするなどの意見もありました。最上に来てもらうことも重要ですが、知ってもらうための

足掛かりとして、私たちが山形市やほかの都市部に最上を伝えていくという方法もあると思います。どうやって発信していくかをこれから討論していきます。

工学部 Sさん

この度、フィールドワークの研修を終えて、まず最初にこの活動に参加してよかったなと思いました。普通に過ごしていたら経験できないことを経験させてもらいましたし、様々なことを考えさせられる活動になったと思います。

自分が戸沢村に行く前に最も興味があり、楽しみにしていたそば作りは均等に切れなかったり、こねるのが遅くなってしまったりなどの要因でおいしく作ることができず、失敗という形でおわってしまいましたが、そばを一から自分たちで作るという貴重な経験をさせてもらいとても楽しかったです。

その後は自分たちで山菜（ワラビ、フキ、ウド、ヨモギなど）をとり、あく抜きや葉をとるなどの下処理をして調理して食べました。特にヨモギの天ぷらがおいしかったです。

2日目には杉林の間伐・除伐を学び、実際に切るところを見せてもらいました。しかし昨今、全国で林業をする人が減っているという問題があり、どうしたらもっと増えるのか考えてみました。まず思いついたのは給料をよくするというものですが、それは海外の木を安く輸入できることや木の値段の関係上難しいということがわかりました。次に考えたのは職場体験をしてもらうというものです。確かに林業というのは木を切るのも大変で、危険を伴うものであり考えなければいけないことが多いです。しかし、職場体験を通して林業に興味を持ってくれる人が必ずいると考えました。

2回目の活動の1日目には滝を見るために、森を歩きましたが、あまりにも疲れすぎて景色を楽しむ余裕がなかったのがとても残念でした。また道がとても細く危ない道であり、上り下りがとても多くもっとしっかりとした道を作ればいいのか、と疑問に思いましたが、後に聞いてみると道を作っても土砂に流されてしまうなどの問題があり作ることができないと聞き、難しい問題なのだなと感じました。

木工クラフト体験では自分で木を切って動物を作りましたが、自分で木を探し自分で作る目標を決めオリジナルの物を作るのも楽しそうだなと感じました。

SDGsゲームでは戸沢村の特産品がどのようにできるのかを楽しく学べたと思います。また戸沢村には伝承野菜というものがあり、伝承野菜とは、戸沢村の方たちが作っている普通の野菜とは違う野菜であり、すごく興味を持ちました。しかし昨今、子供がいない農家の方たちが伝承野菜を伝えることができず、伝承野菜の栽培が

終わってしまう可能性があるという問題に直面しています。自分はこの伝承野菜をほかの人にも知ってもらいたいと思い、どうやったら知ってもらえるかを考えました。まず有名な人が伝承野菜を紹介するというものです。これはインターネットという便利なものがある昨今では有効だと考えます。またそのほかの案では全国の農学関係の学部にも所属している大学生に試しに作ってもらうというものです。これは気候の問題もあるので一概に有効だとは言えませんが、試してみる価値は大いにあると考えます。



農学部 0さん

1 回目の1日目にそば打ち体験と山菜取りを行いました。そば打ち体験では、水の配分や伸ばすときの力加減などにとっても苦労して、そば打ちの難しさを感じました。しかし、そば打ちでは普段食べているそばが作られている工程を知ることができ、とても新鮮でした。またそば打ちは1つのそばのたねに対して3、4人で行えるので、イベントなどを開くと人と人との交流もできると感じました。

山菜取りでは、自分ひとりで山を歩いていたらただの植物としか思わないものが、食べることでできる山菜だと知ってとても驚きました。山のいたるところに山菜があって村の方々に教えていただきながら、自分たちで山菜を取ったことにとっても充実感がありました。このように、普段山菜取りをしない人にとっては山菜取りをやってみたくても始めるには大きなハードルがあると思うので、現地の山のことをよく知っている地元の方によるサポートがある山菜取り教室などを開くことで、観光客を増加させるための1つの取り組みになると感じました。

2 日目の活動では、山菜料理作りと森林の間伐を行いました。まず、山菜料理作りでは、それぞれの山菜によって皮の剥き方のコツや味付けの仕方があり、それらを戸沢村に住んでいる民宿の方々と一緒に料理することで教えていただきながら知ることができました。

今回学んだ郷土料理の味つけや料理法を人口減少が続いている中でも残していくべきだと感じました。また、山菜を使った郷土料理の味を残していく一方で、山菜を使った新しい料理を作ることによって戸沢村の魅力を知らせてもらうことも町おこしには有効だと考えました。具体的な山菜を使った料理としてはわらびの粘り気を生かしたディップやうどの漬物などが作れると思います。

森林の間伐では、どの木を伐採すべきか自分たちで見極めて木にテープで印をつける作業をした後、チェーンソーを使った森林の伐採を見せていただきました。実際に森林の伐採を見るのは初めてだったので、木が倒れてくるときにとっても危険が伴う仕事だと感じました。また、地元の方のお話の中で、杉を植えてから収穫するまでに80年かかるため、自分が植えた杉は自分で収穫することがほぼ不可能で誰かに管理を引き継いでもらう必要があると聞き、人口減少の中での林業の難しさを知りました。戸沢村は山が多く森林資源が豊富であるため、林業従事者が増加すれば、戸沢村で働く人が増え、その労働者が戸沢村に住むことで結果的に人口を増加させることができるのではないかと考えました。

2 回目の1日目では浄の滝へのトレッキングを行いました。浄の滝までのコースはいくつかあり今回私たちは一番易しいコースでトレッキングを行いました。坂が急であったり、道が狭く一歩足を踏み外すと崖であるため集中しなければならなかったりと体力的にとってもハードなコースでした。そのため、観光向きというよりは、体力がつくものだと感じたため、体育会系の部活をしている山形県の高校生などに体力づくりの合宿として浄の滝へのコースを提供する取り組みを行うなどの事業を行うほうが有効だと考えました。

2 日目は木工クラフトとSDGsゲームを行いました。まず、木工クラフトでは戸沢村の木材を使ってパーツを作成しフクロウの置物を制作しました。同じパーツでもそれぞれの個性が出て大人も子どもも楽しめると思ったので、戸沢村で開かれるお祭りで木工クラフトのブースを作り、多くの人に楽しんでもらうことで、戸沢村の木材に興味を持ってもらう取り組みを行うべきだと思います。

SDGsゲームと農家さんのPR映像では、戸沢村でとれる野菜などの特産品を残していきたいという農家さんの強い気持ちを知ることができました。また、戸沢村でとれる自家採取作物は形や大きさが不揃いなので野菜などはカットして容器に詰め、山菜のディップとセットにして販売することも戸沢村を知ってもらう一つの手段として提案したいです。

農学部 Mさん

4日間の活動を通して戸沢村の方たちの地域を守りたいという思いを肌で感じることができました。

私たちは、5月13日にそば打ち体験をしました。水の加減や形成が非常に難しく一朝一夕ではいかなことがよく分かりました。そして、最終日の6月12日にお蕎麦屋さんの蕎麦をいただきましたが私たちが作ったものと麺の見た目から味まで全てが異なっていました。戸沢村では政府の減反政策によって使われなくなった田んぼを利用してそばを作っていると伺いました。私がお邪魔した農家民宿でもそばを販売しており、ひとつの特徴といえると思いました。

山菜採りや杉林、浄の滝のトレッキングコース、どこにいても戸沢村の森林はきれいな印象を受けました。これは、地域の方々が植林や間伐などを丁寧に行ってきた結果だとよくわかりました。「良い木を育てるために間伐は必要なことだが、山奥は重機が入ることが難しく運び出すまでにコストがかかる」と教えていただきました。森林をきれいに保つためにも課題があると知りました。

浄の滝までの道のりは整備がされておらず、自然のままの状態を感じました。地元の方の話によると整備しても雪崩などが起こるため崩壊してしまうそうです。私は自然と向き合うことの難しさを突き付けられた気がします。土砂崩れの影響を小さくするために人の手を加えることは可能だと思います。しかし、自然の美しさを欠くことになるので最善の方法だとは言いきれません。また、整備することで誰でも足を運びやすくなり観光地化を図れますが戸沢村の自然そのものを活かすことからは離れてしまうと思います。

SDGs ゲームは最上地域の伝承野菜やその保存法、行事について楽しみながら学ぶことができました。四季折々の生活や行事は地域に合った文化であり大切にされてきたものだと感じました。4日間だけでは学ぶことができなかった地域の方々の生活に触れられた気がします。

戸沢村がもつ魅力をそのまま活かして他の地域の人たちに伝えるためには今の状態から手を加えるよりも情報発信の仕方を工夫することだと私は思いました。例えば、地域外に出荷している山菜や野菜などにQRコードを添付し、それを読み込むと土づくりから収穫までの動画や生産者のインタビューが見られるようにすることです。また、同じページに戸沢村のホームページなどのリンクを貼ることでより興味、関心を持ってくれる人が増えるのではないかと思います。

戸沢村の方々は現状を打破しようと様々なことに取り組んでいました。その思いが地域外の人に伝わるように私たちも良い提案ができるように発表に向けて努めたいです。



言葉を正しく使う？

学士課程基盤教育院 阿部宇洋

私が学生の頃、「中等社会科の指導法」という講義が教員免許の取得のために必修であった。担当の先生は言葉一つひとつにこだわりのある非常に厳しい方だった。私が大学初年次教育に携わるようになってから、特に言葉の重要性に気づくようになった訳だが、当時の私にとっては煩わしさのほうに勝っていたが、当時言葉一つひとつの重要性に気づいていれば、人生が変わっていたかもしれないと思うことがよくある。

厳しく指導された言葉の中で、『地方』という言葉がある。国語辞典によると地方とは「(1)世界や国内の一部分。ある一定の地域。また、その土地。ある地域の名の下に添えて、その方面の地域の意を表わす場合もある。(2)首都など中心となる大きな都市以外の土地。じかた。(3)旧軍隊で、兵営外の「一般社会」をいうことば。」と解説される。そしてその語誌として「(1)室町時代から江戸時代にかけては「ぢ(じ)かた」とも読まれ、江戸時代には町方に対することばとして農村や田舎を意味したり、田制や土地制度や民政一般をさしたりした。(2)地域名の下に添えて「関東地方」「ヨーロッパ地方」などという使い方は(1)の挙例、新井白石の「采覧異言」や「西洋紀聞」などが早い。(3)明治以降、ヨーロッパの制度を模倣した行政制度や中央集権的国家整備の下で必須のことばとなって「地方行政」「地方裁判所」「地方自治」「地方税」その他多くの複合語も生まれ、日常語としても急速に普及した。」と記載される。

この『地方』であるが、我々の生活では、毎日の天気予報やニュースなどで耳にすることが多い。例えば、「今日の天気です。最上地方、雨。ところにより雷が鳴るでしょう。」や「庄内地方のニュースです。」など「地方は差別的意味合いを含む」と指導された身としてはなんとも不思議な感覚になる。そこまで深く考える問題ではないと指摘される事もあるが、言葉の選択によって大きな誤解が生まれることもあるし、今まで積み上げてきたものを失う人もいる。

現代では「言葉を狩る」という表現になるが、私は、この言葉を狩るという表現も好きではない。誤用に関しては適切に指摘すればよいのだが、その言葉を扱った人物の誹謗中傷を伴う場合も少なくない。その後、言葉を否定する環境が構築され、個人の人格否定そのものに遷移してゆく。文章そのもののみを指摘することは稀で、狩られるのは言葉の中でも単語に終始するわけであるが、私は言葉狩りをする不特定多数の人物、コミュニティーを「a word killer (単にワードキラーとも)」と呼称している。言葉を狩るものではなく、言葉を殺すものという意図の造語である。なにをもって不適切な言葉なのか。はつきり指摘される、指摘できる場合もあるが、曖昧な場合が散見される。

彼らワードキラーの住処はもっぱら X (旧 Twitter) などの匿名社会である。そして、「なんとなく使ってはいけない用語」であるから非難するというなんとも大雑把な理由で言葉狩りを行っている傾向を感じる。

この地方、地域の使い分け問題も同様で、意味や背景を知っている人と知らない人と

では大きな差が生じる。また、放送禁止用語などの自主規制用語が全て正しいと思う人がほとんどかと思われる。このようなときに、仮に研究が進み、『地方』が自主規制用語になった時に X (旧 Twitter) で、「地方というのは、差別的な要素が歴史的にある！！使用しているテレビ局〇〇！！」などと書き込めば私もワードキラーの仲間入りをするわけであるが、このときに地方をあえて利用する意味を考えると踏みとどまれるはずである。

この場合の『地方』を利用する意味は一般的に認知されている地域区分名称が「〇〇地方」である、わかりやすく生活に馴染んでいるからというだけのことである。用語的な正しさは一般化に対して変化するものでもあり、状況によっても適切さは変化するのである。¹

言語学を専門としているわけではないが、民俗学の中でも、方言や言葉の問題は大きく、その伝播伝承に関しては研究も多い。その些細な言葉の使い方その言葉の歴史性を追おうとした時代もあったようだが、現代を対象とすると途端に難しくなる。さらに、ワードキラーも新しい用語に関しては太刀打ちができていないようである。

例えば、ギャル語と言われる分野は毎年の流行語というよりも、利用後のサイクルが極端に早く、ギャル流行語大賞を見ても前年の流行語が次年に流行することはなく、死語もしくはギャルの日常用語になっていたりもする。近年、その再生産の傾向も見

られ、1995 年近辺で利用された「チョベリグ」なども入賞している。日常用語になっていれば語彙として歴史をたどれる可能性は多少見えるかも知れないが、この単語の創作と時代的な解釈、意味の流動性は気にしなければならない。

またギャル語が一般化している単語「それな」「おけ」「ガチ」や、オタク用語やネット用語からの転用とも考えられる「アゲ、サゲ」「神」「ktrk」などもあり興味深い現象となっている。ただし、後者の転用はどちらが先かは判断が付きにくい状況である。

言葉の問題に関して、狩る者、創作する者、変質させる者など様々見ることができ、その状況で使い分ける術が誰しも必要である。

フィードバックで学生と会話する機会があると、「それな」や「あいつはしごできでエグちなんですよ。」と返されることもあった。私の通常コミュニケーションでは認許の範囲であるが、これも、年齢、性別、社会的な情報（地位など）、状況によって使い分けが必要だ。²

さて、これから授業中に「それな」「知らんけど」などが返答されたらどうしようか。

この原稿を起稿している現在「厳しい戦い」で「キャバい」状況である事は「ぴえんこえてばおん」である。「しごでき」は本当に羨ましい。「メンケア」して欲しい状況である。

¹ 山形県では、べにばな国体の際に、「部落」という用語に関する議論があった。

² これらの用語の意味がわからない読者も

いるかと思うが、ぜひ意味も調べて欲しい。

などの文章が当たり前論文などや公的文章で使われることはまず、ないと思うし、私自身こういった機会がなければ一生使わない言葉であろう。日本がギャル国家になり、ギャル語が公用語になれば別であろうが。

新しい言葉はその形やイメージが整っていないためか、ワードキラーも指摘できない。その新しさや言葉の用途を今の社会では理解できない新世界がギャル語界隈にあり、ギャル語として確立しインパクトのある、強い言葉に成長したのだと考えている。

言葉を正しく使う際、誰のための、誰にとっての正しさなのか、社会や状況をしつかりと見極め、気をつけたいところである。言葉の使い方には教育者としては『教えるべき言葉』が重要である。しかし、ギャル語のように、(ちょっと特殊ではあるが)『社会として認知される言葉』『認知させたい言葉』『ある一定のコミュニティーのみ成立する言葉』を認めることも重要である。

フィールドにはそのような言葉があふれている。言葉を狩ることに終始する社会ではなく、言葉を理解する、考える社会が真っ当だと思いたい。

最後に、2020年大ヒットしたAdoの『うっせえわ』の冒頭には「正しさとは愚かさとはそれが何か見せつけてやる」といった歌詞がある。匿名者に言葉を狩られる閉塞感、指摘、批判される社会に対する叫びなのかも知れない。

参考文献

兼子仁「地域自治体制の確立をめざして」
『自治総研通巻 439号』(2015)

『ギャル流行語大賞 2022 HP』
<https://grpaward.com/> (2024/3/1 参照)

「フィールドラーニング—共生の森もがみ」
エッセイ

「課題探求に関するアンケート」から

山形大学基盤教育院 橋爪孝夫

山形大学「フィールドラーニング—共生の森もがみ」は、授業としては基幹科目の中の「山形から考える」という科目区分で実施されている。基幹科目にはほかに「人間・共生を考える」という科目区分もあり、どちらも「少人数・アクティブラーニング型」という授業実施の特徴を持っている。

このような授業形態の基底には、過去の「フィールドワーク—共生の森もがみ」時代からの「学生主体型授業」という伝統的発想があり、授業を受ける＝受け身の学習という従来の大学における「講義型」授業の構造を改革することが企図されている。

基幹科目では、これに加えてさらに、単に「主体的」な授業参加を促すのみならず、特定のテーマを定めてそれに対する「課題発見・探求」に取り組むこと、探求的な学びが重視されている。これは高年次における卒業研究／論文・ゼミの活動を念頭に置いて、初年次から探求学習に取り組むことでいわば「トレーニング」の機会を作る話となる。

この初年次における課題発見・探求的な学びが授業設計のとおりに行われているかどうかを評価するために「課題探求に関するアンケート」を実施している。アンケートは全6問で、最初の4問が5件法での回答、後の2問が自由記述形式の回答で構成され、設問内容は以下になっている。

1. 書籍や雑誌、新聞、テレビなどを通して、これまでに【地域の実情】について聞いたり学んだことがある。

2. これまでに【地域の実情】について自分

なりに考えを深めたり探究したことがある。

3. 【地域の実情】について自分なりに考えたことを他者に発表したり、一緒に議論したいと思っている。

4. 【地域に行って】学んだことで、自分なりの「気づき」があった。

5. 問4で「気づき」があったと回答した人は、どんな内容か詳しく教えてください。

6. 問4で「気づき」があったと回答した人は、それをきっかけに更に調べてみるなど、何か行動したことがありますか。あれば教えてください。

また授業での学びを開始する以前(4月：有効回答数66)と、学びを終えた後(7月：有効回答数74)のプレポストで実施し、学びの経験による回答の変化を見られる設計となっている。

このアンケートの令和5(2023)年度の結果から考えられることを見てみたい。問1から4に関しては「1. いいえ 2. あまりそうとは言えない 3. どちらともいえない 4. まあそうである 5. はい」という回答選択肢で、肯定的な回答ほど選んだ際のポイントが高い形で集計するようになっている。回答の平均ポイント(小数点以下第二位四捨五入)の変化を見てみると以下のようにになっている。

	問1	問2	問3	問4
Pre	3.4	3.2	4	2.6
Post	3	2.9	3.5	3.9

回答の変化をポイントで見られる前4問のうち3問において、-0.4ポイント、-0.3ポイント、-0.5ポイントと肯定的回答のポイントが低下してしまっている。ただし、唯一肯定的回答のポイントが伸びている問4に関しては+1.3ポイントと、顕著な伸び具

合を示してもいる。

唯一伸びている問4に関しては、後の2問の回答として自由記述で内容の詳細を訪ねている。ポイント変化の原因を考察する手掛かりとして自由記述の回答件数を見ると、以下のようにになっている。

・問5プレ：回答数14件

ポスト：回答数50件

・問6プレ：回答数10件

ポスト：回答数28件

ここでは回答件数だけをまとめたが、たとえば問5のプレに関しては未だ現地でのフィールドラーニングを体験していないので当然だが「気づき」を得ている人の少なさがわかる。これが地域活動を経た後のポストになると3倍以上の回答数になっていることから、実際の地域活動から「気づき」を得る学生が多いということは言えるだろう。

また、単に「気づき」を得るところから一歩踏み出した具体的な活動をしたかどうかを尋ねる問6に関しては、問5より回答へのハードルが高いことが考えられ、実際に寄せられた回答の件数もプレポスト共に問5を下回っている。

しかしこちらも比較をすればプレに対して約3倍の回答数がポストでは寄せられており、地域活動を体験したことが「気づき」だけでなく具体的な調査や行動につながっている可能性は高いと考えられる。

この、自由記述の回答記述件数を見た後であらためて問1-4について考えてみると、学生に大きなインパクトを与える地域でのフィールドラーニング活動に取り組む以前の、授業を履修しただけの段階での回答では、良い意味で「気軽に」地域の実情について興味を持っている、考えたことがある、行

動したいなどと回答しやすかったものが、実際の地域活動を体験した後は具体的なハードルの高さ、困難さなどに思い至り、気軽には「はい」「まあそうである」などは答え難くなっていることが考えられる。この推論に立てば、回答の平均ポイントが低下したことも理解できる。

上記は推論ではあるが、全てのポイントが下がっているわけではなく、自由記述から具体的な「気づき」や主体的な活動につながっていることが明らかになっている問4については回答の平均ポイントが大幅に上昇していることから、授業を履修した山大学生の真面目さ、地域に実際に赴いたことによるインパクトなどに鑑み、ある程度の信憑性があると考えている。

ポイントの低下については今年度たまたま、という問題なのか、今後も継続していくのか、経年で、及び他の授業と比較していくことが必要と考えられる。

また自由記述問題に関しては、特に問6について、フィールドラーニングのプログラムの中で地域に「気づき」を持ち、それを手掛かりに活動を深めた授業履修者は多く居ると考えられるのだが、アンケート回答件数で見ると回答者が一部に留まっているようにも見える。一つの考え方だが、もし授業（内のフィールドラーニング体験）での「気づき」から「調べ学習・活動」への流れが、自らの主体的な動きとしてではなく、定められた地域活動プログラムの通りに行動しているだけ、という意識で参加している学生がいるとすれば、山形大学の「学生主体型授業」の流れを汲む企画としては改善の必要がある。調査を継続し、経年の変化を注視して行きたい。

「フィールドラーニング

ー共生の森もがみ」コラム

地域系科目において受講生に対する SA
の接し方はどのように変化するか

山形大学 地域教育文化学部
講師 菊田尚人

本コラムでは、地域系科目である「フィールドラーニングー共生の森もがみー」（以下、FL もがみ）の授業に参加する SA(Student Assistant)の語りを通して、SA が受講生への接し方を向上させている姿の具体を示したい。

FL もがみでは、SA として参加している学生に対してインタビュー調査を行い、SA から見た授業の様相や改善点などの知見を蓄積している(菊田他 2023)。このインタビューは、山形大学地域教育文化学部倫理委員会より承認（承認番号 2021-31）を得て実施しており、インタビューへ協力することの同意書も得ている。

その中で、受講生へ接する際の SA などの配慮の仕方を、活動の中で自主的に学んでいることが分かってきた。特に、SA としての参加が2年目の学生にもなると、受講生への接し方に関する学びがどうして得られたのかを、自分の言葉で振り返って語ることも十分にできるようになる。

今回は、参加2年目の SA である K さんが、「受講生に対する信頼の醸成」と「受講生の学びにおける失敗の重要性への気づき」を通して、受講生への接し方を変化させている様子を、K さんの実際の語りを引用しながら紹介する。

第一に、「受講生に対する信頼の醸成」によって、K さんは受講生へのアドバイスを控え、受講生の判断や行動に任せることを意識するように、接し方を更新している。

K さんは、昨年度の自分が受講生を自分の想定する行動に促すことを強く意識していたことについて、「去年は走り出しがそもそもうまくできないと、というところの意図が大きかったので。走り出すためのがちりとしたレール造りをしていうのを結構中心的にやってはいました」と振り返りながら、「でもなんやかんや走ることではできるな」と、実際には受講生が活動の中で自分たちで動いているという手応えをもったことを語っている。その経験を踏まえて、今年度の活動では間接的にサポートするという形を意識するようになったと語っている。「動き始めてからどこをどう考えなきゃいけないのかとか、考えるポイントってというのがここが足りなかったからここについてはもう少し考えなきゃいけないとか」といったことも、直接示すのではなく、あくまでサポートとして動くようになったという。

このように、K さんが受講生に対する接し方をサポートとしての関わりに意識的に変化させた背景として、受講生を丁寧に導かなくても自分たちでどうにか動くことができるはずだという、受講生に対する信頼の醸成があったことが明らかになった。

第二に、「受講生の学びにおける失敗の重要性への気づき」を通して、K さんは受講生の失敗を過度に回避するのではなく、その場の状況に任せることを意識するように、接し方を更新している。

Kさんは、昨年度の活動でのアクシデントの場면을フォローしたことについて、「まあ、そこで彼らが一回失敗し、完全にその配信という風な名目では失敗したっていう経験でもよかったのかもしれない」と失敗に対する自身の価値観や行動を相対化している。こうした相対化を踏まえて、今年度の活動では、受講生が自主的に動く姿が見られたために、「強く言うところもなかった」と語っている。

このように、Kさんの受講生に対する接し方の変化の背景には、昨年度の活動を通して、受講生の失敗の価値についての気づきがあったことが明らかになった。

今回のKさんと同様に、SAは活動中の様々な出来事から受講生への接し方を自主的に向上させている。SAの学びの実態に迫ることができる彼らの語りを、これからも丁寧に収集していきたい。

参考文献

菊田尚人・阿部宇洋・橋爪孝夫(2023)「地域での体験活動を中心とする科目でのSAの自主的な学びの様相—『フィールドラーニング—共生の森もがみ』でのインタビュー調査を通して—」『山形大学 教職・教育実践研究』第18号, pp.67-75

山形大学エリアキャンパスもがみ運営会議委員名簿

令和6年3月31日現在

山形大学

エリアキャンパスもがみキャンパス長	大 西 彰 正	小白川キャンパス長
人文社会科学部	松 本 邦 彦	教 授
地域教育文化学部(教育実践研究科)	江 間 史 明	教 授
理学部	栗 山 恭 直	教 授
医学部	後 藤 薫	教 授
工学部	木 俣 光 正	教 授
農学部	網 干 貴 子	准 教 授
学士課程基盤教育院	阿 部 宇 洋	講 師
エンロールメント・マネジメント部	菊 地 吉 見	教務課長

最上地域

新庄市教育委員会	高 野 博	教育長
金山町教育委員会	須 藤 信 一	教育長
最上町教育委員会	中 嶋 晴 幸	教育長
舟形町教育委員会	伊 藤 幸 一	教育長
真室川町教育委員会	門 脇 昭	教育長
大蔵村教育委員会	有 馬 眞 裕	教育長
鮭川村教育委員会	姉 崎 秀 悦	教育長
戸沢村教育委員会	市 川 重 保	教育長
高等学校長会	石 山 宣 浩	代表(新庄北高等学校長)
最上地方町村会	大 友 弘 克	事務局長
NPO法人田舎体験塾つのかわの里	沼 澤 吉 己	代表

オブザーバー

山形県最上総合支庁総務課連携支援室長 高 橋 光 一 郎

エリアキャンパスもがみ事務局

(大学事務局)

学士課程基盤教育院	三 上 英 司
エンロールメント・マネジメント部	沼 澤 利 光
同	柿 崎 利 津 子
同	國 分 聡 子
同	須 藤 賢 一 郎
同	齋 藤 絵 里

(最上事務局)

事務局長	岸 隆 一
事務局員	澤 野 ひろみ

エリアキャンパスもがみ研究年報2023

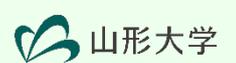
エリアキャンパスもがみ 令和5年度 事業報告書

令和6年(2024年)3月31日

編集：山形大学エリアキャンパスもがみ



エリアキャンパスもがみ



教育企画・教学マネジメント部門（エンロールメント・マネジメント部教務課教育企画担当）

事務局 TEL：023-628-4720 FAX：023-628-4836

〒990-8560 山形市小白川町 1-4-12 E-mail yu-syugaku@jm.kj.yamagata-u.ac.jp